

### 箏曲考叙言

夫歌曲之解不可無也。亦可無也。曲有詞。詞有義。義得解而拆。義拆而情可得。情得而可彈矣。此所不可無也。解或一失則情義乖而琴以繆。此所不可無也。曩者有命爲宮鶯解。繼有今命古曲十四。表六曲裏四曲與四曲合之十四曲四季源氏一曲秘而不輒傳故世俗總稱二十三組矣新曲與宮鶯二十有一。其有聲而無詞者七不與焉。翫其詞多采源語勢語及和詞與詩。間亦有私意者。因搜索本據。旁引似者悉爲之解。然不殺質言。唯恐不免膠柱之譏矣。冀識者更張焉。我邦所傳稱古樂者孟唐之遺云。雖聲調爾雅唯有譜而無詞。俗間所傳箏曲。雖有詞而曼聲艷詞亦如之何。傳曰今之樂猶古之樂也。雖箏曲亦猶如此。盖在用之何如乎。君子齊治之餘。花筵月樓雪窓雨閨興賞不已。斷章取義供間適之翫可矣。

天明 丙午 夏 五月

立木 信憲 謹 錄

### 箏曲考に題す

### 箏曲考目錄

#### 卷之一

表

露

梅枝

心盡

天下泰平

薄雪

雪晨

六段之調子

#### 卷之二

裏

雲ノ上

薄衣

桐壺

四季友

此集に載るところの曲、言葉なきものなつをのぞき、ふるきあたらしき、すべてみそじあまりいつゝあり。其言葉もてあそぶにおほく源氏伊勢ものがたりにもとづき、そのほかからやまとの歌によりて作れり。こゝにおいて、こゝろみに萬葉六帖二十一代の集、夫木明題の集、文集のたぐひを捜し索め、かたはら史傳雜著等を引徴して註し、證歌いまだ見あたらざるは、極似たる歌を引、しばらくするしてのちの考をまつ。かくて日に積り、月に累りて、遂に四の巻となれり。なづけて箏曲考といふ。もとより歌のこゝろ、言葉のをもむきをもわかまへず、見るところも陋ければ、紕繆もすくなからず、遺りもるゝ事もおほかるべし。しれる人、幸にこれが逮ばざるをたすけ、誤りを正し、遺れるをおぎなはむ事をこひねがふのみ。



八段之調子  
亂輪舌

中

須磨

明石

末ノ松

空蟬

四季富士

雲井弄齋

九段之調子

七段之調子

五段之調子

卷之三

奥

三曲

四季ノ曲

扇ノ曲

二長

中

玉鬘

六玉川

四季戀

三調

奥

宮簞

雲井曲  
四季ノ源氏

新組

雲井九段

羽衣

若葉

思河

橋姫

新雲井弄齋

飛燕曲

卷之四

新曲九段

表

友千鳥

裏

雪月花

浮舟

箏曲考 卷之一

(用字假名遺原本ノママ)

落

是唱歌のはじめのふきを取て曲に號なづく詩經の關雎くわんしよふつたん葛覃こくたんの類るいのへいみやう名なと同じ義なり此組を越天樂ともいふは其説後に出

序

ふきといふも草の名、めうがといふも草の名。

富貴自在ふきじざい徳ありて、冥加みやうがあらせたまへや。

此唱歌は詩經の興の體なり。興とは彼物を見るにつけて、此事をおもひおこしいひのぶるをいふ。たとへば

桃もも之の天あま々々灼やく々々其華そのはな之子そのこ于歸よこ宜よろ其室そのむろ家かニニ

といふ詩のごとく、仲春は婚姻の時節なり。桃のわかわかとして、花のさかりにうるはしく咲たるを見て、あの桃のごとく、こゝに容貌うるはしく行儀正しきむ



すめあり。このむすめこゝに嫁せば、夫によくつかへ、家内の人々にもむつまじく、かならず家もよろしくとのふべしといふたぐひなり。又ことばのひびきによりて興する事あり。

萬葉集 寄三和琴二歌

膝にふす玉の小琴の事なくば、いとかくばかりわがこひんやも。

といふたぐひにて、玉の小琴といふよりことなくばとことばを興せり。かりにも近付よりてわりなき事なかりせば、且亦平家物語に三位中將重衡囚れて鎌倉へ下り、狩野介宗茂にあづけらる。頼朝より手越の長者がむすめ千手前に酌執せてなぐさめ給ふ。其事を述べていはく。

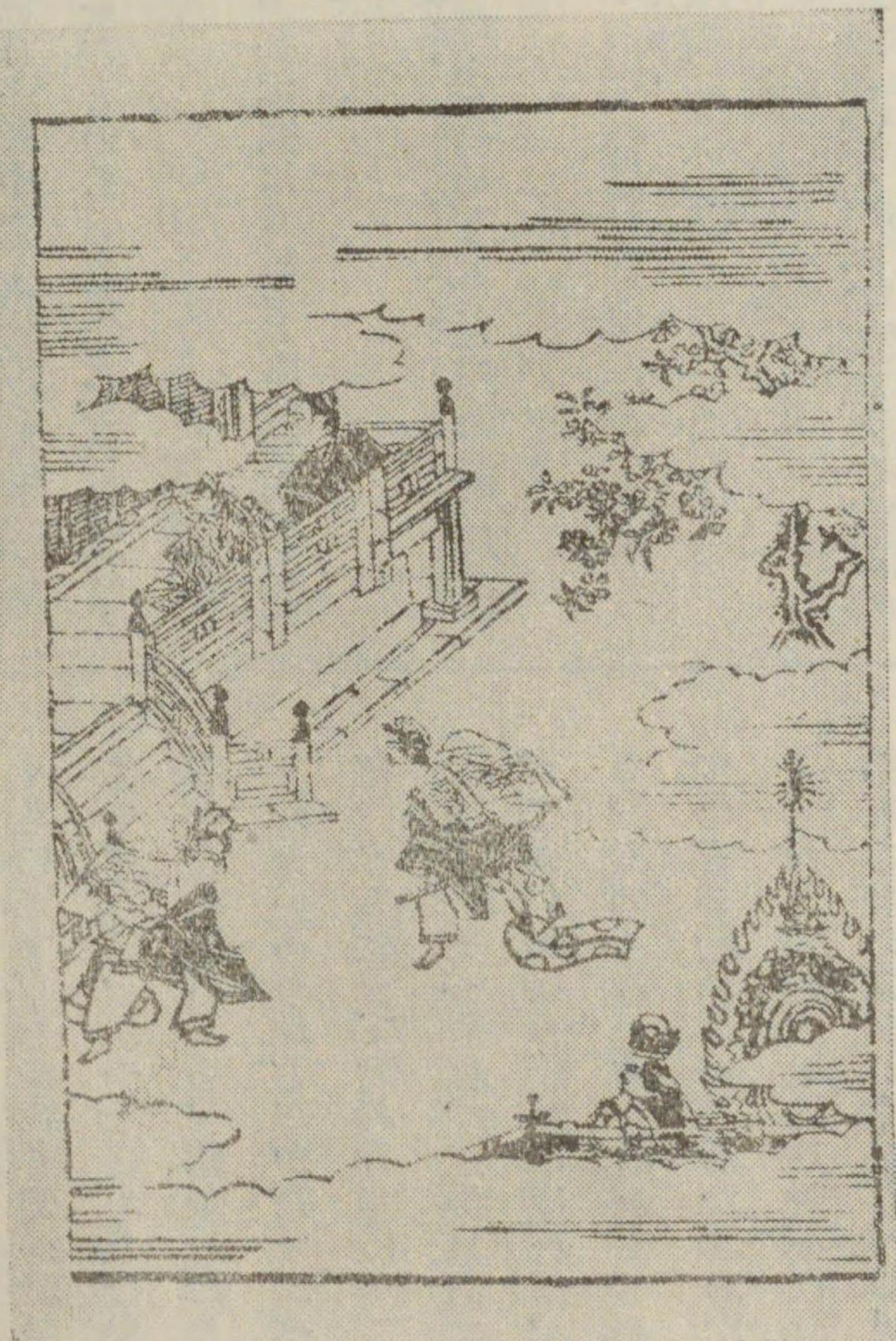
中將盃を傾ける。千手前たまわりて狩野介にさす。宗茂がのむ時に箏をぞ弾すましたる。三位中將普通には此樂をば五常樂といへども、今重衡の爲には後生樂とこそ觀すべけれ。やがて往生の急をひかんと戯に琵琶をとり、轉手をねぢりて皇覽の

まはするに、のがれがたくて、たちてのどかに袖をかへす所を、ひとおれけしきばかり舞給へるに、似るべきものなく見ゆ。頭の中將いづらをそしとあれば、りうくわゑんといふ舞を、これは今すこ

しうちすぐして、かゝること  
もやと心づかひ  
やしけん、いと  
おもしろけれ  
ば、御衣たまは  
りて、いとめづ  
らしき事に人お  
もへり。

とあるを取て作れる  
なり。舞の折ふし柳

花の苑にて鶯のさへづり 柳花苑春鶯囀の樂に相和して、をのづから名にも應じて面白しといふ心にて、同じ曲をさへづるといへり。



三月のまへのしらべは、よさむをつぐる秋風、雲井のかりがねは、こと柱におつるこゑく。是秋の夜月に對して箏をしらぶる夜さむの風をとづれ、空とぶ雁の聲もおち、清風朗月鳴雁瑤箏ともにさ

へわたれる夜、興をのべたる唱歌なり。絃上の趣それいかん。

夫木鈔 天慶三  
年宰相  
中將家  
屏風月  
に琴ひ  
くをよ  
める

つらゆき

ひく琴の手のうちつけに月影も秋の雪かとおどろかれつゝ。

急をぞ弾れける。

是其聲のひびきをとりて、皇覽を往生、五常樂を後生樂に興ぜしたぐひにて、此唱哥もふきといふ草の名のひびきによりて、富貴を興じ、めうがといふ草の名によりて冥加を興じ、富貴自在にして恩徳のめぐみあらせ給へや、神明の冥利加護あらせ給へやといひのる情をのべたり。

二春の花のきんぎよく、くわふらくにりうくわゑん、りうくわゑんのうぐるすは、おなじきよくをさへづる。

和風樂、柳花苑みな變調の曲なり。源順の倭名鈔に出。

此唱歌は源氏物語花の宴の卷に、

二月廿日あまり南殿の櫻の宴させ給ふ。やうやう入目になる程に、春の鶯囀るといふ舞いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀の折おほし出られて、春宮かざしたまはせて、せちにせめのた



同集に 永久四年百首 箏 俊頼朝臣

ことのねのことちにむせぶゆふ暮はけもいよたちぬすゝる寒さよ。

同集に 文應元年毎日一首中 民部卿爲家

みどりなる玉のごとのことちかと、見れば音する秋のかりがね。

是等の歌の情興あり。是本據ならねど、序所謂旁三引似者也

四 長生殿の裡には春秋を富めり不老門の前には月の影遅し。

此唱歌は朗詠集保胤の詩、

長生殿裡春秋富、不老門前日月遅。

とあるを寫せるなり。長生殿不老門は禁裡をいはひ奉りてなづけいふなり。春秋富とはゆくさきの年長きをいふ。日月遅とは月日のめぐりをそくして、はやた、ずといふ義なり。

五 弘徽殿の細殿に竹むは誰々、朧月夜の尙侍のか

とぞおもふ。

とて、やをらいだきおろして、戸はおしたてつ。

とあるをとりて、作れる唱歌なり。

朧月夜の尙侍は弘徽殿女御の御妹なり。源氏の君、

此時はいまだ中將なれど、後に大將にならせ給ふゆへ、光る源氏の大将といえるなり。あとよりい

へる言葉なり。物語に引し朧月の歌は新古今に

文集嘉陵春夜詩不明不暗朧々月といへる事をよ

み侍ける

大江 千里

照もせずくもりもはてぬ春の夜の、おほろ月夜にしくものぞなき。

六 誰ぞや此の夜中にさいたるかどをたゞくは。たゞくともよもあけじ、宵のやくそくなければ。

案するに此唱歌皆女に懸て見るべきがごとき言葉つきに見ゆれども、さありては情淺く覺ゆ。夫れ風の音水鶏のたゞくさへ人のたゞくかとおもひ、且新後撰資季の歌に問るべきそのあらましに槇の戸をたのめぬ夜半もさいで明ぬる。男女の間はかやうにありてこそほ

み、光る源氏の大将

かの花の宴の夜の事を卷の詞に

月いとあかうさしいで、おかしきを、源氏の君ゑひごちに見すがしがたく覺へ給ひければ、上の人々をうちやすみて、かやうにおもひかけぬ程、もしさりぬべきひまもやあると、藤壺わたりをわりなくしのびて、うかゞいありけど、かたらふべき戸口もさしてければ、うち歎きて猶あらしに、こうきでんのほそどのに立よりたまへれば、三の口あたり女御は上の御局にやがてまいのほり給ひにければ、人すくななるけはひなり。奥のくるゝどもあきて、人音もせずやをらのほりてのぞき給ふ。いとわかうおかしけなる聲のなべての人とは聞えぬ、おほろ月夜に似るものぞなきとうち誦してこなたざまにくるものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへ給ふ。女おそろしとおもへるけしきにて、あなむくつけ、こはたぞとのたまへど、なにかうとましきとて、

深き夜のあはれをしるも入月のおほろけならぬ契

意なれ。それゆへ、たそや此夜中にさいたる門をた、

くはまでを女のおもふに懸て、契らぬ夜の事なれば、

門たゞくを聞て、もしや其人にてはあるまじきかと、

おもひすすすことに見、たゞくともよもあけじ、宵の

約束なければは、おとこのおもふに懸て、宵のやくそ

くなく、おもひまふけぬ事なれば、たゞくともよも聞

つけまじ、よもあけまじと、門たゞくうちにもおもひ

なやむ意に見れば、唱歌の情深くして面白し。此作體

催馬樂あづまの作體にひとし。東屋

四阿の母屋の軒の其の雨濺ぎ。我立沾ぬ殿戸開か

せ。鏡も鎖しもあらばこそ、其の殿戸われさゝめ、

おしひらひてきませ、われやひとづま。

此や文字われや人妻か人の妻にはあらずといふ言葉な

り。是殿戸ひらかせまでは男の詞、かすがいもとざし

もといふより以下は女のことばなり。此組の唱歌も此

作躰になぞらへて、はじめを女に懸をはりを男に懸て

しるべし。

七七尺の屏風も、跳らばなどかこえざらむ。



羅綾のたもともひかばなどかきれざらむ。

史記の荆軻が傳と註とを以て考るに燕の國の太子丹といふ人、秦の始皇の方に人質となりて居たりしが、秦を逃れ歸り、燕の爲に讎を報んとて、荆軻といふ氣慨のあるたのもしき人をたのみける。荆軻秦の宮中へたばかり入、始皇帝に目見えてちかより、始皇帝の袖をとらへ、匕首といふて短き劍を以て始皇の胸へさしつけしに、始皇せんかたなく、此場にいたりてのがるゝ義なし。いかにもそなたのはからいにまかすべし。去ながら、せめての名残りに、わが日比愛する女の琴を聽事をゆるせよとて、彼の寵姫に命じて琴を弾しめ給ふ。其琴の唱歌に、うすものゝひとへのきぬなれば、ひきさきなば引切らるべし。八尺のたかき屏風なりとも、おどりこえなば飛越さるべし。帯にさけたる太刀なれば、たとひ太刀長くとも、肩へとどくやうにおひなば、鞘を拔事成べしと、始皇を諭して云ふを聞給ひ、終に荆軻がとらへし袖をひきり、屏風を越てにけ走れりといふ其事。

かくのごとく、此組の第二段三段七段と唱歌同じ。又春臺の書し獨語に。

箏は本樂器にて、管絃のみに入しに、いつころにかありけん、三（三）百年のむかし、公家の人筑紫に流されて、配所のつれづれに箏の手をひきかへて煩手にし、雅樂の越天樂の歌を延て、ふしをながうして、是に箏をあはせて彈れしを、筑後國善導寺の僧其曲を習ひ傳へて世に弘めしより、筑紫箏と名づけて世のもてあそびとなれりとかや。其後八橋檢校といふめくら法師、此曲を習ひて殊に上手なりしかば、越天樂の歌を、ふきといふも草の名といふ歌を本として、色々の歌を誰人にか作らせて、組と名付て、さまざまの曲節をなしけるより、いよく世に行はれて、貴賤のもてあそびとなれりと聞く。

といへり。夫今傳ふる處の箏の十三組は、八橋の寫す處也。法師に聞に、四年ばかり前に、八橋の百年忌に丁りて追祭せりとなん。然れば十三組は百餘年前の製

三二二  
荆軻傳註正義曰燕太子云左手搥其胸秦王曰今日之事從子之計耳乞聽琴而死召姫人鼓琴琴聲曰羅單衣可裂而絶八尺屏風可超而越鹿盧之劍可負而拔主於是超屏風走之  
とあり。此事を寫したる唱歌なり。  
案ずるに咸陽宮の謠

いかに華陽夫人琴の秘曲を奏し給へ。さらば秘曲を奏すべし。もとよりたへなる琴の音に、飛鳥も地におち、ものゝふもやはらぐ程の秘曲なれば、ましてや今はの玉の緒琴、さこそは御手もつくされけめ。花の春のきんぎよくは、和風樂に柳花苑、りうくわゑんの鶯は同じ曲をさへづり、月のまへのしらべは、夜さむをつぐる秋風、雲井にわたれる雁がねは、ことちにおつる聲々も、涙のつゆの玉づきたまさかにく、人はよも白糸のしらべをあらためて、君きけやく、七尺の屏風はおどらばこえつべし、らくくのたもとをも、ひかばなどかきれざらん。

なり。今世の猿樂は室町の時より行はるとみゆ、しかれば謡曲の唱歌は箏の唱歌よりは古し。しかれども謡曲にも古製新製ありと聞は、右の咸陽宮の謠も、新古いづれにやあらん。箏の唱歌を謡に引たるや、謡にある唱歌を箏に寫したるやしれざれども、たまく唱歌同じきゆへ、こゝに載て相徴す。後の梅が枝の組に引たる梅がえ、繪馬のうたひ、ならびに雲の上にひきたる舞車、薄衣に引たる遊行柳のうたるも亦しかり。

梅が枝

一梅かえにこそうぐひすは巢をくへ、風ふかばいかにせん、花にやどるうぐひす。

源氏若菜の卷ニ 柏木衛門督歌  
いかなれば花にこづとふ鶯の、櫻をわきてねぐらとはせぬ。

卷の詞ニ

春の鳥の櫻ひとつにとまらぬ心よ、あやしとおほゆることぞかしと、くちすさびにいへば。



とあり。歌の心はかしは木のわが身を鶯にたとへ、櫻を女三の宮にたとへて、鞠のありし夜、女三宮の方にとまり給はぬをいへり。卷の詞の心は、鶯は春の鳥なるに、櫻ひとつにとまらぬ心あやしと也。此唱歌の心は、此卷のおもむきを反して、梅の枝にこそ鶯はやどるものなれ、花にやどる鶯、風吹ば花ちりてはかなし  
いかにせんとなり。

○知音の媒といふて組の唱歌を粗解たる小册あり。

其説に此唱歌は白樂天と烏窠禪師と問答の事なり。事長ければ略之とあり因て考るに。

五燈會元曰、白樂天、山中書舍人、出爲杭州刺史、聞烏窠和尚、道徳枉駕見之時、烏窠因長松盤屈、如蓋遂棲止其上。樂天問曰、禪師住所甚危險、師曰、太守危險尤甚、曰、弟子位鎮江山、何險之有、師曰、薪火相交、識浪不停、得非險乎。

いふ心は、白樂天都の中書舍人の官より田舎へ出て杭州の太守となれり。杭州の地に、烏窠と

りたる事もあらんか。こゝに載せて考に備ふ。

梅が枝の謠

軒端の梅に、鶯のきなくや花の越天樂、うたへやうたへ梅がえ、梅がえだにこそは鶯はすをくへ、風吹ばいかにせん花にやどるうぐひす。

繪馬の謠

越天樂のしやうがの聲、梅が枝にこそ鶯はすをくへ、風ふかばいかにせん、花にやどるうぐひす、やどりうどのかへるをもしらで、彈たり琵琶琴。

とあり。

又按ずるに邦彦考

南都興福寺延年舞

越天樂哥物 木調子盤涉調

梅ガエニコソ鶯ハスタクヘ 二反

カゼフカバイカニセン、花ニヤドル鶯 二反

右ハ興福寺延年舞式といふ書に出て、外にも色々歌。物見えたり。延年舞は後花園院の康正の

いふ徳のすぐれたる禪師あるを聞およびて、あひにゆきたり。烏窠は高き松のねぢけてきぬがさのごとくなる上に坐せるを見て、樂天曰、禪師の住所はなほだあやうし。禪師のいはく、太守のあやうき事は猶甚し。樂天のいわく、われ位は杭州を鎮守する身なれば、何のあやうき事あらん。烏窠のいはく、それ思慮のむねをこがすは、薪と火とをまじへちかづけたるごとく、意識のさはぐは、風吹て浪のたつがごとし。これあやうき事にてはなきやと、樂天此禪師の語を聞て感服せりとなん。

此事に據ば、鶯の梅の枝にすくふを烏窠にたとへ花にやどるを樂天にたとへ、枝にとまるは危きに似てあやうからず、花にやどるはうるはしけれど風にはちるならひなれば、はかなくあやうしといふ心に作りかへたる唱歌なり。此唱歌は梅が枝、繪馬のうたひに見えたり。夫謠の唱歌は、僧徒の作れる事多しといへば、烏窠樂天の事を譬喩して作

比沙汰ありし物なれば、箏の唱歌も全く是を取れるなるべし。謠も梅が枝繪馬ともに越天樂の

事出たれば、延年舞を本據に作れるならん。

といへり。紀光卿説。

延年は康正の頃のみにあらず、ふるくより南都興福寺衆徒等興行の所見すくなからず。延年は舞の名、唱歌は今様のよし覺悟なり。全く今様より出し事分明なり。今様の祕書數卷あり。

と云々。

二花ちる里のつれづれ、たえづの琴のね。

はなたちばなの袖の香に、山ほととぎすをとづる。

此唱歌は花散里の卷に。

此頃のこることなくおほしみだる、世のあはれの種はいには、おもひ出給ふにしのびがたくて、さみだれの空めづらしくはれたる雲間に、わたり給ふ中川のほどおはするに、さ、やかなる家の木だち



などよしばめるに、能鳴琴をあづまにしらべて、ひきあはせにぎはしく、ひきならすなる、御耳にとまりて、すぎがてにやすらひ給ふ。おりしもほとゝぎすなきてわたる、もよほし、きこえがほなれば、御車をおしかへさせ給て、例の惟光をいれ給ふ。

おちかへりえぞしのばれぬ、ほとゝぎすほのかたらひし宿のかきねに。

ほとゝぎすことゝふ聲はそれなれど、あなおほつかなさみだれの空。

さてかのほいの所は、おほしやりつるもしるく、人目なくしづかにておはする有様を見給ふもいと哀なり。まづ女御の御方にて、むかしの御ものがりなどきこえ給ふに、夜更にけり。廿日の月さしいづる程に、いとゞ木高き陰どもこごろう見えわたりて、ちかき橘のかほりなつかしく匂ひて、ほとゝぎすありつる垣根のにやおなじ聲にうちな

橘のかをなつかしみ、ほとゝぎす花ちる里を尋てぞとふ。

おほかたの世にしたがふものなれば、昔がたりもかきくづすべき人すくなくなりゆくを、ましていかにつれづれもまぎるゝ事なくおほさるらんと聞え給ふ。

人目なく荒たる宿の橘の花こそ軒のつまとなりけれ。

西をもてには、わざとなくしのびやかにうちふるまひてのぞき給へるも、めづらしきにそへて、よそに目なれぬ御さまなれば、つらさもわすれぬべし。

とある巻のをもむきにて作れるなり。

三おもひねの夢のま、枕に契るあけがた、さめてはもとのつらさにて、涙のほかはあらじな。

新千載集

平時村朝臣

おもひねの夢の枕に契りしもさめてはもとのつらさなりけり。

四 小夜更てなく千鳥、なにをおもひあかしね。

うき世をすまのうらみにて、われとひとしきき涙かや。

此唱歌は須磨の巻に、

まどろまれぬ晝の空に千鳥いと哀になく。

友千鳥もろ聲

になく晝は、

ひとり寝覺の

床もたのもし。

まだおきたる人

もなければ、か

へすくゝひとり

ごちてふし給へ

り。

とあるおもむきをのべたり。

五 白檀の眞弓の反るべきはそらいで、八十の翁の



戀に腰をそらいた。

此唱歌はわがかたに心はよらず梓弓まゆみ楓弓そりたかくしてといふ歌より轉じて、眞弓のそるべきはそらずして、翁のかゞまりてそるまじき腰は戀する心より、しるてそらせりと

これ冷容の情をのべたる唱歌なり。

按ずるに、知音の

媒に、此唱歌は志

賀寺の上人の事歟

といへり。此説お

そらくは是なら

ん。太平記に此事

を引ていはく。

志賀寺上人と

て、行學薰修の聖才おはしけり。湖水の波しづかなるにむかふて、水想觀を成し心を澄して、只一人立給ひたる所に、京極の御息所、志賀の花



園の春のけしきを御覽じて御歸ありけるが、御車の物見をあけられたるに、此上人御目を見合まいらせて、おほへず心迷ひて魂うかれにける云々。扱ももしなぐさむやと、暮山の雲をながむれば、いと心もうきまよひ閑窓の月にうそぶけば、しれぬ思ひ猶深し。今生妄念遂に離れざれば後生の障と成べければ、我が思ひの深きいろを御息所に一端申て心やすく臨終をもせばやとおもふて、泣々京極の御息所の御所へ参りて、鞠の壺の懸りの本に、一日一夜ぞ立たりける。御簾のうちよりはるかに御覽ぜられて、是はいか様志賀の花見の歸るさに目を見合せたりし聖にてやおはすらん、われゆへに迷はゞ後世の罪誰が身のうへにとむべき、餘所ながら露ばかりの言の葉になさけをかけば、なぐさむ心もこそあれとおほしめして、上人是へと召されければ、わななくふるひ中門の御簾のまへに跪きて、申ける事もなくさめぐと泣給ひける。

此唱歌、玉葉集、海巴月明 院御製

清見かた富士の煙や消ぬらん、月影みがく三保の浦浪。

といふ御歌の情興ありて、月影は水にうつろひ、芙蓉の面影も開きて、眺めわたす夜景を賦せり。夫れ思ひを彼地に馳て、これを彈ぜば、勝地の興象絃上にうかむべし。

心 盡

一心づくしの秋風に、須磨の浦回の浪まくら。衣かた敷きひとりねに、夢もむすばぬ夜な

此唱歌は須磨の卷

心づくしの秋風に海はすこし遠けれど、行平の中納言の關吹こゆるといひけん浦浪よるくはけにいと近く聞えて、またなく哀なるものはかゝる所の秋なりけり。御前にいと人すくなにてうちやすみわたれるに、ひとり目をさまして、枕をそばだ

御息所は偽ならぬけしきの程哀れにも又恐ろくしもおほしめされければ、雪のごとくなる御手を、御簾の内より少しさし出させ給ひたるに、上人御手に取付て、

初春の初子のけふの玉帯手にとるからにゆるく玉の緒。

と讀れければ、やがて御息所取あへず、

極樂の玉の臺の蓮葉にわれをいさなへゆらく玉の緒。

とあそばされて聖の心をぞなぐさめ給ひける。

とあり。三國傳記といふ書にも此事をのせて京極御息所は時平左大臣の女とあり。初春の歌は家持が歌、萬葉集第廿にくわしく見えたり。又薄雪物語にも右の事を引て志賀寺の上人は八十三の年御息所を戀奉りてとあり。

六三保の松風吹たえて、沖津なみもあらじな。

水に映るふ月ともに、ながめにつとくふじさ

て、四方のあらしを聞給ふに、浪只こゝもとに立來る心地して、涙おつともおほへぬに、枕うくばかりに成にけり。

とあるおもむきにて作れるなり。

卷に引し行平の歌は、續古今に

津の國須磨といふ所に侍ける時よみ侍りける

中納言行平

旅人の袂すしく成にけり、關吹こゆる須磨の浦風。

二ふるさとをはるくと、へだてゝこゝにすみだ川。都鳥にことゝはん、君はありやなしやと。

此唱歌は伊勢物語

武藏の國と下總の國との中におきなる川あり、それをすみだ川といふ。其ほとりにむれるておもひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへる云々。さるおりしも、白き鳥の背と脚との赤き鳴のおほきさなる、水の上にあそびて、



魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらす。わたしもりに聞ければ、これなん都鳥といふを聞て。

名にしおはゞいさこと、はん都鳥わがおもふ人はありやなしやと。

是を寫せるなり。

三夏の夜のあけぼの、夢をさますほととぎす。

しろたへに見ゆるは、月にさらす卯の花。

此唱歌は 後撰集

讀人知らず

卯の花のさけるかきねの月きよみ、いねず聞くと

や鳴くほととぎす。

といふ歌の風情にちかし。

四霧にたゝすむをぐるまや、つじでたつる小車。

人目しのぶの契りこそ、ふけてねやのかよひち。

是は源氏の君夕貌の上にふかくしのび通ひ給へるをのべたる唱歌也。ゆふがほの巻に、

のながらふまじき命ながら、またけふの日も暮せるはといふ心なり。

上の句は新勅撰

皇太后宮太夫俊成

四方の海を硯の水につくすともわがおもふことを

かきもやられじ。

といふ歌にひとし。

下の句は續後撰、つゝみける女に、久しくあはでつか

はしける。

權中納言敦忠

さりともとおもふ心になぐさみてけふまで世にも

いけるいのちか。

といふ心あるに似たり。

六契りし宵の黄昏、しるべふかきそらだき、

とめいるかたの萩の戸を、ひらくや袖のうつり

が。

たそかれはたそやらかれやら人色のわかりがたき暮あひをいふ。こゝは契りし宵なれば、たそかれとしるきといふ心にいひかけたり。空だきの匂ひをしるべにし

御車もいたうやつし給へり。さきもおはせ給はず云々。いとことさらめきて。御そうぞくをもやつれたるかりの御ぞを奉りさまをかへ貌をもほの見せ給はず、夜深き程に人をしづめて出入などし給へば云々、人目をおほしへだておき給ふ夜々などは、いとしのびがたく、くるしきまでおもほへ給へば云々、霧もふかく云々

とある言葉をもむきによりて作れるなり。

五あすか川のみなかみを、硯の水にせきいれて、

かくことの葉はつきまじや。けふも暮さんいの

ちかな。

此唱歌は、古今の歌に飛鳥川淵は瀬となる世なりとも、

おもひそめてん人はわすれじといふ心にて、人は淵瀬

のごとく心かはるとも、われは川上の水のごとく、心

かはらずたとひ上流の水を硯にせきいれて、文を書やるとも、言の葉はつきじ。かくわすられてはかなき身

のび、萩の戸をひらきて、相迎ふる袖のうつり香といふにて、手を携ふるのすがた見ゆ。

○萩の戸禁裡にあり。

續後拾遺 朝草花

御製

露よりも猶事しけし、萩の戸のあくればいそぐ

朝まつりごと。

新後拾遺 百首歌めされし時、萩をよませ給

ける 御製

九重や今すむ宿の萩の戸も、いく世ふるえの色

に咲らん。

とあるたぐひなり。邦彦考

萩の戸は清涼殿夜、御殿の末、弘徽殿、上の御局と

藤壺、上の御局の間にあり。

天下泰平

一天下太平長きうに、治る御代の松風、

ひなづるは千とせふる谷のながれに龜あそぶ。



蓬萊山たいきよく

蓬萊山には千とせふる萬歳千秋かさなれり。松の枝には鶴すくひ、いはほがそばには龜あそぶ。

是唱歌のもとづく所なるべし。

按ずるに此天下太平の曲二段は内にあるおもひの外にあらはるゝを歎き、三段は月に對して人の面影をしのび、四段は花月の夜女と契り、五段は籠姫を携へて、糸竹に情を寫し、六段は山に對して秋景を愛する情興をのべたり。夫、治れる御代ならではかくのごとき花鳥聲色のたのしみも得がたければ、初段に御代をことづける唱歌を置る作者の寓意しるべし。

二人しれぬ契りは、あさからぬものおもひ、つゝむとすれどむらさきの色にいづるぞはかなき。

拾遺

平兼盛

しのぶれど色にいでにけり、わが戀はものやおもふと人のとふまで。

千載集

中院右大臣

又思婦のうちかへしておもふには是月のとがにはあらず、されども、いかにして月をうらみしや、とかくに涙の袖にたえずと。此時の意は、

續拾遺

成茂

いかにせん月のとがとおもはねど、うきおもかけに落る涙を。

四花の宴のゆふ暮、おぼろ月夜にひく袖、さだかならぬ契りこそ、心あさく見えけれ。

花の宴の夜、源氏酔ごちにて、弘徽殿のあたりをしのびあるき給ふに、内侍の朧月夜に似るものぞなきと吟じ給ふをしたひよりて、終に契らせ給ひ、扇を取かへ給へり。源氏も内侍としらず、内侍も源氏とたしかにしり給はぬゆへ、さだかならぬ契りとはいへり。其人と知りて、戀したへるにてはなく、たまゝの契りなれば、心はあさく見えけれといへるなり。

五すみよしの宮どころ、かきならす琴のね、神のめぐみにあひそめて、すぎしむかしをかた

つゝめども袖に涙のあらはれて、戀すと人にしられぬるかな。

是等の歌の心に似たる唱歌なり。

三はかなくもくまなき月をいかでうらみし。

とにかくにわが袖にたえぬ涙のゆふぐれ。

此唱歌の大意は隈なくさやけき月をいかにして照ししや、はかなき事かな、さはおもへども、とかくに此ゆふべ袖に涙の絶やらぬかなと、月に對して愛人の面影をしのぶ情を寫せり。委しく説けばはじめ思婦の袖にうつろふ月を見るにつけて、いよく人をおもひ、人をおもふの甚しきより、さやかなる月をいとふ。其時の意は、

風雅集

邦省親王

わすらるゝ袖には曇れ夜半の月みし夜に似たる

影もうらめし。

新古今

八條院高倉

曇れかし詠むるからにかなしきは、月におほゆる人のおもかけ。

らむ。

源氏あかしの中宮紫上を二車にのせまいらせ、明石上を二の車にのせ、其餘女房達ならびに琴笛の藝ある人々あまた俱して、住吉へまうで給ふ事、若菜の巻にあり。巻の詞に

かゝる色々の榮を見給ふに付ても、神の御助けはわすれがたくてまうでさせ給ふ。云々かみな月中の十日なれば、神のいがきにはふ葛も色かはりて、松の下紅葉など、音にのみ秋をきかぬがほなり。ことごとくしき高麗唐土の樂よりも、あづまあそびの耳なれたるはなつかしく、おもしろく、浪風の聲にひびきあひて、さるこだかき松風に吹たてたる笛の音も、外にてきくしらべにはかはりて身にしみ、ことにうち合せたる拍子も鼓をはなれてとのへ取たるかたおどろくしからぬもなまめかしく、すがうおもしろく、所がらはまして聞えけり。云々おとむかしの事思し出られ、中頃しづみ給ひし世のありさまも目前のやうにおほざる、



に、其世の事うちみだれかたり給ふべき人もなければ、致仕の大臣をぞ戀しく思ひ聞え給ひける。入給ひて、二の車にしのびて、

誰かまた心をしりて、すみよしの神代をへたる松にこととふ。

とあり。此事をのべたる唱歌なり。

六秋の山のにしきは、たつたびめやをりけん。しぐれふるたびごとに、色のますぞあやしき。

此唱歌は右のわかかなの卷のつゞきに、

くれなる深きあこめのたものうちしぐれたるに、けしきばかりぬれたる松原をばわすれて、紅葉のちるをおもひわたる。

とある言葉を縁にして、秋山の實景をのべたりと見ゆ。

續拾遺

衣笠内大臣

立田姫今や梢の唐にしきおりはへ秋の色ぞしぐるい。

新千載

延喜御時屏風

紅のしぐれなればや、石上ふるたびごとに山を

したひ歎かせ給ふ、源氏の情をのべたる唱歌と見ゆ。

二ひよくれんりのかたらひも、かわればかはる世のならひ。さりとはうらむまじや、むかしはなさけありしを。

此唱歌は白樂天が長恨歌

七月七日長生殿、夜半無人私語時、

在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝、

と玄宗帝楊貴妃と契り給ひし事を賦したり。それをこゝに引て、源氏藤壺に逢給ひて、其後藤壺の世をつつましう難面し給ふを、源氏うらみ歎かせ給ふ情をのべたるなり。

三わかむらさきを手につみて、ふかき心の色まなす。

ながき契りとむすびしも、草のゆかりとするべし。

此唱歌はわかむらさきの卷に、源氏北山にて藤壺の御姪紫の上まだおさなくて、藤壺に能似させ給ふを見給

染らん。

是等の歌の風興あり。龍田姫は秋を司神なり。

薄 雪

一うらめしやわが縁、うすゆきのちぎりか、きえにし人のかたみとて、涙ばかりやのこるらん。

あさがほの卷

月は隈なくさし出て、ひとつ色に見えわたされたるに、しほれたる前裁の陰心ぐるしう、やり水もいといたうむせびて、池の氷もえもいはすごきに、童おろして雪まろばしせさせ給ふ。云々 一とせ中宮のまへに雪の山つくられたりし、世にふりたる事なれど、猶めづらしくもはかなき事をしなし給へりしかな。なにの折々につけてもくちおしう、あかすもあるかな。

と紫の上と雪の夜ものがたりして、藤壺のすぎし事を

ひ、ついに二條院へとりてそだて給ふ卷の詞、

秋のゆふべはまして心のいとまなくのみおほしむたり。人の御あたりを心にかけ、あながちなるゆかりも、尋ねまほしき心もまさり給ふ。

手につみていつしかも見ん、紫のねにかよひける野邊の若草。

ねは見ねどあはれとぞおもふ、むさしの、露わけそふる草のゆかりを。

とあるをとりて作れるなり。

四しのゝめのまがきに、露をふくむあさがほ、玉のかづらたをやかに、かゝるや花のおもかけ。ゆふがほの卷に源氏六條の御息所へおはしまして、曉に歸らせ給ふ時、御息所の官女中將の君御送りしたるに、前裁のあさがほになぞらへて、戯れ給ふ事あり。

卷の詞

露のいと深きあした、いたくそゝのかされ給ひて、ねむたけなるけしきに、うち歎きつゝ出給ふを、中將のおもと御格子一ト問あけて見奉り送り給へ



と、おほしく御几帳ひきやりたれば、御ぐしもたけて見出し給へり。前裁の色々みだれたるを、すぎがてにやすらひ給へるさま、けにたぐるなし。廊のかたへおはするに、中將の君御供にまいる、しをん色の折にあひたるうすもの、裳もあざやかにひきゆひたるこしつきさはやかになまめきたり。見かへり給ふて、すみのまのかうらんにしばしひきすへ給へり。うちとけたらぬもてなし、かみのさがりばめざましくも見給。咲花にうつるてふ名はつゝめどもおらで過うき今朝のあさがほ。

いかゞすべきとて、手をとらへ給へれば、いとなれてかく、朝霧のはれまもまたぬけしきにて、花に心をとめぬとぞ見る。

とおほやけことにぞきごへなす。おかしけなるさぶらひわらはのすがたこのまじう、ことさらめきたるさしぬきのすそ、露けきに、花の中にまじり

前参議教長

よし野川花のしらなみながるなり、吹にけらしな山おろしの風。

此歌の風情ある唱歌なり。

雪 晨

一雪のあしたのあらしは、梢の花のちるふせい。なごりおしきはとにかくに、待えし君のかへるな。

金葉集並二千載集

寄花戀といへる事を、

源 雅光

吹風にたへぬ梢の花よりも、とゞめがたきは涙なりけり。

といふ歌のおもかけありて、是は嵐に雪のちるを花のちるに見立て、曉の別れを惜む情をよせたる唱歌なり。此唱歌の上の句は萬葉に、

梅の花枝にか散ると見るまでに、風にみだれて雪ぞちりくる。

て、朝貌折てまいる程など、繪にかまほしけなりとあるをもむきにて作れる唱歌なり。

五世々の人のながめし月は、まことのかたみぞと、

おもへばくしみだ玉をつらぬく。

東山長 嘯の歌に、

世々の人の月はながめしかたみぞと、おもへばくぬる、袖かな。

六よし野川の花いかだ、さほさすひまもあらじな。

岩波たかき山風、四方にちらす花のか。

此唱歌は古今吉野川岩波たかく行水のはやくも人をおもひそめてしといふ歌の言葉より取て、岩なみたかく水はやくして、筏師の棹さすひまもあらじな、岩なみたかくといふより、高き山風とうけて、嵐の四方にちらす花の香と、河上落花の風景をのべたり。

新拾遺 河上落花といふ事を

といふ歌に同じ。

二あさましやわが身は、雲井の雁にゆふぎりの、おとしめられしおもひをば、いつの世にかはわすれん。

夕霧は源氏の御子にて、葵の上の御腹なり。雲井雁は伯父内大臣の御むすめにて、夕霧とはいとこなり。おさなきよりたがひに戀々て、ある時しのびあひてものがたりし給ふを、乳母見つけ、めでたくともものゝはじめの六位宿世よとつぶやきおとしめし事、乙女の巻にあり。夕霧は源氏の御子なれど、六位にてありしゆへ、左様の人に雲井の雁のはじめての縁ぐみはふそくなり、是めのは此姫君をば東宮へ参らせんとかしづき給ふなれば、かく腹だちていへり。ゆふ霧此めのことばを深くうらみ給へり。巻の詞

男君われをば位なしとはしたなむるなりけりとおほすに、世の中うらめしければ、あはれも



すこしさむる心地してめざまし。

とあり。夕霧後には侍従にのほり、大臣にまでならせ給ひ、終に雲井雁と夫婦になり給ひしなり。

唱歌の心は、あさましやわが身は、かの夕霧の雲井、雁におとしめられしごとく、このうらみいつの世にかはわすれんと、是女にいとはれし男の情をのべたる唱歌なり。

三まどろめばおもかげの、しげくとみじか夜に、ほととぎすをとづれて、はつねに夢ぞさめける。

しげくとみじか夜は、見るといひかけおもふ人の面影をまどろみて見る内に、ほととぎすのなきてむなく夢のさめてかこつ情をのべたる。

後撰集に

伊勢

二聲ときくとはなしに、ほととぎす夜ふかく目をまさしつるかな。

新拾遺に

らなり。

此二首は琴聲を松風流水に聞なしたるなり。

白樂天が詩の句に。

濺石飛泉弄琴聲 風衝松葉雅琴清

此二句は溪泉松風を琴聲に聞なしたるなり。皆是唱歌のよりどころなり。此唱歌の心は思ひ寝の床おもふ人をみし夢のさめぬるはじめ、窓ちかき松風を聞て、峯の嵐の琴のねに通ふか、谷のながれのひきあへる。水か嵐か、耳定まりて後、さては松風にてありしよとはかなく思ひを流すおもむきにて、是夢裡の琴心夢後の聲韻圍中恍惚たる情をのべし作なり。

六あふひのうへの時めき、加茂の物見の折からに車あらそひつれなきは、ふかきうらみなるべし。

時めきは時を得て勢ひあるをいふ。源氏の御兄朱雀院の姫宮加茂のいつきにそなはり給ふ。其儀式いととき御事にて、人々目をおどろかす。源氏の御本臺葵の上

うた、ねに夢の枕のしのびねは、うつともなきほととぎすかな。

といふたぐるなり。

四ながむればいとどだに戀しき人のこひしきに、くもらば曇れ秋の夜の月にうらみはあらじな。

金葉集 月前戀といへる事をよめる。

藤原基元

ながむれば戀しき人のこひしきに、くもらば曇れ秋の夜の月。

五嶺のあらしのかよふか、谷の水のながれか、ねがめにききし松風は琴のねにたがはじ。

後撰集 夏の夜深養父が琴ひくを聞て。

藤原兼輔朝臣

短夜の更行まゝに、高砂の峯の松風ふくかどぞきく。

おなじ心を

つらゆき

足曳の山した水は行かよひ琴の手にさへながるべ

其頃ゆふぎりの大將をはらませ給ふ。たゞならぬ御心にわづらはしくおはしませば、御心なぐさみにもとて出て御覽するに、又源氏のしのびてかよひ給ふ六條の御息所も、此物見に出給ひしに、御車のたてどをあらそひ、ついに御息所の車を人だまひのおくにおしやりて、葵の上の車をたてたり。是より御息所深くうらみて、ついにものゝけとなりて、葵の上をとりころせし事、あふひの巻に見えたり。此唱歌は此事を賦して今の怨の情をよせたる作なり。



箏曲考卷之二目録

裏

雲上

薄衣

桐壺

四季友

八段之調子

亂輪舌

中

須磨

明石

末ノ松

空蟬

四季富士

雲井辛齋

九段之調子  
七段之調子  
五段之調子

雲之上

一 雲のうへのながめは、ありしむかしにかはらねど、  
みしたまだれのうちぞたゞなつかしやゆかしや。

此證歌は世にあまねくしる所にして、小町があふむ返しの歌と稱すれども、誤りなるよし本朝俗説辨にいへり。其辨に曰。

今按ずるに小町が鸚鵡返し（信西が子成範）の歌世々の撰集小町集にもかつて見る所なし。但し古今著聞集、十訓抄寢覺記に、少納言（信西が子成範）通憲（中納言）配所よりめしかへされて、内裡へ参りたりけるに、むかしは女房の人だちにてありし人の、今はさもなかりければ、女房の中よりむかしをおもひいで、雲の上はありしむかしにかはらねど、見し玉簾（たまざり）の内や戀しきと、よみて出したりけるを、返事せんとて、燈籠のきはに立よりけるに、小松内府（だじふ）参り給ひけれ

は、いそぎたちのくとして、とうろくの火のかきあけ木のはしにて、やの文字を消て其そばに、その文字をかきて、簾（みす）の内へさし入ていでられける。女房とりて見るに、その文字にて返事せられけり（あり）。此事を作りあらためて小町が事とするのみ。

とあり。

二 おもしろやさみだれ、花橋のにはへり。

ほとゝぎす、をとづれてみじか夜なれどねられぬ。

此唱歌は拾玉集第五今様四首の内 郭公

花橋も匂ふなり、軒のあやめもかほるなり。ゆふぐれざまの五月雨に、山ほとゝぎす名のりして。といふ風調にかなへり。下の句は。

拾遺 　よみ人しらす 朗詠には人丸とあり。

ほとゝぎすなくや五月のみじか夜も、ひとりしぬればあかしかねつゝ。



といふ歌に據て、意を取かへたりと見ゆ。

三中々にはじめよりなれずばものをおもはじ。

わすれは草の名にあれど、しのぶは人のおもか  
げ。

上の句は萬葉集十一

中々に見ざりしよりも、あひ見ては戀しき心まし  
ておもほゆ。

拾遺 題しらす

權中納言敦忠

逢見ての後の心にくらふれば、むかしはものをお  
もはざりけり。

下の句は伊勢物語に。

わすれ草おふる野邊とは見るらめど、こはしのぶ  
なり後またのまん。

といふ歌をよりどころとしてのべたりと見ゆ。

○わすれ草 しのぶ草 一草二名なり。

舞草の謠

わすれは草の名にあれど、しのぶは人の面影、

のみそめてき。

といふ歌にもとづけりと見ゆ。唱歌の心は。

新千載

平宣時朝臣

うた、ねの手枕寒き秋風に夢を残して月を見るか  
な。

六帖

かさの女郎又家持とも

うた、ねにはかなく人を夢に見て、うつゝにさへ  
もおつる涙か。

といふ歌の情に同じ。

六簷を遶る點滴、琴の音にたとへて、

七年の夜の雨、かつてしらぬ夢の世。

此唱歌は陸務觀が詩を寫せり。

陸務觀ノ詩

遶る簷點滴如三琴 筑二支二枕 幽齋一聽 始奇

憶在二錦城 歌吹海 七年 夜雨 不三曾知

點滴は雨の軒より落る音なり。筑も琴の類なり。

幽齋はしづかなる住居なり。錦城は蜀の城下な

り。歌吹海は歌舞管絃の繁華の地といふ義なり

四 おもひあまりせきかねて、うらみぬる夜のなみ  
だは、

とこすさまじや、ひとりたゞ枕に戀ぞしらす  
ゝ。

新千載集

藤原基任

せきかねていかにねし夜の涙より、枕に戀のしら  
れそめけむ。

五 むさし野に行暮て、月をながめて草まくら、  
戀しき人を夢に見て、うた、ねの袖しぼる。

月の事は 新古今 野徑ノ月 攝政太政大臣

行末は空もひとつのむさし野に、草の原より出づ  
る月影。

草枕の事は

從三位爲理

草枕同じ旅寝のかはらねば、日數わする、武藏野  
の原。

此唱歌下の句の言葉は古今に

小野小町

うた、ねに戀しき人を見てしより夢てふものはた

此詩は宋の陸務觀陸放翁ともいふ。蜀の國につか  
へて、七年の後、隱居して夜齋中に臥て、雨の軒  
より落る音、琴の音に似たるを聞て、おもふには  
はやく世をのがれずして、七年の間此幽閑なるお  
もしろきをしらす暮せりとなり。

薄 衣

一 數ならぬ身にはたゞおもひもなくてあれかし。  
人なみくくのうすころも袖の涙ぞかなしき。

源氏あづまの巻 引歌に、

數ならぬ身にはおもひのなかれかし。人なみく  
にぬる、袖かな。

二 あくがれておもひねのまくらにかわすおもか  
げ、それかとしてかたらむとおもへば夢はさめ  
けり。

新拾遺 千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成女。

おもひねの夢のうきはしとだへして、さむるまく  
らにきゆる面影。



といふ歌の心に同じき唱歌なり。

三 しら雪のみゆきのつもる年は、ふるともあくまじや。もろともにねみだれがみのかほばせ。

白雪の深雪は積るといふ縁語にして、白髪を興せるなり。

詩經鄭風女曰鷄鳴二章に。

戈言加レ之。 與レ子偕老。 琴瑟在御。 莫不静好。

此詩の心は男女相好してはいはく、小弓を以て鴨や雁に加て捕たらば、そなたと共によろしきやうに料理し、それを下物として、酒をすゝめて相樂しみ、共に白髪となるまで、相愛すべし。さて琴と瑟とを側に置いて、しらべあはすに、いとしめやかに、音もとのふてよしと、兩情相和したる心をべたる詩なり。

此唱歌の心よくかなへり。

四 ひく人はそれ／＼あまたあれどもつまごとの、

卿の宮柏木のゑもんのかみなど参り給ひ、鞠の御あそびありけり。みはしの間にあたる櫻のかげによりて、人々花の上もわすれて、心にいれたる云々ものきよけなるうちとけすがたに、花の雪のやうにふりかゝれば。

とあり。それを梅の花にとりなしていへるなり。梅ははらりほろりの詞には、柏木の女三の宮に心みだるる情興をふくめり。

六 さりとはつれなやひかふる君がたもとの、あやにくになびかぬは、てがひのとらのひきづな。

是も右の卷の事なり。鞠の興さかりなるに、猫かけ入て、引綱にて宮の御前の簾あらはに引あけられて、女三の宮を柏木の見そめ給ひ、小侍従といふ女をたのみて、文を通はし、ついに逢給へる。されども女三は源氏の御うしろみゆへ、柏木のおもひのまゝならず、戀やみになりて、むなしくなり給へり。此唱歌は女三の

もとの心かはらずば、ことぢにおちよ秋風。

新千載

法印實顯

梓弓ひくてあまたになりぬとも、もとの心をわすれずもがな。

此唱歌、弓を琴にひきかへたるばかりにて、此歌の心に同じ、箏は爪にて弾ゆへ、爪箏といふて、爪に妻をもたせり。箏に付てひく人といひ出せり。引人とは心を懸る人おほきなり。もとの心かはらずといふは、もとわが逢そめしが中たへて月日をふるまに、外より引人おほくとも、われに契りしもとの心かはらずば、わががたにしたがへよといふ心なり。風の聲、箏の音にかよふものゆへ琴柱に落よ秋風といひながして情をもたせり。

五 かしはぎのゑもんのまりをとんごけたれば、鞠は枝にとまりければ、梅ははらりほろりと。

源氏若菜の卷に。

やよひばかりの空うら／＼かなる日、六條院に兵部

宮の柏木の心にまかせぬを猫の引綱にたとへていへるなり。

○あやにくはさあるべき事のさなくわりなきといふ義なり。

○按ずるに詩經大雅有猫有虎。朱註猫似虎而淺毛とあり。本草小畜之猛者似虎而淺毛とあり。花鏡猫は其性皆與虎同。此陰類也。相符也とあり。かくのごとく、其形其性虎に似たるとあり。このゆへに、和歌にも手がひの虎とよめり。

六帖

あさちふの小野の篠原いかなれば、手がひの虎のふしどころなき。

夫木集

入心てがひの虎にあらねども、なれしもなどかうとくなるらん。

遊行やなぎの謠

されば都の花さかり、大宮人の御遊にも、蹴鞠の庭の面、四本の木陰枝たれて、暮に數ある杳のを



と、柳櫻をこきまぜて、錦をかざる諸人の、はなやかなるや釣籠こすの隙、もりくる風の匂ひより、手かひの虎の引綱も、ながきおもひに檜ひのの葉の、其かしはぎのおよびなき、戀路もよしなしや。とあり。

桐 壺

一きりつぼのかういのひよくれんりのちぎりも、さだめなき世のならひとて、夢のあひだぞかなしき。

桐壺の更衣は源氏の御母なり。源氏の御父桐壺の帝甚御寵愛深かりしを、弘徽殿の女御をはじめ、人々ねたみふかきつもりにや、源氏三の御歳に、更衣病おもりて、むなしくなり給へり。帝夢のやうにおほしみだれてはなはだいたみ給へり。

桐壺の巻に、

繪にかける楊貴妃のかたちはいみじき繪師といへども筆かぎりありければ、いと匂ひなし。太液たいえきの

ば、童の汗衫の袖につゝみて、つゝめどもかくれぬものは、夏むしの身よりあまれる思ひなりけり。

三秋の夜はふけゆき、月は西にかたぶく、松風や、浪のおと、鹿の音こゑぞさびしき。

此唱歌は風雅集曉月聞鹿といふ事を 万秋門院

有明の月もかたぶく山のはに、鹿の音たかき夜半の松風。

といふ情興に同じ。

四みちしるべせし小君のなかだちにひかれて、ゆくへまよふかうつせみの、きぬのかほりぞゆかしき。

源氏の君伊豫介が妻の空蟬を戀ひ給ひ、空蟬の弟小君を道しるべにして、しのび給ひしに、うつせみ起出て、すゞしのひとへひとつ置いて、すべりかくれたり。かのぬぎしうすぎぬをとりて歸り給ふ。

うつせみの身をかへてける木のもとに、なを人が

芙蓉未央ふきよひやうの柳もけにかよひたりしかたちを、からめいたるよそをひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたけなりしをおほしけるに、花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき。朝夕のことがさに、はねをならべ、枝をかはさんと契らせ給ひしに、かなはざりける命の程ぞつきせすうらめしき。風の音虫のねにつけても、物のみかなしうおほさるゝ云々。しばしは夢かとのみたどられしを、やう／＼おもひしづまるにしも、さむべかたなく、とある巻のおもむきによりて作れる唱歌なり。あさゆふのことぐさに、はねをならべ、枝をかはさむと契らせ給ひしにと、長恨歌の比翼連理の事を巻の詞に引たるを、この唱歌にいれたり。

二みじか夜の夢さめて、おもかげはなつむしの、身よりあまるおもひをば、いかで人にかたらむ。

後撰集。かつらのみこの螢をとらへといひ侍りけれ

らのなつかしきかな。

とあるをもむきをのべたる唱歌なり。くはしくは空蟬の初段の註に出せり。

五たそやこよひ小夜ふけて、しばのとぼそをた、くは、

おのへおろしのをとづれか、くるなのつぐる聲々か。

此唱歌は新古今に

攝政太政大臣

月見ればといひしばかりの人はこで、櫛の戸たたく庭の松風。

新拾遺に 寄水鶏戀

源 師光

櫛の戸をた、くくひなをそれかとも、驚くまでにとはぬ君哉。

とあるたぐひなり。

六青柳をかた糸によりてなげやうぐひす、鶯のぬふてふ笠は、梅がえだの花がさ。

古今に



青柳をかた糸によりて、鶯の縫ふてふ笠は梅の花  
がさ。

催馬樂 青柳

青柳をかた糸によりてや、をけや、鶯の、をけや、  
うぐひすのぬふといふ笠は、をけや、梅の花笠や。

四季 友

一 春たちくればわがやどにまづ咲そむる梅の花、  
君が千とせのかざしぞと、見るものどけき色な  
れや。

古今に もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風  
によりて書ける 紀 貫之  
春くれば宿に先づ咲く梅の花、君か千とせのかざ  
しとぞ見る。

二 瀧のしら玉千世のかず、いはねにおつるさみだ  
れの、

雲間すぎゆくほととぎす、たゞ一と聲のをとづ  
りうづめる白雪は十回の花ならむ。

朗詠集に

江相公

十八公の榮えは霜後露、一千年之色は雪の中に  
深し。十八公は松の字なり。すべて草木は霜にあ  
へば色かはり葉凋めども、松のさかえは霜の後に  
見ゆ。又松は千とせのよはひをたもつといふゆへ  
深雪つもれども、千とせ色の深みどりを含めりと  
いふ心なり。

蜀曲

椿の陰は八千とせ、松花の色は十回り。

同

見るにめでたき花の色、千とせの松にふる雪。  
是皆唱歌のもとづく處なり。松は百年に二度花咲とい  
ふゆへ、千年に十度咲といふ義にて十かへりの花とい  
ふて、松につもる雪を花に見立ていへるなり。

十かへりの花といふ言葉は

新後拾遺に 松樹春久といふ事を

十かへりの花をけふより松がへに、ちぎるも久し

箏 曲 考

れ。

古今に さだときのみこのおばのよそぢの賀を大井  
にてしける日よめる 紀これおか

龜のおの山の岩ねをとめて落つる、瀧の白玉千世  
の數かも。

下の句は新勅撰

慈 圓

ほととぎすきつとやおもふ、五月雨の雲の外な  
る空の一聲。

といふ歌に似たり。

三月をのみながめても、かくばかりおしまるゝ秋  
の夜ごとを、いたづらにすぐる人こそつらけ  
れ。

古今に かなりのつほに人々あつまりて、秋の夜

おしむ歌よみけるつるでよめる みつね

かくばかりおしとおもふ夜をいたづらに、寝てあ

かすらむ人さへぞうき。

萬世の春。

八段之調子

亂輪舌

須 磨

源氏の君、花宴の夜、弘徽殿の女御の御妹隴月夜  
内侍に契らせ給ひしより、女御の御にくしみいよ  
くかさなり、さすらへの沙汰あるによりて、源  
氏みづから須磨へうつらせ給ふ。此曲は則源氏須  
磨に謫居の情興をのぶ。

一 すまといふも浦の名、あかしといふも浦の名、  
更級の月ともに、ながめていざやあかさむ。

○須磨は攝津、明石は播磨、更級は信濃にあり。

此唱歌の心は須磨あかしさらしな皆月の名所なり。須  
磨にて見る月は、是あかしさらしなを照しきたる影な  
り。あかしはならびの浦ゆへ、須磨といふより明石と  
いひ又わが心なぐさめかねつさらしなやおばすて山に



照る月を見てといふ歌の心にて、わが心なぐさめかねるといふ心をこめて、更級の月ともにといひながめて、いざやあかさんの詞には、賞意と愁心とをこめり。須磨の巻の詞にも、

今宵は十五夜なりけりとおほし出て、月のかほのみまもられ給ふ。夜ふけ侍りぬときこゆれど、猶入給はず、  
見る程ぞしばしなぐさむめぐりあはむ月の都ははるかなれども。

とあるをもむきを以て作れり。

二春によせし心もいつしか秋にうつろふ、黒木赤木のませのうちに、よしある花の色々。

○黒木赤木の籬架とは、野分の巻に、  
色草をつくしてよしあるくろぎあかぎのませをゆひませつゝ、

とある註に皮ながらある木を黒木といひ、皮なきを赤木といふ。これにてこしらへたるませがきなりといへり。

きりくすおもふ心をいかにとも、たがひにしらで啼あかすかな。

といふ情なり。

四中々に人をばうらむまじやうらみじ。とにかくに數ならぬうき身の程ぞかなしき。

此唱歌の心は、彼女御の御にくしみゆへ、かゝるさそらへの身となりて、配所の憂住居なるかなと、世をうらみ、人をうらみぬれども、うちかへしておもふには、とにかくに、かゝるかすならぬ身の理りなれば、なまなかに人をば、うらむまじやうらみじと心に誓ひて、身の憂をみづから歎く情をのべたり。

續拾遺に

平 宣時

數ならぬ身はことわりとおもへども、猶うきときは世をぞうらむる。

といふ情曲ある唱歌なり。

五三五夜中の新月くまなきぞおもしろや、  
千里の外の人までも、さぞやながめあかさん。

須磨へうつり給ひしは春の頃なり。巻の詞に

こしかたの山は霞はるかにて、まことに二千里の外のことちするに、かいのしづくもたへがたし。歌に

ふるさとを嶺のかすみはへだつれど、ながむる空はおなじ雲井か云々  
またなくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり云々

前栽の花色々咲みだれて、面白きゆふ暮に海見やらる、廊に出給ふて、たゝすみ給ふ。  
とあるをもて作れる唱歌なり。

三きりくす夜すがらなにをうらみすだくぞ。  
われもおもひにたへかねて、いとど心のみだるゝに。

須磨の巻にきりくすの事は見えねど、上章の秋をうけて配所秋夜の秋情をのぶ。

續千載に

篇 家

此唱歌は白樂天が三五夜中新月色、二千里外故人心といふ詩を寫せり。

すなはち巻の詞に、

月のいとほなやかにさし出たるに、今宵は十五夜なりけりとおほし出して、殿上の御あそび戀しく、所々ながめたもふらんかとおもひやり給ふにつけても、月の貌のみまもられ給ふ。二千里の外故人の心と誦し給へり。例の涙もといめられず。  
とあるによりて作れるなり。

六深更に月さへて、車のおとのきこゆるは、

五條あたりのあばらやのゆふがほをしるべに。

源氏六條の御息所へ御しのびありきの頃、五條に源氏の隨身惟光が母大貳のめのと、いたくわづらひてありしをとぶらひ給ふ。其あたりに頭、中將の忍び妻夕顔の上かくれ居給ふ。其あばら家の軒にゆふがほの咲たるに御目とまり、ひとふさ折て參れとて、惟光を門へいれ給ふ。内より童出てまねき、白き扇のいとうこが



したるに、これに置いて参られてよとて奉る。其後惟光  
していかにもうかはせて、終にたよりて契り給ひ、  
しばし通ひ給へり。源もふかくしのびて、夕顔にも  
源としらせざりき。深く人目を忍び給ふゆへ、やつし  
て夜ふけて通ひ給へり。卷の詞に、

御そぞくをもやつれたる狩の御衣を奉り、さま  
をかへ、顔をもほの見せ給はず、夜ふかき程に人  
をしづめて出入などし給へば云々、南の半部ある中  
屋にわたりきつ、車の音すれば云々、夕がほのし  
るべせし隨身ばかり云々

とある卷の言葉を取り、卷の趣によりて作れる唱歌な  
り。此唱歌は須磨にあづかりたる事ならねども、上章  
の月をうけて、月をいひ、源氏月に對して、彼も一時  
なりと、ゆふがほの昔をおもふ謫居の情をよせて作れ  
るなるべし。

明 石

此曲はあかしの巻によりて作れり。須磨の曲の題

十三日の月のはなやかにさし出たるに、只あたら  
夜のと聞えたり。君はすきのさまやおほせど、  
御なほし奉り、ひきつくろいて、よぶかくて御馬  
にて出給ふ。や、遠く入所なり。道の程も四方の  
うら／＼見わたし給ふて、おもふどち見まほしき  
入江の月影にも先戀しき人の御事を、おもひきこ  
え給ふ。頓て馬ひきすぎて、都へおもむきぬべし  
とおほす。

秋の夜の月毛の駒よわがこふる雲井にかけれ時  
のまも見ん。  
とうちひとりごたれ給ふ。  
とあるをもむきをもて作れり。

二このころはいとどしく都のかたの戀しきに、か  
ゝる所の人ごゝろ、憂を慰む今宵かな。  
此唱歌は卷の詞に、

のどやかなる夕月夜に、海の上くもりなく見えわ  
たれるも、すみなれ給ひし故郷の池水におもひま  
がへられ給ふに、いはんかたなく戀しき事、いづ

下にいへるごとく、朧月夜の事より女御の御にく  
しみいやまし、左遷の沙汰あるによりて、源氏須  
磨へうつり居給ふに、雨風鳴神はけしく、海邊さは  
がしき事数日なり。源氏夢中に先帝の御告あり。  
同じき夜、明石の入道へも源氏を迎へよと夢に御  
告あり、入道ふしぎにおもひて、御むかへの船を  
奉れり。源氏も夢中の御告のごとく、明石へ移ら  
れ給ふ。入道に娘あり。明石の上といふ。此頃海  
邊のさはがしきを避て、岡部の宿に居たり。入道  
の心寄しも深く、源氏明石の上と契らせ給ふ。都  
を出てより三年の内に歸洛し給へり。其趣を寫し  
て作れる曲なり。

一所がら名にしおふ、あかしの浦の秋のころ、月  
さえわたり、よる浪にうつろふ影のおもしろ  
や。

此唱歌源氏入道の宅より明石の上の居給ふ岡部の宿へ  
おはする時の巻の詞に、

かたとも行衛なきこゝちし給ふ云々。久しう手もふ  
れ給はぬ琴を袋より取出て、はかなくかきならし  
給ふ云々。入道琵琶の法師になりて、いとおかしう  
めづらしう手一ツ二ツひき出たり。箏の御こと参  
りたれば、すこし弾給ふも、さまざまいみじうの  
おもひ聞えたり。いとさしも聞えぬ物の音だに、  
折からこそはまさるものなるを、はる／＼と物の  
とゞこほりなき海面なるに、中々春秋の花紅葉の  
盛なるよりは、只そこはかとなうしけれるかけど  
もなまめかしき云々。箏のこと取かへて給せたり。  
伊勢の海ならねどきよきなきさに貝や拾など、  
聲よき人にうたはせて、我も時々拍子とりて、聲  
うちそへ給ふを、箏ひきさしつゝ、愛で聞ゆ御菓な  
どめづらしきさまにて参らせ、人々に酒しるぞし  
などして、をのづからものわすれもしぬべき夜の  
さまなり。

とあるをもむきによりて作れり。  
三いつとなくながき夜を、かたりあかしのうらな



いかでいはねの松の葉の、ちぎりはするもかはらし。

此唱歌は源氏都の紫の上の方へ御文あり。其文に、

あやしうものはかなき夢をこそ見侍りしか、かく聞ゆるとはすがたりに、隔なき心の程はおほしあはせよ。

と明石の上の事を仄めかし給ふ。紫の上より御返しに、うらなくもおもひけるかな、契りしを松より波はこえじものぞと。

並に岡部の宿へ行給ふ時の卷の詞に、

鐘の聲松の風にひびきあひて物かなしう、岩に生ひたる松の根さしも心ばへあるさまなり。

とある詞をとりあはせて、うらなくもいかで岩根の松といひ、紫の上の歎きを取て、松の葉の契りは末もかはらしといひて、いつとなく常に明石の上とかたるにあかせども、紫の上と契り深き事は、いかでかいはぬ。波こさじの契りはかはるまじとおもひ給ふ情をのべて

五庭の落葉かむらさめか、かきならす琴のねか、よそにしられぬわが袖に、あまりてもるゝ涙かな。

此唱歌は源氏海の上くもりなくのどやかなる月に乗じ、袋より琴を取出し、かきならし給ふ時、明石の上の住給ふ岡部の方へも聞えたるべしといふ事を卷の詞に、

廣陵といふ手あるかぎりすまし給へるに、かの岡邊の家も松のひびき浪の音にあひて、こゝろばせあるわかき人は、身にしてみておふもべかめり。とあるをもむきを取て、明石の情をのぶるなり。

六 四智圓明のあかしがた、まよひの雲もうちはれて、やへよきいづる九重の、一都にかへるうれしきよ。

佛の四智は大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智なり。此四智の事成唯識論にあり。四智圓明のあかしがたとは、源氏ものがたりの表白に、

作れりと見ゆ。

四幾夜あかしの浦の浪、よせてはかへりうきしづみ、あはれをおもふおりからに、あはれをそへてなく千鳥。

あかしの卷に千鳥の事はなけれども、須磨の卷に、

例のまどろまれぬ曉の空に、千鳥いとあはれになく。

歌に、

友千鳥もろ聲になく曉は、ひとり寢覺の床もたのもし。

まだおきたる人もなければ、かすくひとりごちて臥給へり。

とあり。千鳥は明石にも相應なれば、此須磨の卷を引て此唱歌を作れるならん。

新古今に

公 經

つくくとおもひあかしの浦千鳥、浪の枕になく

くぞきく。

といふ歌の情にひとし。

生死流浪の須磨の浦を出て、四智圓明のあかしの浦にみをつくし。

と綴りたる言葉をとれるなり。

源氏歸洛の時の卷の詞に、

君は難波の方にわたりて御扱し給ふて、住吉にもたいらかにて、色々の願はたし申べきよし、御使して申させ給。ことなる御道遙などなくて入給ひ、二條の院におはしましたつきて、都の人も御とも人も夢の心地して、ゆきあいよろこびなくも、ゆきしまでたちさはぎたり。トあり。

此唱歌の綴りは、四智圓明にして迷ひの心なしと明石の月におほひし雲の晴たるごとく、冤罪もきよくはれて、八重の潮路に船をいだすといふて、八重崎出とは八重咲出と言葉をかけ、八重櫻けふ九重といふ歌の縁を以て、花の都へ歸るうれしさいかばかりぞといひなせり。かの須磨の卷に、源氏都をいでなんとする時に、いつかまた春の都の花を見む。時うしなへる山賤にして。



命婦の返しに、

咲てとく散ば憂けれど、行春は花の都をたちかへり見よ。

とある此往復の歌とよく首尾せし唱歌ならずや。

末 松

一 するの松山浪こすとも、かはらぬ色は松がえに、

君がちとせのかぎりなき、みぎはの池に龜あそぶ。

末の松山は陸奥の名所なり。むかしみちの國に住ける男女、末の松山を見て、あの山を浪の越なん時に、契りはかはらむといひし事あり。山のあなたの海の、はるかに見へわたりて、浪の山のうへよりこゆるやうに見ゆれど、まことに浪のこゆるはあるべくもなき事なれば、あの山の浪のこゆる時もあらば、契りはかはるべしと誓ひけるなり。是我契りの變るまじきをいはんとてなり。是より

三 中へに今はたゞおもひたえなんとばかりを、人づてならでいふよしもあらで、こがる、身ぞつらぬ。

此唱歌は索居て逢れぬ情をのべたり。

後拾遺に

伊勢齋宮わたりよりまかりのほりて侍ける人ししのび通ひけるあ、おほやけもきこしめして、守女など付させ給て、忍びにも通はずなりにければ、讀侍りける。

今はたゞおもひたへなんとばかりを、人づてならでいふよしもがな。

といふ左京太夫道雅の歌を引て、今契りし人にあはれず、今は只おもひたゆべしといふ事ばかりなりとも、人傳てならでいひたきに、それさへもかなはず、おもひこがる、身ぞつらきといふ情をのべたり。

四 信夫山へあはれしのぶの道もがな、人の心のおくまでも、見てややみなむわがおもひ。

契りの變する事を末の松山浪こゆるといふなり。

此唱歌の心は、たとひ末の松山を浪こすともかはらぬ契りは色變ぬ松のごとく、君が身は千とせのかぎりなき身といふを、みぎはといひかけ、汀の池には萬世の齡をたもつ龜もあそぶと、松と龜とをもて契れる人のよはひを祝し、いつまでもちぎりはかはるまじといふ情をのぶるなり。

二 身にしみわたる秋のころ、月も隈なきねやのとな、

かへるさつぐるくだかけの、まだきになくぞうらめしき。

くだかけは家鶏なり。東國には家をくたといふよし八重垣にいへり。萬葉集に鶏の字を讀てかけといひしは、東國の方言なりとぞ。

此唱歌はあふ夜の明なんとする閨情をのべたり。伊勢物語の、夜もあけば狐に食めなで家鶏の速きに鳴きて夫を遣りつるといふ歌によりて作れる唱歌なり。

あはれはあつばれなり、あつばれしのびて逢ら、道あらば、心の奥を見つべしといふ語意なり。

○ 信夫は奥州の地名なり信夫を忍ぶにいひかけ、心の奥を奥州の深き路にいひよせたる詞なり。

新勅撰に みちの國にまかりて、女につかはしける業平朝臣

しのぶ山しのびてかよふ道もがな、人の心の奥も見るべく。

といふ歌を述たる唱歌なり。右の歌伊勢ものがたりにも出。

五 小夜千鳥よもすがらなくは、我を訪ふやらむ。

須磨のすまひのものうきに、涙をそふる聲く。

是は源氏の須磨さすらへの情をのべたる唱歌なり。

須磨の巻に。

例のまどろまれぬ曉の空に、千鳥いと哀に啼。

友千鳥もろ聲になく曉は、ひとり寢覺の床もた



のもし。  
まだをきたる人もなければ、かへすくひとりごちてふし給へり。

とあるをもむきをとりて、謫居瀟條として、都の紫の上などの事を戀したはせ給ふ情をのべたり。

六 契りきなかたみに袖をしぼりつゝ、すゑの松山浪こさじとは。いかにいひけん、あだに成りしうらみかや。

後拾遺に心かはりて侍ける女に人にかはりて。

清原元輔

契りきな、かたみに袖をしぼりつゝ、末の松山浪こさじとは。

歌の心は玄旨ふかく、あたに心かはるものを、たがひに袖をしぼりて、なみこさじと契りけるよなと、おし耻しむるやうにいへるなり。かはる心をうらみずして、かはるとしらは契らじものを、さて契りけるよなとなり。

空 蟬

此卷のをもむきにより、ならびに五段に須磨の事をいひしうつりに、紫の上の事を作れるならむ。

此曲は全篇源氏とうつせみの情をのべて作れりと思ゆ。

かしきかな。

とかき給へるを、ふところ引いれもちたり。

とあるをもむきにて作れる唱歌なり。

小夜衣とは新古今に季廣が不邪淫戒の歌に、

さらぬだにおもきがうへの小夜衣、わがつまならぬつまなかさねぞ。

といふ歌の心をこめて、かの空蟬が源氏にあひ奉らすぬぎすべしたるうす衣に兼合して、作れるならむ。

あやなはあやなくなり。

續後撰に

權中納言定頼

梅の花折ける袖のうつり香に、あやなむかしの人ぞ戀しき。

といふたぐひなり。

二尋ねても中／＼に、あはでの森のあはでのみ、つれなきものは命にて、ひとりむねをやこがすらむ。

○阿波手の森 尾張にあり。

源氏其夜うつせみの寢所へしのびたれど、かくれて逢

手習ひのやうにかきすさみ給ふ。

空蟬の身をかへてける木の本に、猶人がらのなつ

一 うつせみのあるかと思れど、面影のかけもあや

な。香をとめし小夜衣もぬけし人ぞ戀しき。

源氏伊豫介が宅へ方違へにおはせし時、伊豫介留守にて、妻の蟬空に懸想し給ひ、しのび給ひし事、帚木の卷にあり。空蟬の卷にて、空蟬の弟小君をみちびきにして、又しのび給ひけれど、逢奉らず、卷の詞に、

顔をもたけたるに、ひとへうちかけたる几帳のすきまにくらけれど、うちみじろぎよるけはひ、いととし

し。あさましくおほへともかくもおもひわかれずや

やおらおきいで、すゝしなるひとへひとつ置きて、すべりいでにけり云々。かのぬぎすべしたるうすぎ

ぬをとりて出で給ひぬ云々。ありつる小桂をさすがに御衣の下に引いれて、おほとのごもれり。小君を

おまへにふせて、よろづにうらみ、かつはかたらひ給云々。しばしうちやみす給へど、寝られ給はず、御硯いそぎめして、さしはへたる御文にあらで、只



ざりし卷の趣によりて作れる唱歌なり。詞のつゞりはたづねても中々にあはずといひかけて、あはでの森のあはでのみと森の名によりて興じ、あはでの森は蟬の相應なれば、空蟬にあはざりし事をふくませて、かたぐい用ひたるなり。

建保名處百首に

藤原康光

わびはつる身をうつせみのおのれのみ、あはでの森に音をや鳴らん。

といふ歌の情にひとし。

三よるくにもわが袂ぬれつゝまさる戀ごころ、人こそしらね、わすられぬ身の程いかでわびまじ。

此唱歌は空蟬の卷に

つれなき人もさこそしづむれど、いとあさはかにもあらぬ御氣色を、ありながらのわが身ならばと、とりかへすものならねど、しのびがたければ御たうがみのかたつかたに。

空蟬の羽にをく露のこがくれて、しのびくりに

松いく世経ぬらむと、たゞ久しく年をふる事に讀り。

五 おもひかさねて、年月をふればむかしのなつかしく、

おもひいでたる今宵しも、涙に雨やさそふらむ。

源氏須磨へをもむき給ひし前の年、伊豫介常陸守になりて下りし時、空蟬も伴ひゆけり。關屋の卷に

伊豫のすけといひしは、故院かくれさせ給て又の年ひたちになりて下りしかば、かのは、きいもいざなはれにけり。須磨の御旅居もはるかなりと聞て、人しれずおもひやりきこえぬにしもあらざりしかど、つたへ聞ゆべきやすがだになくて、筑波根の山を吹こす風もうきたる心地して、いさゝかのつたへだになくて、年月かさなりにけり。

とあるをもむきをとりて、うつせみの源氏をおもふ情をのべたる唱歌なり。

六とにかくにくまことあはらばあらいその、

ぬるく袖かな。

といふ言葉によりて、空蟬の戀心、人こそしらね、源氏の御事をわすられず、人の妻ともならずありしまゝの身ならば、御心にまかせ奉るべきに、今のわが身のほどおもひまはして、いかでわびまじやおもひわぶといふ心をのべたるなり。

四 戀しゆかしとつれなくもかひなき世にもすみよしの、

松はわが身のおもひにて、あはでや年をふるらむ。

此唱歌は 續拾遺に 戀の心を

中原行範

うらみてもいく世になりぬ、住吉の松はつれなき色に戀つゝ。

といふ心にて、源氏の空蟬をこがれ給ふ、情をのべたり。

古今に

住吉の岸の姫松人ならば、いく世か經しとはましものを。我見ても久しくなりぬ、住吉の岸の姫

なみのあなたにへだつとも、よるべのなどかなからむ。

浪のあなたといふ言葉は、續千載に

信定

わだつ海の浪のあなたの人はずむ、心あらなむ風の通ひ路。

此唱歌の心はたとひ海路をへだつとも、まことの心あらばなにしによるべのなからまじや。隔りてあはれぬ戀なりとも、まことあはらば、あはれまじき事はあらじとなり。是空蟬のひたちへ下り居るを、源氏のおもひしたふ情をのべたる唱歌なるべし。

空蟬は父の中納言うせ給て後、伊豫介が妻になるひたちのかみになりて下りし時ともなひ行き。關屋卷にて夫とともに京へ歸れり。同じ卷におとこにおくれて後、まゝ子の河内守懸想しけるをいとひて尼になり、後にはかたぐいの數に入て、源氏の居給ふ六條院に住けり。

四季富士



序たごの浦浪うちいで、見れば、雲井に高き名の、

山のすがたによつの時、わくるぞわきていひしらぬ。

此唱歌は赤人の田子の浦うちいで、見れば、白妙の富士のたかねに雪はふりつゝといふ歌より取て詞を起し、雲井の空に秀たる高き名山といふと、天下に聞えたる高き名の山といふ心をかねて、あはせて言葉をつゞり、四の時わくるぞわきていひしらぬとは、玉葉集に永福門院の、心うつる情いづれとわかかねぬ、花ほと、ぎす月雪の頃といふ御歌の心にて、富士の春夏秋冬其時々の景色いづれもともにすぐれたれば、いつをよきとわくる事はわきていひがたしと、是四季の勝景を甚賞して序引の言葉とせり。

二春は霞のあさもよひ、きのふの雪をそれながら、  
うへなき花の色ぞして、見るや山はふじのね。

ヨイ也。此類か。

三雪にたとへてみへがさね、扇をとれる手のうち、

夏はきえて、ゆふ暮のながめをうつすふじのね。

いふ心は、白きみへがさねの扇を手にとりて、芙蓉三峯の雪になぞらへて見つゝ、あふけば涼風手裡に生じて夏日のあつさは消えゆきて、秋氣來たり生ずる心地して涼しく、翠嶽暮景の眺望さはやかにして、又面白しとなり、手のうちといふ言葉には涼風を含みたり。

按ずるに此唱歌は、白樂天の扇の詩に盛夏不消雪、終年無盡風、引秋生手裡、藏月入懐中。此詩の句によりて作れるなり。盛夏不消雪といふ句を取つて、富士の雪と扇を興じて雪にたとへて、みへがさねといひ、引秋生手裡といふ句を取て、扇をとれる手のうち、夏は消てゆふ暮のといふて、晩涼望嶽の趣をのべたり。

此唱歌は新古今に

前大僧正慈圓

あまの原ふじの煙の春の色の霞になびくあけほのそら。

新拾遺に

權大納言義詮

富士のねの雪には春もしられぬを煙や空にかすみそむらむ。  
といふすがたありて、心は冬の雪を其まゝに氤氳として、霞わたれる朝けしき、上なき春花の眺なりと、富士の高き雪を花に見立て、賞したる興趣なり。

あさもよひは、きとつゞける枕詞なり。萬葉集に人ならば母の最愛子ぞ麻毛吉紀の川づらの妹と脊の山。

といふたぐひなり。此唱歌は春は霞の朝もよひとつゞき、昨日のゆきとつけて、言葉をつゞれり。

按ずるにあさもよひ萬葉の麻毛吉と書たるに據ればいのかなしかるべきに似たるゆへ尋ね奉りし、紀光卿御答に、定家卿の説に、朝催アサモヨイきとつづける枕詞也。朝の食する氣也云々又雪催ユキモ

四秋はさらなり、月雪見ぬ人にしもかたりなば、中々なれや中々にいはでやみなんふじのね。

中々といふ言葉は、かへつてといふ心と、なまなかといふこゝろと二つの義あり。

新拾遺に

左兵衛督基氏

秋ながら影こそほれ、ふじのねの雪にうつろふ夜々の月。

といふ歌の景象にて、此唱歌の心は、秋は猶更富士の月と雪との眺望いふにはれぬ勝景なり。此景色を見ぬ人にかたりなば、かへつてさほどの想もなさじ。なまなかにかたりて興さめんより、寧いはでやむべしとなり。賞意あまれる唱歌なり。

續千載に 嘉元百首歌奉りし時旅

前大納言有房

言の葉もおよばぬ富士の高ねかな、都の人にいかかたらん。

といふ賞詞にひとし。

五三冬になれば都人待らむ雪をとりがなく、



あづまにすめば、あさゆふに見てこそあらめふ  
じのね。

此唱歌の心は、冬になりて都に待雪を、此東國に住ば  
ふじの雪色を朝ゆふに見てこそあれ、都の人に見せな  
ばいかばかりの奇観をなさん、見せたきとなり。

都人まつらむといふ言葉は。

續後拾遺 山家郭公を 菅原在良朝臣

都人待らんものを、山里に聞ふるしつるほと、

ぎすかな。

といふたぐひなり。

○鳥がなくとはあづまといふまくらことばなり。萬  
葉集に。

いきの松にわがおもふ君は鶏が鳴東方の坂をけ  
ふかこゆらむ。

といふたぐひなり。

末時しらぬ山はふじのね、いつとてか、かのこま  
だりに雪のふるらん。かのこまだりに雪のふる

齋と書る事も見ざれば、かねて不審のたくはへも  
なく、かく註する事もおもひまうけぬ事なれば、  
關らぬ事におもひ、且宴席なれば、文字談も不興な  
らんとあながちに其據を推尋る事もせざりき。な  
まなかに學生なれば、自見臆説の嫌もあれど、今に  
しては其言葉の信じられて、いよく推尋ねざり  
し事の残多くおもひ侍る。今其隴西の文字に因て  
考るに、隴西は隴山の西なり、隴山は蜀の山につ  
きたる山なりと、史記の註にも見えたり。得隴  
望蜀とも、或は隴蜀ともつゞけていへり。蜀の望  
帝といふみかど、死してほと、ぎすと成たるとて  
子規の啼を聞て、蜀の民したへりとなんいへり。  
それゆへ子規の異名を蜀魄ともいふ。蓋蜀山隴山  
の方は杜鵑多き地なるべし。且又古樂府に隴西行  
といふ題有て、夫隴西の方へ軍役に行て辛苦する  
事を、婦人怨思ふて作りけりといふと、梁簡文帝  
の説を卓氏藻林に出せり。夫故此題にては、多く  
は離愁別恨の閨情を詩に作れり。今此らうさいの

らむ。

此唱歌は伊勢ものがたり。

富士の山を見れば、五月のつごもりに雪いとし  
ろうふれり。

時しらぬ山はふじの根、いつとてか、かのこま  
だりに雪の降らん。

とあるを寫して末章とし、反復吟詠してかぎりなき賞  
情をよせり。

雲井弄齋

雲井の調子ゆへ、雲井弄齋といふ。扱弄齋といふ  
事を法師に問に、むかし弄齋といふ人、此曲を作  
り出せしゆへ、弄齋といふよし聞傳へたりといふ  
是につきておもふに、前かた或席にて、箏彈たる  
を聽て、其曲は何ぞと問しに、らうさいといふ。  
文字はいかゞ書らんと、ひとりいふやうにいひし  
に、側に或浦人ありしが、らうさいとは隴西と書  
よし承りしといへり。其時箏の唱歌集も見ず、弄

曲も、男女の間の事を賦して、別れを歎き、面影  
を慕ふなどの情をのべて、或は山の端かほと、ぎ  
すかといふて情を寄り。此曲にも月とやいろやれ  
のふ山の端に、はなれくの浮雲といひ、新雲井  
らうさいには、月もろともにほと、ぎす、なきて  
入佐の山の端といひ、さみせんらうさいにも、  
山の端にいかな夜もく人こそしらね、聞は涙の  
淵となる、よしやなけかじ、かなはぬとも、さ  
だめなきこそ浮世なれ。われふりすて、一聲はか  
り、いづくへゆくぞ山ほと、ぎすといへり。皆是  
山か時鳥かをいふて閨情をのべたり。かたぐ隴  
西の文字據あるに似たり。夫相府蓮の曲が想夫憐  
になり、臨河の曲が林歌になれるごとく、隴西を  
弄齋に轉訛せし事もはかられず。是定説とはしが  
たけれども、しばらくこゝにしるして、後の考を  
まつ。

一月とやいろやれのふ山のはに、はなれくのう  
き雲見れば、あすのわかれもあのごとく。



○ヤは助聲、ヤレはおもひを興す詞なり。のふは打  
歎く詞也。

是は逢夜、山の端にかたぶく月を見て、影をしたひ山  
に入りたやといふて、なごりをおしむ情を寄せ山邊の  
はなれくゝの雲を見て、明日はあのごとく別れてたが  
ひに空を歎くべしといふ心を興ぜし唱歌なり。

○今田間の歌謠に。

はなれくゝのあの雲見やれ、さまのわかれもあの  
ごとく。

と、是いつの世より民間に謠ひ來れるや、たま〜此  
唱歌に同じきゆへ、こゝにしるして、古昔采詩の義  
擬るのみ。

二 おもひそめたよ濃き紫の、袖はちしほのわがな  
みだ、さゆる我が涙。

此唱歌の心は深くおもひそめてより、袖もなみだの千  
入にこきむらさきの色に染たるとなり。

新古今に 中將更衣につかはしける。

延喜御歌

住吉のわするゝ草のたねもがな、つれなき人を  
よそにおもはん。

詩衛風

焉得二 諼草一 言樹之背一 願言思レ伯  
使二 我心痛一

此心は何とぞ萱草を得て、北の庭に植たし。夫を  
おもひつゞけて、わが心をなやますにたへがたけ  
れば、此草を見て憂をわすれたやとなり。

、民間の歌謠

わすれ草がな一もとほしや、植てそだてゝ君に  
やろ。

是亦いつの時より謠きたれるや、此唱歌に同じ。夫詩  
歌は性情に發するものなれば、貴きも賤きも、漢も和  
も同じき事多し。

○按ずるに、此曲の唱歌催馬樂の體製に似たり。催

馬樂、新年に

あたらしき年のはじめにヤかくしこそハレかくしこ  
そつかへまつらめや萬世までにアハレソコヨシヤよ

むらさきの色に心はあらねども、ふかくぞ人を  
おもひそめつる。

新拾遺に

隆観

唐衣戀のなみだのくれなひに、いくしほ袖の染  
まさるらむ。

同集に

基良

せく袖のなみだの色やくれないの千しほの衣そ  
めてくちなん。

といふたぐるの心にひとし。

三 わすれ草がな、のふひともとほしや、うへてそ  
だてゝ、見てわすれよ。さゆる見てわすれよ。

古今に

つらゆき

道しらばつみにもゆかん、住の江の岸におふて  
ふ戀わすれ草。

同

よみひとしらす

わすれ草たねとらましをあふ事のいとかくかた  
きものとしりせば。

新後拾遺

ろづ世までに。

是アハレソコヨシヤは歌の節なり。末の萬世までにと  
は反復して詠歎するなりと、萬葉緯にとけり。この唱  
歌サユエイ打かへす爲の歌の節なり。サユエイわが涙  
サユエイ見てわすれよ、皆是うちかへして詠歎する詞  
也。

又山城に

山城の狛のわたりの瓜作りナヨヤライシナヤ。

又伊豫湯に

伊豫越の奈古戸の葛わがひかば、やう〜寄來ヤ

レソヨヤナヨヤ忍び〜にや。

と是も皆歌の曲節なりとぞ。サユエイも此類なり。

又江都の戲場にて長歌といふて、舞の地あり。其舞の  
うちにサヨエと懸聲せし事ありとかたりし人あり。是  
亦サユエイなるべし。

九段之調子

七段之調子



箏曲考卷之三目録

奥 三曲

四季曲

扇ノ曲

雲井曲

四季

新 組

雲井九段

羽衣

若葉

思河

橋姫

新雲井弄齋

飛燕ノ曲

箏曲考卷之三

四季 曲

一花の春たつあしたには、日かげくもらでにほやかに、  
人のこゝろもをのづから、のびらかなるぞ四方山。

此唱歌は源氏初音の巻に、

年立かへるあしたの空のけしき、なごりなく曇らぬうらゝかさには、數ならぬ垣ねのうちだに、雪間の草わかやかに色つきそめ、いつしかとけしきだつ霞に、木の芽もうちけぶり、をのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。

とあるをもむきをのべて、序引とし、次の四季の唱歌は定家の一字題によりて作れりと見ゆ。夫れ四季に應じて賞すべきものをかぞへいふて、中につき、春は花、夏は水、秋は月、冬は雪、其時賞の主となるものを段

び櫻桃梨さすやひばり、かわつなく萱山吹つ、  
じ藤、夏にもなればあふひ草ほと、ぎす五月雨水  
鶏の鳥に卵の花、ほたるや蟬にあふぎはちす、い  
づみや秋は又荻萩露にす、き蘭雁鹿虫に霧の月、  
鶉や鳴に菊蔦紅葉や、冬は又時雨の霜のうすこほ  
り、あられみぞれに雪鴨鷹ふすま椎、と書れたり。

扇 曲

一あふぎは櫻のみへがさね、かすめる月を繪にかきて、水にうつろふこゝろばへ、ゆへなつかしきありさま。

源氏花の宴の夜弘徽殿のほそどのにて朧月夜の内侍にあひ給ふて、扇を取かへ給ふ、巻の詞に、  
かのしるしのあふぎは、櫻のみへがさねに、こきかたにかすめる月をかいて、水にうつしたるこころばへ、目なれたれど、ゆへなつかしうもてならしたり。

とあるを述し唱歌なり。

ことの末に出して、それに心うつせりて言葉を結べり。  
二春は梅にうぐひす躑躅や藤に棣棠、さくららかざす宮人は花に心うつせり。

櫻かざす宮人とは、新古今に 山邊 赤人  
百敷の大宮人はいとまあれや、櫻かざしてけふも暮しつ。

花に心うつせりとは 竹川の巻の歌に  
けふぞしる雲をながむるけしきにて、花に心をうつしけりとも。

三夏は卯の花盧橘菖蒲荷花瞿麥、風ふけば涼しくて水に心うつせり。

四秋はもみぢしかのねちぐさのはなにまつむし、雁なきてゆふぐれの月に心うつせり。

五冬はしぐれ初霜霰 霰 颯さへし夜の曙、雪に心うつせり。

一字題の謠に

そもく定家の一字の題に、春は先霞鶯梅柳わら

第五 箏 曲 考



しるしのあふぎは櫻のみへがさねを註に檜扇の兩方の上三重つゝうすえふにてつゝみて、色くゝの糸にてとちて、末をあはびむすびにして置たるなりといへり。

二たそがれどきのまぎれに、ほのくゝ見へてさけるは、小家がちなる軒のつまに、あまりてかゝるゆふがほ。

ゆふがほの卷の詞に、

いと小家がちにむつかしけなるわたりの、このもかのもあやしうちよろほいて、むねくゝしからぬ軒のつまなどに、はひまつはれるをくちおしの花のちぎりや、ひとふさ折てまいれと源氏のたまへば、このおしあけたる門に入て折る。さすがにざれたるやり戸口に、黄なるすゝしの一とへ袴ながくきなしたるわらはの、おかしけなる出来てうちまねく。白き扇のいたうこがしたるを、これにきてまいらせよ、枝もなさけなけなめる花をとてとらせたれば、門あけて、惟光の朝臣の出来

此唱歌は續千載に

夜なくゝの夢はかよへどあふ坂の關ぞうつゝのへだてなりけり。

といふ歌の心なり。

なこそはなこえそといふ語音に通ふ。なこえそは越る事なかれといふ儀なり。それゆへ關をゆるさぬ心に多く用ひたり。

堀川院百首

河 内

戀わびてきのふもけふもこゆべきに、なこそその關をたれかすへけむ。

夫 木

後九條内大臣

夢路にもなこそその關やつぐくらん、わが身にかよふおもかけぞなき。

といふたぐゐなり。

五戀ひくゝてこひくゝてこひしき人をまつち山、まつらむものを行て見ん、ゆきていざや逢見む。

待乳山

下總國にあり。

第五 箏 曲 考

たるしてたてまつらす云々。

とある卷の詞と歌とを以て作れる唱歌なり。是扇の縁あるゆへ、おもひよりて、初段の次に入たると見ゆ。且亦此曲初段は春、二段は夏、三段は秋、四段五段は戀、六段は冬と作者の用意して作れると見ゆ。

三むさし野もさらしなもすまやあかしのおもかげもうつして、こゝに見る月のながめはいつもひろさは。

武藏野更級須磨明石廣澤皆月の名處なり。廣澤にうつれる月にむかへば、むさしの更級すまあかしの月の面影さながら水にうかびてながめあかぬ心に作りなせり六百番歌合

更級もあかしもこゝにかよひきて、月のひかりを廣澤の池。

四夢にばかり夜なくゝおもふ人をみちのくの、奈古會關をたれかすへて、うつつにここともかよはず。

萬葉集

いで吾駒はやくゆかんよ、まつち山待らむ妹を

ゆきてはや見ん。

催馬樂 我駒

いであが駒、はやくゆきこせまつち山、あはれまつち山、あはれまつ土山、まつらむ人を、ゆきてはや、あはれゆきてはや見む。

六あかしかねたる霜夜の床もさびしき嵐のをとはそよくゝさらくゝとふるはあられの玉篋。

詞花集 たのめたりけるおとこの、いまやくゝと待けるに、まへなる竹の葉にあられのふりかゝりけるにきゝてよめる。

和泉 式部

竹の葉にあられふる夜はさらくゝに、ひとりはぬべき心こそせね。

雲 井 曲

一人目しのぶの中なれば、おもひはむねにみちの



くの、ちかのしほがま名のみにて、へだて、身をぞごがる。

○信夫 千賀 鹽竈 皆奥州の名所なり。

此唱歌の心は、人目忍ぶの中なれば、ちかくてもとをざかり、ちかのしほがまといふも名ばかりにて、おもふ中はへだたり侍るほどに、いと、おもひに身をこがすとなり。

○思ひはむねにみちのくとは、おもひのひを火によそへて、思火はむねにみつるといひかけ、思火鹽竈といふより身をぞごがる、といへり。

千賀の鹽竈はちかといふにつけて近き心に多く讀り。

風雅集に 女のもとへ近き程にあるよしをとづれて侍りければ、今宵なん夢にみえつるは、しほがまのしるしなりけりと申て侍けるに、つかはしける。

前大納言爲家

聞てだに身こそごがるれ、通ふなる夢のただちの千賀の鹽がま。

あふからも物は猶、こそかなしけれ、別れん事をかねておもへば。

四雨のうちのつれづれ、むかしをおもふおりから、あはれをそへて草の戸を、た、くや松の小夜風。

新古今 俊成卿の歌に

むかしおもふ草の庵の夜の雨に、涙なそへそ山ほととぎす。

是松風とほととぎすの異なるばかりにて、同じ情なり。五身はうきふねのかちをたへ、よるべもさらにあら磯の、岩うつなみのをといつれて、ちどにくだくる心かな。

嘉元百首

定 爲

こぎよするしほせの舟の楫をたへ、よるべも浪に袖濡しつゝ。

詞花集に

源 重之

風をいたみ岩うつなみのをのれのみくだけ物

返し

安嘉門院四條

身をこがす契りばかりか、いたづらにおもはぬ中の千賀のしほがま。

續後撰

よみひとしらす

陸奥のちかの鹽がまちかながら、からきは人にあはぬなりけり。といふたぐるなり。

二 わするゝやわすらるゝわが身のうへはおもわれて、あだ名たつうき人のするの世いかゞあるべし。

拾遺に

右 近

わすらるゝ身をばおもはず、ちかひてし人のいのちのおしくもあるかな。

三 たまさかにあふとても、猶ぬれまさるたもとかな、あすのわかれもかねてよりおもふ涙のさきだちて。

古今に 物ノ名

をおもふ頃かな。

是等の歌を合して心かなへり。

六 雲井にひゞくなるかみも、おつればおつる世のならひ、さりとはわが戀のなごかはかなはざるべし。

此唱歌古今のあまの原ふみとゞろかし鳴神もおもふ中をばさくるものかはいふ歌よりおもひよりて、是は雲井にとゞろく鳴神も、落るならひなれば、なにしにわがおもふ人の落まじきやといふ作者の新意と見へたり。

四季 源氏

源氏三十四の御歳、六條院を造りはて、八月に移らせ給ふ。此六條院の内に四町を作らせ、巽の町に源氏住せ給ひ紫の上も住給ふ。此紫の上は藤壺の御姪にて、源氏北山にて見せ給ひ、ついに二條院へむかへ給ひ、其後六條院へ移り給ふ。あまたの御中に、すぐれていとありがたき御契りなり。春に心を



しめ給ひしゆへ、是を春の御前といふ。坤の町には六條の御息所の御むすめ中宮住せ給ふ。此中宮は葵の卷に、御年十四にて、伊勢の齋宮に立給ふ。みをつくしの卷に御位ゆづりによりて、都へ歸りのほらせ給。繪合の卷に、源氏の御沙汰にて、内へ参りて梅壺と聞えき。乙女の卷に、中宮に立給ひ、御法の卷に皇太后宮にならせ給ふ。六條院のやしないむすめなり。秋の空を心にしめ給ひしゆへ秋好中宮良の町には花散里住せ給ふ。花散里の上は、故院の女御麗景殿の御妹なり。故院の御時、女御の御方にて、源氏見そめ給ひて、其後此六條院に住給ふ。是を夏の御方といふ。乾の町には明石の上住せ給ふ。此明石の上は、明石入道のむすめにて、源氏彼浦に左遷の時通ひそめ給て、姫君をうめり。松風の卷に、彼の浦より都へのほり、大井の里に住しが、乙女の卷に六條院へ渡り給ふ。是を冬の御方といふ。委敷事は乙女の卷に見ゆ。此曲は中宮と紫の上と春秋の間答の歌を引、花散里の御姉麗景殿の歌を

まこといもなりけり。かくとりあへずおもひより給へるゆへくしざなども。おかしく御らんず。

とあり。

秋好中宮の御歌の心は、心から春を心にしめ給ふとも、秋の紅葉の面白さをも御覽ぜよとなり。紫、上の返しの心は、もみちは春の花よりはかろし、いはねの松ともに春のけしきを見るべし。春の色こそふかくまされりとなり。

二人目なくひとめなくあれたる宿は、橘の花こそ軒のつまとなりけれ。むかしをしのぶほととぎす。

花散里の卷に、

此頃残ることなくおほしみだる、世のあはれのくさはいには、おもひ出給ふに、しのびがたく、五月雨のめづらしうはれたる雲間にわたり給ふ。なにはかりの御行装なく、打やつして御前などもことなく、しのび給へり。中川の程おはするに云々。おりしもほととぎすなきてわたる云々。扱かの本

引、亦紫の上の冬の歌ならびにあかしの上の事を末にのぶ。それゆへ曲の名を四季源氏と號く。一風にちる紅葉はかろし、春の色を岩根の松にかけて見ましや、とにかくにわすれぬ花のおもかげ。

乙女の卷に

九月になれば、紅葉むらく色つきて、宮のおまへえもいはず面白し。風打吹たる夕暮に、御箱のふたに色々の花紅葉をこきまぜて、こなたに奉らせ給へり云々。御消息には、

心から春まつ園はわが宿の紅葉の風のつてにだに見よ。

わかき人々御使もてはやすさまどもおかし。御返りは此箱のふた苔しき巖などの心ばへして、五葉の枝に

風にちる紅葉はかろし、春の色を岩根の松にかけてこそ見ゆ。

此いはねの松も、こまかに見れば、えならぬ造り

意所はおほしやりつるもしるく、人目なくしづかにて、おはする有様を見給ふもいと哀なり。まつ女御の御方にて、むかし御物語などきこへ給ふに、夜更にけり。廿日の月さし出る程に、いと木高きかけどもこぐらう見えわたりて、近き橘のかほりなつかしく匂ひて云々。ほととぎすありつる垣根のにや、同じ聲にうちなく云々。橘の香をなつかしみ、ほととぎす花ちる里を尋ねてぞと云々。人目にも荒たる宿は、たちばなの花こそ軒のつまとなりけれ。此歌の心は、橘の花ちる里を尋ると源氏の宣ふは橘ゆへにこそ問れまいらすれといふなるべし。つまとなりけれとは、源氏に問るはしとなりしとなり。軒の端をつまといふゆへ、かけあはせていへるなり。

三をのづからく春まつ園は、わが宿ののみちを風のつてにだに見よ。ませによせし色々。

此唱歌は秋好中宮の御歌をのべたり。すでに上に見ゆ。ませによせし色々とは、はじめの卷の詞に、御箱



のふたに色々の花紅葉をこきまぜてとあるにより  
て籬の中の秋花をいへり。

四こほりとちく石間の水は行なやみ、空すむ月  
のかげぞながるゝ、影こそながれながるゝ。

あさがほの巻に

雪のいたう降つもりたる上に、今も雪ちりつ、松  
と竹とのけぢめおかしう見ゆるゆふ暮に、人の御  
かたちもひかりまさりて見ゆ。時々付ても、人  
の心をうつすめる花紅葉のさかりよりも、冬の夜  
のすめる月に、雪のひかりあひたる空こそあやし  
う色なきもの、身にしてみても、此世の外のことまで  
おもひながされ、おもしろさも、あはれさも、の  
こらぬおりなれ。すさまじきためしにいひをきけ  
む人の心あさよとて、簾まきあけさせ給ふ。月  
は隈なくさし出て、ひとつ色に見えわたされたる  
に、しほれたる前裁のかげ心ぐるしう、やり水も  
いといたうむせびて、池の水もえもいはずすごき  
に、わりわべおろして、雪まらばしせさせ給ふ云々。

めをいふて、源氏と明石の上とあさからぬちぎりを興  
じて作れると見ゆ。源氏あかしに左遷の時、明石の上  
と契り給ひ、歸洛の後彼浦にて姫君うまれさせ給ひ、  
松風の巻にて姫君母明石の上に供して、都へのほり給  
ひ、藤の裏葉の巻にて、姫君は東宮へ参りて若菜の巻  
にて、東宮をまうけ奉る。明石の上はかの六條院の西  
北の町に住せ給ひて、冬の御方といへり。かゝる御契  
りゆへ、深き契りぞ朽せぬえにしなるべしと作れる唱  
歌の心と見えたり。且又紫の上の歌は春、女御の歌は  
夏、中宮の歌は秋、又紫の上の歌は冬、是にて四季は  
そろへり。しかれども、彼六條院の四町の内にて、冬  
の御方といひし明石の上の事も、ゆへ、紫の上の冬  
の歌のうつりに、其巻の言葉を取て末に明石の上の事  
を出せりと見ゆ。このうへに冬の唱歌二つあるなり。

新 組

雲井九段

昔今の御物語に夜ふけゆく。月いよくすみてし  
づかに面白し。女君、

氷とぢいしまの水の行なやみ、空すむ月の影ぞ  
ながるゝ。

此歌の心は、氷に水は行なやむに、月はやすうなが  
るゝとなり。やり水などのおりふしのさまおもひや  
らる。

五あかざらむ花も紅葉もわすられつ、ながめあか  
しの雪のあけばの、深きちぎりぞ朽せぬえにし  
なるべし。

此唱歌は右のあさがほの巻に、花紅葉のさかりよりも  
冬の夜のすめる月に雪のひかりあひたる空こそとあ  
り、ならびにあかしの巻に、はるくゝとものゝとこ  
ほりなき海面なるに、中く春秋の花紅葉の盛なるよ  
りはとある、かたぐゝの詞によりて、作者のあらたに  
あかしの雪のをもむきをのべていふ心は、もろとも  
ながめあかす明石の雪のけしきには、かのながめあか  
ぬ春秋の花紅葉もわすれつるかなと、雪のふかきなが

羽 衣

一君のめぐみは久かたの、あまのはごろもまれに  
きて、

なでしいはほはそのまゝに、うごかぬ御代のた  
めしかな。

佛説に磐石劫とて、四千里の巖を、天人の羽衣に  
て撫盡すを一劫とすといふ事あり。

拾遺に

よみ人しらす

君が代はあまのはごろもまれにきてなづともつ  
きぬいはほならなん。

二星をとなふるすべらぎの雲のうへまでのどか  
なる、あしたのけしきあらたまの、春日くもら  
ぬあめがした。

星をとなふるすべらぎとは、元日に天子みづから  
星の御名をとなへさせましますなりと八重垣にい  
へり。

按ずるに、禮儀類典正月一日四方拜の部に言胤卿



記を引て曰、長享三年正月朔日庚辛、早

旦浴湯着衣冠於庭上敷疊拜其儀先

向北稱星名號存星七反再拜次

稱當年星名號南無水七反拜次稱咒文

次拜天乾次拜地坤次拜四方東南西北

とあり。此外園太曆玉海法性關白記などの諸書を

引て、元朝四方拜の時星の名をとへ給ふ事を出

せり。則此事なり。

年中行事歌合に

女房

すべらぎの星をとのふる雲の上に、ひかりのど

けき春は來にけり。

三奈良の小川の夕風に白木綿かゝるなみのをと、  
神の心をすゞしめの御祓を夏のしるしなる。

新勅撰に

正三位家隆

風そよぐ奈良の小川のゆふぐれば、みそぎぞ夏

のしるしなりける。

四よはひ久しきやまひめのる袖匂ふ菊の露、う

此曲はわかむらさきの巻によりて作れる初草のわ  
かばのうへを見つるよりの歌によりて、若葉と名  
付。若葉はすなはちわかむらさきの事をいへり。

○若紫の巻のおもむきは、源氏藤壺の后をおさなき  
より心に懸給ひ、思ふ心のやるかたなく、人の數  
を御覽するも、我が御心やなぐさむとおほせど、  
なぞらふべき人もあらず。彌生の頃源氏わらはや  
みし給ひ、北山にたふときひじりあり、加持たの  
み給はんとて、北山へ行給ひ、其夜とまりてこ、  
かしこあるき給ふ。其頃先帝の御子、兵部卿宮の  
御子紫の上といふ姫君、藤壺の後の御姪なり、紫  
の上御母におくれ給ふて、祖母君に育られおはし  
ましける、此祖母君は北山の聖の弟子僧都の姉な  
り。此祖母君も病氣にて禱などせんとて、姫君を  
もつれて、北山におはしけるを、源氏垣の際より  
姫君のおさなき御容のうつくしく、藤壺によく似  
給ふを御覽じそめ給ひ、いかにしてかとり奉りて  
御心のまゝにかしづき立て、藤壺の御かはりにも

ちはらひ打はらひ千とせの秋や送るらむ。

新古今に 文治六年 女御入内屏風歌

仙人の折袖匂ふ菊の露、うちはろふにも千世は

經ぬべし。

五 鴛の海面見わたせば、たぐひなみまに有明の月  
かげさえてしろたへの雪をかけたる勢田のは  
し。

新拾遺に

惟賢上人

さゝなみやうちいで、見れば白妙の雪をかけた

る勢田の長橋。

六 萬世かけて相生の松と竹とのふかみどり、かわ  
らぬ色はもろともに老せぬ契りなるべし。

續後撰に

右近大將光國四十賀の屏風に

素性法師

うへて見る松と竹とは君が世に千とせゆきかふ  
色も更らじ。

若葉

見奉らんとおほしめし、彼僧都に問て、祖母君に  
いひより、終に其年京の二條院へとり奉りてそだ  
て給ふ。

一 ゆかりよしある初草の若葉のうへを見つるよ  
り、いとどかはかぬ袖の露、猶うきまさる旅寢  
かな。

源氏紫の上を見給ひ、祖母君のめしつかひ給ふ少納言  
をして、祖母君へいひいるとて。

初草のわかばのうへを見つるより、旅寢の袖も  
露ぞかはかぬ。

二 うつゝなやひとりね、夜半の枕に吹まよふ深山  
おろしに夢さめて、涙もよほす瀧のをと。

巻の詞に。

曉かたに成にければ、法華三昧をおこのふ堂の懺  
法の聲、山おろしにつきて聞え來るいとたふとく  
瀧の音にひゞきあひたり。

吹まよふ深山おろしに夢さめて、涙もよほす瀧  
の音かな。



三 いざさらば宮人にゆきてかたらむ、櫻花このまのけしきことなるを風よりさきに見せばや。源氏都へかへり給ふ時、今此花の折をすぐさず、又此山へまいりこんとて。

宮人にゆきてかたらむ、山櫻風よりさきききても見るべし。

四 かくれがふかき奥山の、松の肩よほせをまれにあけて、まだ見ぬ花のかほばせを見るよりぬるゝむね。

此唱歌は、北山のひじり源氏に御土器かはらひを給りて。

奥山の松の戸ほそをまれにあけてまだ見ぬ花の顔を見るかな。

とうちなきて見奉る。

とあるをもて作れり。

五 たそがれすぐるおりから、ほのかに見えし花の色に、まよふ心はあさがすみ、立わづらふぞものうき。

此曲は新勅撰の歌をとりて初段の唱歌とし、因て思河といふを曲の名とし、全篇古歌に據て思ひの深き事をつくれるなり。

一 あふせあだなるおもひ川、岩間によどむみつぐきの、かきながすにも袖ぬれて、ほす日もいつとしらなみ。

思河は 筑前ちくぜんにあり。

新勅撰に

皇嘉門院別當

おもひ川いわまによどむ水みづをかきながすにも袖ぞ濡ける。

二 面影のつくぐと、わすれもやらでおもひねの、夢だに見へであけぬれば、あはでもどりのねぞつらき。

千載集に

戀の歌とてよめる 寂蓮

おもひねのゆめだに見えであけぬれば、あはでも鳥のねこそつらけれ。

三 いつのまにかはかきたためて、へだつる中となり

かの祖母君より僧を以て源氏へ今四五年をすぐしてこそは、ともこうもとのたまへば、源氏ほいなしとおほしめし、御歌を僧都のもとへ、ちいさきわらはして。

ゆふまぐれほのかに花の色を見て、今朝は霞のたちぞわづらふ。

六 いつしかに汲そめて、くやしと聞し山の井の、あさきながらもさりとは、たへぬ契りをたのまん。

此唱歌は源氏より祖母君への御文あり、其内に紫の上への御文もあり。

あさか山あさくも人をおもはぬに、など山の井のかけはなるらん。

祖母君の返しに。

汲そめてくやしと聞し山の井のあさきながらやかけを見るべき。

といふ歌にて作れり。

思 河

にけむ。見したまづさのもじが關と、名をきくだにもうらめし。

門司關もじのせき

豊前ぶぜんにあり。

新續古今に

よみひとしらす

かきたえてへだつる中となりにけり、見し玉章のもじの關守。

四 つれなくもゆく人をとどめかたみのから衣、たつよりいとどわが袖は露にぞしほるゝ。

拾遺に 天曆の御時御めのと肥前いぜんが國に下り侍りけるに、饌せんたまひけるに、藤壺よりさうぞくたまひけるにそへられたりける。

よみひとしらす

行人をとめかたみの唐衣、たつより袖の露けかるらむ。

五 戀わびてたゞひとり、ふせやのここによもすがら、おつる涙はおとなしの瀧とやながれいづらむ。



音無瀧 山城にあり。

詞花集に 家に歌合し待けるによめる。

中納言俊忠

戀わびてひとりふせやによすがらおつる涙や  
音なしの瀧。

六中くにつらからば、たゞひとすぢにつらから  
で、なさけのまじるいつはりと、おもへばふか  
きうらみかな。

嘉元百首

藤原爲相

はじめよりたゞひとかたにつらからで、なさけ  
をませしいつはりぞうき。

薄雪ものがたりに引る歌

つらからばたゞひとすぢにつらからで、なさけ  
のまじるいつはりぞうき。

橋 姫

此曲は橋姫しほ権が本早さき藤ふじ寄生せいき浮舟うきふね手習の巻によりて  
作れり。源氏の御弟に八の宮と申て、即ち宇治の東宮

たがひ給はず、是等の事を心の巻くりに書たるを  
とりて作れる曲なり。

一水のうへのうたかた、露にやどるいなづま、あ  
るかなきかの世の中を宇治川のはしひめ。

水のうへのうたかたは、和名鈔に沫雨まぐらをうたかた  
と訓して淮南子なんしの註に、沫雨ハ、フツコウ、フツコトシ上沫起コトシ若ニ  
覆盆フクボシといふを引り。水の上にふくれたる沫の出  
來るをいふなり。多くははかなき事に引ていへり  
六帖、素性歌、ふりやめばあとだに見へぬうたか  
たの、消てはかなき世をたのむかな。

○露にやどる稻妻は、續後撰に大納言通方、夢よ  
りも猶はかなきは秋の田の穂なみの露にやどる稻  
妻。又後拾遺に、世の中は何にたとへんといふふ  
ることを、かみにおきて、あまたよみ侍りけるに、  
源順、世の中をなにとへん秋の田をほのかに  
てらす宵の稻妻。あるかなきかの世は拾遺に貫之、  
手にむすぶ水にやどれる月かけのあるかなきかの  
世にこそありけれ。○橋姫は橋の下の姫大明神と

にも立給ふべき宮なりしが、冷泉院東宮に立せ給  
ひしゆへ、宇治へ移り居給ひ、大君中君とて姫君  
二人あり。是をそだて、琴など習せ給ふを、明暮  
の御なぐさみにて給へり。宇治山に聖だちたる  
阿闍梨あじかりありて、常々八の宮の山莊へ参りて、宮、法  
文などを讀ならひ給ふ。扱あつか薰中將時々宇治へ見舞  
給ひしが、其後大君をしたひ通ひ給へり。又匂宮  
と申も薰のみちびきにて中の君に通ひ給へり。後  
八の宮山莊にてをわり給ひ、大君も病にふしてむ  
なしくならせ給へり。其後薰中將大君中君などの  
別腹べつはらの兄弟浮舟といふ女君を京よりいざなふて宇  
治にしのび置り。其頃宮も京にて浮舟に契らせ給  
ひし事ありて、宇治に忍び居給ふを聞付て、ひそ  
かに通ひ給ふ浮舟世にあさましく思ふて、宇治川  
へ身をしづめんとせしが、ふしぎなからへに存て、比叡ひえ  
麓小野といふ處の尼寺に世をしのびておはせり。  
小野にて、中將とて、横川の僧都の御弟子の兄弟  
なるが、是もうきふねに心をよせ給へど、終にし

いふ神にて、離宮の神この姫神に通ひ給ふといふ  
説あり。古今の歌に、小菴こやまに衣かたしき、今宵も  
やわれを待らむ宇治のはしひめ。

此唱歌は宇治へ薰通ひ給ふ時の事を橋姫の巻の詞に  
あやしき舟どもに柴かりつみて、をのくになにと  
なき世の營いとなみどもに行かふさまどもの、はかなき  
水の上にかびたる、誰もおもへば同じ事なるよ  
のつねなさなり。われはうかばず玉の臺うてなに静けき  
身とおもふべき世かはと、おもひつゞけらる。硯  
めしてあなたに聞え給ふ。

橋姫の心をくみて高瀬さす棹のしづくに袖ぞぬ  
れぬる。

此巻の趣と歌の心を取て、水の上の沫露あはにやどる稻妻  
のごとく、はかなき世の中を憂うれといひかけて、父宮か  
くれさせ給ふ後、姫君達の宇治のうきすまるを薰のあ  
はれみ給ふ情をのぶるなり。

二身のうき時は立よらむ陰かげとたのみし権が本、む  
なしき里となりける契りのほどぞかなしき。



八の宮すぎ給ひし後、薫宇治へ行て、彼八の宮のおはせし所、床などを見給ふて、前かた八の宮に薫の我出家をしたればと、契りし事を思ひ出し給ふて、

立よらむ陰とたのみし椎が本、むなしき床になりける哉。

三峯におふるさわらび、むかしの花のおもかげ、わすれがたみにつみをきて、ぬしなき宿におくらむ。

八の宮すぎ給ふ翌年の春阿闍梨より早蕨を籠に入れて中君の方へをくり給ふ。

君にとてあまたの春をつみしかば、つねをわすれぬ初わらびなり。

中君の返しに

この春は誰にかみせむ、なき人のかたみにつめる峯のさわらび。

又同じ早蕨の巻に

花盛の程二條院の櫻を見やり給ふに、ぬしなき宿のと、先おもひやられ給ふ。

此唱歌は薫の通ひ給ひし大君もすぎ給ひて後、折々中君を見まいに薫の宇治へ行て京へ歸り給ふ時の巻の詞に、木がらしのたへがたきまで吹とふしたるに、残る梢もなく散敷たる紅葉を踏分けるあとも見えぬを見渡して、頓にも得出給はず、いとけしきある深山木にやどりたる鶯の色ぞ、まだ残りたる木だになどすこしひきとらせ給て、宮へとおほしくてもたせ給。

やどり木とおもひ出さば、木の本の旅寝ぞいかにさびしからまし。

とやどりぎの巻にあり。此趣を取て作れり。

やどり木の歌の心は、むかしのなごりをおもわさば、さびしかるべきことなり。

五ひとかたならぬものおもふ、よるべさだめぬうさふね、あだなる名のみ橘の、こじまがさきにこがる。

薫うきふねをうじに忍べ置たりしを、ある夜匂宮忍び給ひ、うきふねを舟にたばかりのせて、川より向の遠き家へつれゆけり。巻の詞に

と、薫の宇治の方をおもひやり給ふ事あり。

此唱歌は右のぬしなき宿といふ言葉を取いれ、ならびに右二つの歌は、阿闍梨の蕨をおくりての贈答の歌なれども、此唱歌の心は、春毎にわらびを八の宮へをくり奉りたるが、此春は峯のわらびはいつものごとく生出たれども、宮はおはしまさず、宮の御面影わすれがたく、籠に摘置て、主なき宿へおくるべしと、宮の御事を阿闍梨のおもひしのぶ情に作りなせり。

かたみは籠の字なり。蕨などを入る籠の事なり。それをわすれがたみといひかけたることばなり。

詩經に女執懿筐、遵彼微行、爰求柔桑とあり。

四さきの世の契りか此世のうちのなさけか、むなしきあとも宇治の里、たえずこゝにやどり木。

さきの世の契か此世の内の情かといふ言葉はあかの巻に、さきの世のむくいか此世のをかしかとある語氣なり。また同じ巻、さき世の契りつたなくともあり。

有明の月すみのほりて、水のおもてくもりなきに、これなん橘の小島と申て、御舟しばしとめたるを見給へば、おほきやかなる岩のさまして、ざれたる常盤木の陰しけれり。かれ見給へいとほかなけれど、千とせもふべきみどりのふかきをとのたまふて、

年經ともかはらぬものか橘の小島の崎に契るころは。

うき舟の返しに、

橘の小島は色もかはらじを、此うき舟ぞゆくゑしられぬ。

六小野の里の秋のころ、閨のつまのこうばい、それかとまがふ花園、むかしの人ぞこひしき。

此唱歌はうきふねおのといふ所の尼寺に世をつましくしのびておはせしに、横川の僧都の御弟子の兄弟に中將といふ人、僧都のもとへ見舞し折から、供廻りも美々しく、さきををはして尼寺へよらせ給ふを見よびて、薫の宇治へ來りし時の事を思ひ出し給ふ。巻の



第五 箏 曲 考

詞に、  
横川に通ふ道のたよりによせて、中將こゝにおはしたり。さき打をひて、あでやかなる男の入來るを見出して、しのびやかにておはせし人の御ありさまけはひぞさやかにおもひいでらる。垣ほに種たるなでしこもおもしろく、女郎花桔梗など咲はじめたるに色々の狩衣すがたのおのこども、若きあまたして君も同じ装束にて、南おもてにうちながめて居たり。

とあり。また同じ卷に、  
閨のつゆちかき紅梅の色も香もかはらぬを、春やむかしのとこと花よりもこれに心よせのあるは、あかざりし匂ひしみにけるにや。  
袖ふれし人こそ見えね、花のかのそれかと匂ふ春のあけほの。  
とあり。此二つをもて、薫や匂宮をおもふ情をのべたり。

新雲井弄齋

一月もろともにほとゝぎす、なきているさの山のは見れば、はやみじか夜もあけわたる。  
入佐の山 但馬にあり。  
此唱歌は新古今に 前太政大臣  
ほとゝぎすなきて入佐の山の端は、月ゆへよりもうらめしきかな。

朗詠集に 貫之  
夏の夜をふすかとすれど、郭公なく一聲にあくるしのゝめ。  
此二つの歌を以て作れるに似たり。  
二またのあふせもいさしら露の、あまりてをける袖のうへ、げにも袖のうへ。  
此唱歌は夫木  
見せばやな曉露のおき別れ、篠分る朝の袖のけしきを。  
といふ歌の心に似たり。

三あはればかななきうき世の中に、ともにたへせぬ契りをぞまつ、げにもちきりをぞまつ。

此唱歌は 新拾遺に 契戀を 權大納言義詮  
世々かけて契りしまではかたくとも、命のうちにかはらずもがな。  
といふ歌の心に似たり。

飛 燕 曲

此曲は李白が清平調の詩をやつして作れるなり。夫ゆへ又此曲を清平調とも名付。しかし三調など、ちがふて、此唱歌は詩の趣を其まゝに寫せしとは見えず。是故に詩句ごとに唱歌をまじへ解ては、却てまぎれてわかりがたきゆへ、先三首の詩の意を解て、飛燕の唱歌は別に解り。

清平調詞三首  
此清平調の詩は唐玄宗帝の時、興慶池といふ所に沈香亭といふ亭をこしらへ、其庭に牡丹を種わたりて賞翫せり。かの寵愛深き楊貴妃と花見の御遊

あり。其時李白を召れて、此詩を作らしめり。三首とも貴妃をいふて、花に通ひ、花をいふて貴妃にかよふやうに作りなせり。

雲想衣裳花想容、春風拂檻露華濃。  
若非群玉山頭見、會向瑤臺月下逢。  
露華は露のひかりなり。群玉山は西王母といふ仙女の居所なり。瑤臺は有娥の佚女といふ仙女の居所なり。

此詩の心は其の雲のうらはしきをば貴妃の衣裳のはなやかなるをおもるやり、牡丹の花のさかりなるを見ては、貴妃のうつくしき姿をおもひやらる。春風のそよよと欄干を吹すぎて、牡丹の花に露のうかびて濃色にはへあるすがた、えもいはれずかくのごとき美人は、中々よのつねにはあらず。群玉山にて西王母を見るか、さなくばかならず瑤臺の月のもとにて、佚女にあひなば、似るべき事もやあらむとなり。

一枝濃艶露凝香、雲雨巫山枉斷腸。  
借問漢宮誰得似、可憐飛燕倚新粧。



雲雨巫山とは楚の襄王夢に巫山の神女と契りて、  
 神女のわれ朝には雲となり、ゆふべには雨とな  
 るべしといへり。夢さめて後雲を見て、空にここ  
 ち、雨に對しておもひをこがせし事あり。借問と  
 は借の字は付字なり、かりに問といふ儀なり。飛  
 燕は漢の成帝の愛せし女の名なり。倚の字はより  
 たのむといふ義、新粧はあらたにけはひするをい  
 ふ。

此詩の心は、牡丹の枝もたは、に花の色濃艶かにて、  
 露の色に置きひ匂ひをこらしめてしめやかなりといふ  
 て、貴妃のあてやかなる姿にたとへり。かの楚王は雲  
 雨に神女をこがれ給ふ。それはむだに思ひわづらふて、  
 はらわたをといふものなり。今玄宗帝は目のまへにか  
 くのごとき美人を愛し給ふ。かゝる美人は當世にはあ  
 るまじ。扱問て見たきは、いにしへ漢の宮中には美人  
 多しといへるが、誰か此貴妃に似たる人やある。外に  
 はあらじ。まだしもかの成帝の愛し給ひしあはれまじ  
 き飛燕こそ似べき事あらめ。それさへもあしたにけわ

ては、誰しも我身のうつろふのすへを歎き、かぎりな  
 きうつろみをいだくものなるに、貴妃はさかりなる年と  
 いひ、寵愛ふかき身なれば、今を盛りの花に對して、  
 さるべき情はなく、萬事はらるのけて、只沈香亭の欄  
 干によりて、歡樂にのみしたがふ風情、いと々帝の愛  
 し給ふとなり。

一説には花も今は盛りなれども、日を経ては色も  
 うつろひ、風にちりゆく。わが身もそれにひとし  
 く、年経て顔色も衰はば、御寵愛もうつろふべし  
 と、風に對してかぎりなきうつろみはあれど、其事  
 はとくと合點して色にも出さず、只帝の興にいら  
 せらるゝやうに、欄干によりて花をめで、歡樂に  
 乗ずる風情、いよくあはれに愛すべきと見るな  
 り。

一久かたの雲の袖ふりしむかししのばし、花にの  
 こる露よりも、さえぬ身ぞはかなき。

ふりしとは振と舊との義をかねていひかけたるな  
 り。彼玄宗帝楊貴妃を寵愛ありしが、安祿山の亂

ひによらずば、中々及ぶまじとなり。

名花傾國兩相歡、常得君王帶笑看。  
 解三釋春風無恨、沈香亭北倚欄檻。

名花は牡丹をさしていふ。傾國は漢の李夫人が故  
 事なり。李夫人の兄李延年といふ人、歌の上手に  
 て、武帝御寵愛あり。御前にて酒酣なる時に、  
 有三佳人絶世而獨立。一願傾二人城、再  
 願傾二人國、不惜傾二城、國、佳人再難得。  
 と妹の事をほめて歌へり。武帝これを聞給ひ、す  
 なはち李夫人をめされて寵せし事あり。是より傾  
 城傾國といへば、美人のことになる。爰にては貴  
 妃をさしていふ。解釋は二字ともにときほどくと  
 いふ義にて、さらにはらひのけるといふ義なり。  
 又一説には合點しきりたるといふ義に見る也。

此詩の心は牡丹は貴妃に見られて、いよくはへあり  
 てなびき、貴妃は牡丹の色にめで、たがいに相歡  
 樂みてつねづ君にうるはしく笑をふくみて看らるゝ  
 事を得、さて風には花のちる習ひなれば、春風に對し

おこりて、都をかされ、貴妃をつれて、蜀の國へ  
 落給ふ時、貴妃ありては帝の御爲あしくとて、蜀  
 の馬鬼が原にて、臣下の内より貴妃を害せり。雨  
 中に蜀の棧道を通り給ふに、車馬の鈴の音、雨や  
 山にひびきあみて、哀を催し、貴妃の事を甚かな  
 しみ悼給ふて、雨淋鈴といふ樂を作らせ給へり。  
 其後都へ歸り給ふに、都には肅宗帝すでに位に即  
 いて、玄宗帝は太上皇にて離宮に居給ひ、雨淋鈴  
 の曲を奏せし事あり。

○此飛燕の曲の唱歌は、清平調の詩の詞によりて、  
 趣は右にいへることく、貴妃死後のをもむきに作  
 り變たるものなり。

此唱歌の心は久かたの雲のごとき袖ふりし貴妃のむか  
 しのばして、牡丹の花に残る露もはかなきものなが  
 ら、消亡ぬる貴妃の身ぞはかなしと、帝のしたひ給ふ  
 情をのべたり。

二よをてらすし玉のかずのひかりならずば、あ  
 まつおとめのかざしして、月にあそぶなるら



む。

詩の群玉は山の名なれども、こゝは多くは玉ととりかへたり。

此唱歌の心は、夜光の玉の數々のひかりかさなれば、天人の花をかざして雲井にまい遊ぶなるべしと、是かくのごとき世にたぐるなき美人なりしに、今はなしと、貴妃の事をかなしみしたふ情をのべり。

三 くれなひの花のうへ、露の色もつねならぬ、夢はのこる横雲、ふるはそでのなみだかな。

此唱歌の心はうるはしき花に置露の色のなみくならぬ面影を、夢に見て覺ぬるあかつき、雲にかこち、雨のごとく涙袖をうるほすといふ情をのべり。詩の雲雨巫山の夢の事によりて、爰はたゞちに玄宗の夢に作りかへたり。

四 なつかしや、いにしへをしのぶに匂ふわが袖、濡てほすこすのどに、あはれなれしつばくらめ。

うつろふはわがしがうらむまじや春風。

此唱歌は詩のをもむきをとりかへて、花の風にちりやすきならひも、さかんなる時はよそにのみ聞しが、今は比翼連理と契し貴妃もちりゆき、われもうつりかはれり。是皆わがなすとがうらむまじや春風といふて、やはり春風に對してうらみのはてしなき情をふくませて作れるなり。

此唱歌の心はむかしの人の袖の香ぞすると、わが袂の匂ふに其人のなつかしく、涙袂をうるほして、<sup>こす</sup>鉤簾の外に出れば、馴しつばめのあはれまして、軒端に集るを見て、我もむかしはつがへるつばめのごとくなりしが、今はしからずと、かこつ情をのべり。詩の飛燕を爰にては、たゞちにつばめの事に作りかへたり。

五 たぐひなき花の色に、こゝろうつすこの君、うつなきおもひこそ、いとゞ猶もふかみぐさ。

此唱歌の心はたぐひなき牡丹の花に貴妃のうつしくなく心うつせる風情、いとゞわれ深くめでしにと、今其時の面影のなつかしき情をふくませり。

深見草は牡丹の事なり。新古今に

六 條攝政かくれ侍て後、うへおきて侍ける牡丹の咲て侍けるを折て、女房のもとよりつかはして侍りければ、  
太宰大貳重家

かたみとて見ればなけきのふかみ草、なになかなかの匂ひなるらん。

六ちりやすきならひとは、よそにのみきし身も

箏曲考卷之四目錄

新曲九組

表

友千鳥

裏

雪月花

浮舟

二長

中

玉鬘

六玉河

四季戀

三調

奥

宮籠



箏曲考卷之四

友千鳥

初段の友千鳥といふをとりて曲の名とせり。此曲全篇祝歌なり。千鳥若菜松竹真砂鶴龜のたぐひを賦して、御代を祝せり。

一 みちひたえぬしほの山、さしでの磯の友千どり、君が御代をばいく千世と、聲もゆたかになきかはす。

鹽山 指出磯 甲斐國にあり。

古今に

よみひとしらす

しほの山さしでの磯にすむ千鳥、君が御代をば八千世とぞ啼。

二 日影のどけき春日野に、若菜つみつ、萬世を、いはふこころの道すぐに、神のめぐみをいのらむ。

古今に 内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十、賀

ぞへつつ、世のありかすにとりなして、久しきほどをしらばや。

古今に

よみ人しらす

和田津海の濱の真砂をかぞへつ、君が千とせのありかすにせん。

六 ことぶきなれし鶴龜も、千とせの後はしらなくに、あかぬ心にまかせつ、かぎりもあらぬゆくする。

古今に 藤原三善が六十賀に讀ける

在原しけはる

鶴龜も千とせのちはしらなくに、あかぬ心にまかせはててむ。

雪 月 花

一 櫻卯の花しら菊のまがふはゆきの色ながら、まがはぬ雪のしらがさね、とむるは袖の梅が、

新古今に

藤原有家朝臣

朝日影匂へる山の櫻花、つれなくきえぬ雪かと

しける時に、四季の繪書るうしろの屏風に書たりける歌 素性法師

春日野にわかなつみつ、よろづ世をいはふ心は神ぞしるらむ。

三 誰かはあかん、ときはなる松のみどりも春は猶、今一しほの色見えて、ながめもふかきこのもと。

古今に 寛平の御時きさいの宮の歌合によめる。

常盤なる松のみどりも春來れば、今一しほの色まさりけり。

四 うつしうへてし庭の面に、おひそふ竹の枝しげみ、しげくも見ゆる千世のかげに、なるよはひやいつまで。

堀河院百首

師頼

年をへて生そふ竹の枝しげみ、しげくぞ千世のかげは見へける。

五 むかふもひろきわたつうみの、濱のよきことをか

ぞ見る。

後拾遺に

道濟

雪とのみあやまたれつ、卯の花に冬籠れりと見ゆるやまざと。

金葉集に

道俊

さかりなる籬の菊を今朝見れば、まだ空さらぬ雪ぞつもれる。

此歌のたぐひにて、櫻卯花白菊の雪にまがひながらまがはぬは袖にとむる雪の梅が、と、是雪中の梅を賞せし唱歌なり。

源氏匂宮の卷の引歌に。

降雪に色はまがひぬ梅の花、雪にぞ似たるものなかりける。

といふたぐひなり。

白重事

紀光卿云、四月十月のついたち、公卿殿上人しらがさねとて無紋のしろき下襲半臂草をつて表袴冠は有文常のごとし。一説には、むもんのかぶ



りのよし見えたり。卯月はついたちより加茂祭御  
禊の日まで着なり。衛府の人鬨腋のときしらがさ  
ねをつけず、宿徳のかんだちめは、暑月にしらが  
さねをつく、是は別事也。

長秋詠藻

俊成卿

夏のうた

なつくれば衣がへして山がつのうつぎかきねも  
しらがさねなり。

二 小野の御室のつれづれを、夢かとおもふ雪の夜  
の、ふかき心にふみわけて、とひし君こそわす  
られね。

惟高親王御髪おろし給ふて、小野といふ所におは

せり。業平正月に拜み奉らんとて、小野にまふで

たるに、比叡の山の麓なれば、雪いとたかし。し

るて御室にまうで、おがみ奉るに、つれづれと

いとものかなくしておはしましければ、や、久し

くさぶらひて、いにしへの事などおもひいで、聞

えけり。さてもさぶらひてしがなとおもへど、お

とよ。

源氏六條の御息所へしのびて通ひ給ふ道すがら、五條

わたりにてゆふがほの花に御目とまりたるが、ゆかり

となりて、夕顔の上に契らせ、しばくかよひ給へり

中秋の夜、夕顔上を車にのせ、ながしの院へおはし

てそひふし給ふに、夕顔上物におそはれて、其夜むな

しくなり給へり。ゆふがほの巻に。

八月十五夜隈なき月影ひまおほかる板やのこりな

くもりきて、見ならひ給はぬすまひのさまもめづ

らしきに云々。白妙の衣うつきぬたの音もかすか

にこなたかなた聞いたされ、空とぶ雁の聲とりあ

つめて事おをかり云々。たとしへなくしづかなるゆ

ふべの空をながめ給ふて、奥のかたは暗く物むつ

かすと、女は思ひたれば、はしの簾をあけてそひ

ふし給へり云々。宵過る程に少し寝入給へり。御枕

がみにいとおかしけなる女居て、おのがいとめで

ほやけ事どもありければ、えさぶらはで、ゆふ暮  
に歸るとて。

わすれては夢かとおもふ、おもひきや雪ふみ

わけて君を見んとは。

とてなくく來にけり。

と伊勢ものがたりにあり。

三 久かたの中におふるかつらの匂ふ花ならば、一

枝たれも折かざし、世々につたへむ月の名。

月の中に桂の樹ありて、吳剛といふ仙人罪ありて

常に其桂の枝を伐て居るといふ説あり。

韻府曰、月中有桂、高五百丈、一人常

斫之、樹創隨合、其人姓吳、名剛、西河人、

學仙有過、謫伐桂。

此唱歌の心は久かたの月の中に生るといふかつらの地

上にありて匂へる花のごとく、手折らるゝものならば

誰も一枝折かざして、月ともにもかの吳剛のごとく、

桂男の名を世々につたへんに、仙骨の無き身をいかゞ

せんとなり。

たしと見たるをば、尋ねもおもほさで、かくこ

となる事なき人をゐておはして、時めかし給ふこ

そ、いと目ざましくつらけれとて、此御かたはら

の人をかきおこさんとすと見給ふ。物におそはる

、心地して、おどろき給へれば、火も消にけり、

云々。しそく参れり云々。只此枕がみに夢に見えつ

るかたちしたる女、おもかけに見へてふときえう

せぬ云々。先此人はいかに成ぬるぞとおもほす。

心さはぎに身のうへもしられ給はずそひふして、

や、とおどろかし給へど只ひえにひえいりて、息

はとく絶はてにけり。

とある巻のをもむき詞を取て、作れる唱歌なり。

五花は三芳野を泊瀬や嵐の山もおしなべて、雲と

ながめし人まろのむかしの名こそうれしけれ。

秋のゆふべ龍田川にながるゝ紅葉を、帝のおほん

目には、錦と見給ひ、春のあした吉野の山の櫻は、

人鷹が心には雲かとのみおほへける。



六世の中はものかはり星うつれども、春の華柳の糸のたえやらで、くるとしくのたのもしき。唐の王勃が滕王閣の詩の句に物換星移度幾秋とあり。

新千載に

中納言兼輔

青柳のまゆにこもれる糸なれば、春のくるにぞ色まさりける。

新拾遺に 柳をよめる

前中納言匡房

あさみどりまづ色まさる青柳の、糸より春はくるにやあるらむ。

といふ歌の心なり。

浮舟

浮舟の巻に薰大将うきふねといふ女君を京よりいざなひ、宇治のやしきへかくし置き、時々通ひ給へり。句宮も京二條院にてうきふねに逢ひ給ひし事あり。うきふね世にあさましき事におもひて、宇治川に身をしづめばやと、夜にまぎれ、かの川邊

といふ歌の上の言葉を取り、うきふねの歌に、

里の名をわが身にすれば、山城の宇治のわたり

ぞいとやすみうき。

なけきわび身をばすつともなきかけに、うきな

ながさん事をこそおもへ。

身をなけし涙の川のはやし瀬を、しがらみかけ

てたれかといめし。

とあるをもむきにて作れり。

二うき世をわたる芝舟の、みなれくしてさす棹の、しづくを見ればいつとなく、ものおもふ袖もかくばかり。

此唱歌ははしひめの巻に、

あやしき舟どもに柴かりつみ、をのくになにとなき世のいとなみどもに行かふさまどもの、はかな

き水の上にかかひたる、たれもおもへばおなじ事

なる、よのつねなさなり。

とあり。薰大将の歌に、

橋姫の心をくみて高瀬さす、棹のしづくに袖ぞ

へ出しに、物にさそはれ、宇治の院の樹の下に絶入てありしを、其頃横川の僧都の母、妹なる二人の尼君初瀬へもふで、歸るさ、宇治の院に宿りし時、其夜院守など屋敷めぐりして、うき舟の伏したるを見付て、院へつれ來たり。僧都の加持し給ひ、尼君など色々介抱、よみがへり、夫より尼君の住給ふ比叡のふもと小野といふ所へ俱して、世を忍びおはせり。おこないのひまぐには、手習をなぐさめとし給へり。夫ゆへ手習の君ともいふ。右の事うきふねかけろふ手ならひの巻にあり。此曲は全篇うきふねの事をのべしゆへ曲の名とせり。

一おもふ事いはでやついに山城の、宇治のわたりのうきせにも、しづみははてぬゆるるこそ、中くになりしうらみなれ。

此唱歌は伊勢ものがたりに、

おもふ事いはでたたりにやみぬべき、われとひとしき人しなれば。

ぬれぬる。

とあり。又うきふねの巻に、

宇治橋のはるくに見わたさるゝに、柴つみ舟の所々に行ちがひたるなど、外にては目なれぬ事とものみとりあつめたる所なれば、

とあり。是等の言葉をもむきを取て、浮舟の情をのぶ、三身をわくる事はかたしや、玉くしげふたみちかくるわりなさに、おもひみだれてうちかへす、心ひとつのくるしさよ。

此唱歌はうきふねの薰と句宮に契りし事を巻の趣によりて作れり。

身をわたる事はかたしとは、後撰に、とをき國

にまかりける人に、旅のぐつかはしけるか、みのはこのうらにかきつけてつかはしける。

おほくほののりよし

身をわくる事のかたきに、ます鏡影ばかりをぞ君にそへつる。

○玉櫛笥 ふたとつゞけて二に蓋のひびきを取て枕



詞とするなり。

萬葉集に

玉匣二上山に鳴鳥の聲の戀しき時は來にけり。

とあるたぐのなり。

四 小野のすまゐのをのづから、きこえやありとつゝましく、嶺のあらしや小牡鹿の、聲にもたてずなりにける。

此唱歌は手習の卷に、

比叡坂本に小野といふ所にぞ住給ひける。

とあり。同じ卷に、

かの夕霧のみやす所のおはせし山里よりは今すこし入て、山にかたかけたる家なれば、松かけしけく、風の音もいと心ほそきに、つれなくとおこないをのみしつゝ、いつとなくしめやかなり。

とありまた

何事につけても、世の中にあらぬ所はこれにやあらんとぞ、かつはおもひなされける。かくのみ人にしられじと忍び給へば、

難波津の歌の事は、

大鸕鷀の帝の難波津にて親王と聞えける時、東宮を弟に菟道親子とたがひにゆづりて位につき給はで三年になりければ、王仁といふ人のいふかりおもひて、よみて奉りける。

難波津に咲やこの花ふゆごもり、今をはるべ

とさくやこの花。

淺香山の言葉とは、

葛城の親王を陸奥へつかはしたりける時に、國のつかさごとおろそかなりとて、おほきみ愠り給へり。まうけなどしたりけれど、あへてたのしみ給はず。前の采女なりける女、風流の女なり。ひだりに傷をさしけ、右に水をもちて、おほきみの膝を撃て、歌をよめり。是にぞおほきみの心解て、ひめもすたのしみ給へり。其歌に

安積香山影さへ見ゆる山の井の、あさきこゝろをわがおもはななくに。

萬葉集第十六にあり。

とあり。このをもむきを以て作れり。

五 いにしへのふた歌ならで、なにとなき心ゆかしの手ならひは、つれなくなる日ぐらし、しのびくくのなみだなり。

此唱歌は古今の序に、

難波津の歌は帝のおほんはじめなり。淺香山の言の葉は采女のたはぶれよりよみて、此二歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人のはじめにもしける。とあり。また兼好が徒然草に、

つれなくなるまゝに、日暮し硯にむかいて、とあり。また手習の卷に、

何事につけても、つゝましくて、くらうしなしておはず。おもふ事を人にいゝつゞけん言の葉は、元よりだにはかなくしからぬ身を、まいてなつかしく、ことはるべき人さへなければ、只硯にむかいて、おもひあまる折には、手習をのみたけき事とは書付給ふ。

とある言葉どもをとりあつめて作れり。

六 たのもの秋になりぬとや、いなばにまじる乙女子が、聲はおかしう打そへて、うたへば空に雁ぞなく。

此唱歌は手習の卷に、

むかしの山里よりは水の音もなやかなり。つくるさまゆへある所の木立おもしろく、ぜんざいなどもおかしく、ゆへをつくしたり。秋になりゆけば、空のけしきも哀なるを、門田の稻刈とて、所につけたるものまねびしつゝ、わかき女どもは歌うたひ興じあへり。

とある言葉を取て、うきねの山里の秋興、蕭索たる情をのべたり。

二 長

此曲四段は鶴を賦し、末の二段は龜を賦せり。長き鶴龜を賦したる曲ゆへ、二長と名付り。一あしびきの巖なでしこや猶まなづるの羽衣を、千世にひとたびうちつけて、なづともさらにつ



きすまじ。

第五 箏 曲 考

足曳は山や巖のまくらことばなり。こやは是やなり。拾遺に、千とせとぞ草むらぶとにきこゆなる、こや松虫の聲にはあるらむとあるたぐるなり。

佛説に、四千里の巖を天人の羽衣にて三年に一度つつ撫て、撫盡すを一劫とすといふ事あり。夫を引て、拾遺に

君が世は天の羽衣まれにきて、なづともつきぬいはほならなん。

と讀り。其事を引合して、此唱歌の心は、あしびきのいはほなでしといふ。是や鶴の毛衣にて千世にひとたびづ、なづとも更につきすまじき君が御世かなと、鶴をもつて御世を祝したる唱歌なり。

夫木に洞院攝政家百首詠 後九條内大臣

これも又なでしたぐひか、龜の尾の山のいはねの鶴の毛衣。

といへるたぐるなり。

二ながるの浦や春の日の、芦の若葉のやはらか

夫木に堀河院御時百首

權僧正永縁

まことにやよもぎの島にかよふらむ、鶴に乗るてふ人にとはいや。

といへるたぐるなり。

四このうちしらぬおもひでは、ものかすならず。いにしへ高きくらるをゆるされ、車にのりしためしあり。

このうちは籠中なり。夫木に百首の御歌土御門院御製、

小夜更てなくねもかなし。から琴のしらべにかよふ籠中の鶴。

同集に六帖題衣笠内大臣籠のうちのなごりわするははなち鳥、心のまゝにあくがれぬともといふたぐひなり。

左傳に、衛懿公好鶴。鶴有軒者。といへり。軒は大夫の乗車なり。

此唱歌の心は、籠中をしらぬ思ひ出は、何の羈しもな

第五 箏 曲 考

雛をもつれてあそぶなる鶴のけしきぞほこらしき。

長居の浦は攝津にあり。

夫木 堀河院御時百首 肥 後

君が世の長居の浦にむれるつゝ、ともに千とせを契る田鶴かな。

とあるたぐるなり。

三鶴にのりし仙人の心にまかせゆきかよふ、蓬萊が島ときこえしは、いつも老せぬ所とや。

王子喬のたぐひ鶴に乘し事、列仙傳にあり

史記 秦本紀。齊人徐市等上書言。海中

有三神山。名曰蓬萊方丈瀛洲。仙人居之。

漢書郊祀志曰。此三神山者其傳在渤海中。去人不遠。蓋會有至者。諸仙人及不死藥皆在焉。

く、雲に翔り、澤に曝み、己が心のまゝなるかなとおもふ野鶴の情怨は物の數にあらず。いにしへ衛の君鶴を好まれし時、大夫の官位をゆるされて車に乘し例もあり。かく籠榮ありてこそ本意ならめと、是卑屈をいやしみ尊榮をたつとぶ抑揚の唱歌なり。

五御手濯川にすむ龜は、神代をかけてしりぬらむ。蓮の浮葉にあそぶこと、千とせの後ぞ身はかるき。

御手濯川の龜の事は拾遺に

劫つくすみたらし川の龜なれば法のうき木にあへるなりけり。

と齋院の歌もあり。

○蓮のうき葉にあそぶとは、史記龜策傳曰。

有神龜一在江南嘉林中。常巢於芳蓮

之上。又抱朴子曰。千歲之龜。五

色具。其額上兩骨起似角。浮于蓮

葉之上。或在叢著下。



六數のうらもじおひいでし、あとにならひて今も猶、ゆふけをとへば、何事もさつにさだまるめでたさよ。

○數のト文字負出しとは 易繫辭曰。河出圖。洛出書。聖人則之。書洪範曰。天乃錫禹洪範九疇。夏の禹王の時洛水より神龜出て、其背に一より九まで數の字あり。禹王夫を見て洪範を作り給ひしより、龜のうらなひといふ事はじまれり。

○ゆふけは萬葉集に夕衢ト。夕ト。夕占など云て、夕暮ちまたに出て辻占をとふ事なり。歌に

ゆふけにもうらにも告らる今宵だに、來まさぬ君をいつしかまたん。

月夜には門に出立、ゆふけ問ひ、足トをぞせし、ゆかまくをほり。

玉梓の道に出立、夕占をわが問しかば、ゆふうらのわれに告らく、等とあり。

登兵部卿も玉かづらを甚戀したはせ給ふ。此曲は、玉鬘、はつね、こてふ、とこなつ、かゞりびの六(木ノマ)卷を以て作れり。皆玉かづらならびの卷なり。

一いかなるすぢとゆふがほの、露のゆかりの玉かづら、むかしをかけて戀わたる、えにしもいかにあさからむ。

此唱歌は源氏の御歌に、

戀わたる身はそれなれど、玉かづらいかなるすぢを尋ねきつらむ。

又玉かづらの卷に、右近長谷にて逢奉りし事を源氏へ申上る時、

はかなくきえ給ひにしゆふがほの露の御ゆかりをなん見給へつたりし。

とあり。此歌と詞をもつて作れるなり。

二初音ゆかしき鶯の、巢だちし松のねを問へば、谷のふるすのめづらし、春の日影ぞのどけき。

此唱歌の心は、いにしへ數のト文字を龜のおひ出しよりトといふ事出来、今にも其あとにならひて、ゆふけをとふにして、よき事あしき事しれるゆへ、其うらかたの通りにしたがへば、何事も吉ならざる事無して、めでたしと龜の萬世に徳ある事を祝へる唱歌なり。

玉 鬘

玉かづらは、夕顔の上の御子なり。父は頭の中將なり。三の歳母のゆふがほすぎ去給ふ。四の歳乳母の夫筑紫の小貳に成て行時、玉かづらともに筑紫へ下り給ふ。其後小貳も世を去り、乳母と都へのほり、長谷へもふでし時、右近といふ女、夕顔の侍女なりしが、夕顔世を去給ひしより、源氏の愛妃紫の上の方に侍りける、是も長谷へ参り、長谷にて玉かづらに逢奉り、其よしを源氏へ申上しにあかざりし夕顔のゆかりをなつかしむ、玉鬘を御子となし、紫の上の宮中に置給ふ。子とはなし給ひたれども、源氏戀想し給へり。又源氏の御弟

此唱歌はあかしの姫君紫の上におはせるを、母明石の上なつかしくおほして、姫君の御をとづれをきかまほしく、子の日に五葉の松にひけ籠をつけ、鶯巢くへる形を作り、をくり給ふ。歌に

年月をまつにひかれてふる人に、けふ鶯の初音きかせよ。

姫君の御返しに、

引わかれ年はふれども、鶯のすだちし松のねをわすれめや。

明石の上

めづらしや花のねぐらに木づたひて、谷のふるすを問へる鶯。

とある、此三の歌にて作れり。

三櫻やまぶきとりくくに、花のまがきにとびちがふ、こてふのまひははかなくも、あかず暮ゆくけしきかな。

此唱歌は明石の上の方にて、此日御讀經あり。紫の上より佛に花を奉らせ給ふとて、童八人を蝶鳥のすがた



に仕立、鳥にはしろがねの瓶に櫻をさし、蝶にはこがねの瓶に山吹をさしてをくり給ふ。胡蝶の巻の詞に、鶯のうららかなる音に、鳥の樂はなやかに聞わたされて池の水鳥も、そこはかとなくさへづりわたるに、急に成はつる程、あかす面白し。蝶はましてはかなきさまにとびたちて、山吹のませのもとに咲こほれたる花の陰に舞いづる。

とあるを取て作れり。  
四聲はせて身をのみこがす螢こそ、薄きひとへのなさけにて、それかとはかりわすられぬおもかげぞゆかしき。

此唱歌は玉かづらを螢兵部卿かぎりなく御心に懸給ひて、五月の夜しのびておはしけるに、源氏すきくしくかの姫君の御容のすぐれておはしますを見せ奉りて、いと御心をつくさせ申さんとて、其夕つかた螢をおほく包み持て、几帳のもとに玉かづらのふし給ふを、几帳かたびらをひとへうち懸、彼螢をさとはなちて、ほのかに見せ給へり。玉かづら扇をさしかくし給

を人や尋ねむ。

是にて作れり。

六かゞり火に立そふ戀の煙の、よとにもにたえぬほのほとなりぬるは、ゆくゑもしくぬおもひかな。

此唱歌は源氏秋の初風うらさびしき心地にしのびかね、玉かづらの方へしばくわたり給ひ、御琴なども習し給ふ。篝火の巻に、

五日六日の夕月夜はとく入て、すしく曇れるけしき、萩の音もやうくあはれなる程に成にけり。御琴を枕にてもろともにそひふし給へり。御前のかゞり火すこしきえがたなるを御供なる右近の太夫をめして、とほしつけさせ給ふ。

とあり源氏御歌に、

篝火に立そふ戀の煙こそ、世には絶せぬほのほなりけれ。

是をもて作れり。

ふ、人々ほたるを取かへしたり兵部卿の歌に、なく聲も聞えぬ虫のおもひだに、人のけつにはきゆるものは。

玉かづらの返しに、  
聲はせて身をのみこがす螢こそ、いふよりさるおもひなるらめ。  
とあり。是をもて作れり。

五 咲みだれたるませのうちに、とこなつかしきなでしこの、もとのかきねを人しれず、心にかけてしのべり。

此唱歌は、玉かづら西の對へわたり給ふ、西の對の庭はなでしこ斗を植られたり。とこなつの巻の詞に、御前にみだりかはしき前栽などもうへさせ給はず、なでしこ色をとのへたる唐の日本のませいとなつかしくゆひなして、咲みだれたる夕ばへ、いとみじう見ゆ。

とあり。ゆふがほのうへをおほして源氏の君なでしこの葉なつかしき色を見ば、もとの垣ね

六 玉 河

一 いはでおもふ心の色を八重にして、うつしをむてふつれなさに、春の月げの駒とめて、いざ水かはむ山吹。

山城の玉河なり。

上の句のいはでおもふ心の色とは、  
新續古今に 藤原雅永朝臣

いはでおもふ心の色かいもせ山、中なる川のやまぶきの花。

續古今に 忍ぶ戀の心を 中務卿親王

いはで思ふ心の色を人とは、折てや見せん山吹の花。

といふたぐひなり。

下の句は新古今に 俊成卿

駒とめていざ水かはん、山吹の花の露そふ井手の玉河。

二をのが秋とや小男鹿のしがらむ花のすり衣、



うつろふなみもむらさきに、みだれそめにし白露。

近江の玉河なり。

此唱歌は續後拾遺に

皇嘉門院別當

宮城の、萩の下葉のうつろふを、おのが秋とや鹿の啼らむ。

新後拾遺に

太宰權帥仲光

小男鹿のしがらむ萩に秋見へて、月も色なる野路の玉河。

千載集に

源俊賴朝臣

あすもこん野路の玉河萩こへて、色なる波に月やどりけり。

是等の歌をあつめて作れるなり。近江の玉河には鹿萩擣衣相應なり。此唱歌の結構は、鹿の秋を己が時としてなき、己が身を秋の花ずりにするといふより、花ずり衣といひかけ、衣といふをうけ擣といふ、擣をうつろふといひかけて、萩のうつる波も、萩に置露も、皆葉の色にみだれ染るといひなせり。

くり。

武藏の玉河なり。

建保名所百首

定家

調布やさらす垣根の朝露を、つらぬきとめぬ玉河の里。

此唱歌の、きのふの袖もほしやらで、まだき濡そふ朝露とは嘉元百首に、空性の旅の歌に、野邊分しきのふの露もまだほさず、霧に朝立旅の衣手といふたぐひにて、此歌は旅人の星を見て宿り、星をいたゞきて出立衣ほすひまぞなきといふ旅情を賦せり。此唱歌は晷をあらそふ賤の業のいとまなき情をのべて、言葉を起せり。

五汐風こして夜もすがら、月にみかける川波も、くだけてものをおもひねの、夢をさそひてなく千鳥。

陸奥の玉河なり。

新古今にみちの國にまかりける時讀侍ける。

三川どにつとふ松風の、をとだに秋はさびしきに、ころもうつきの垣もあきて、砧もいとといそぐなる。

攝津の玉河なり。

千載集に

俊 賴

松風の音だに秋はさびしきに、衣うつなり玉河の里。

是衣うつといふをうつきの垣といひかけたり。空木は卯花の木なり。うつきの垣も荒てとは、賤の家の風情なり。

○きぬたのいそぐとは、

續千載に聞擣衣といへる心を 今上御製

いそぐなる秋のきぬたの音にこそ、夜寒の民の心をもしれ。

とあるたぐひなり。

四きのふの袖もほしやらで、まだき濡そふ朝露に、波もひかりを打よせて、さらすや賤がてづ

能因法師

ゆふされば汐風こしてみちのくの、野田の玉河

千鳥なくなり。

玉葉集に

前右兵衛督爲教

卯の花の露にひかりをさしそへて、月にみかけ玉河の里。是は攝津の玉河也。

續拾遺に 夕千鳥といへる心を 京極院内侍

夕さればくだけてもものやおもふらん、岩こす波に千鳥鳴なり。

新後拾遺に

源氏賴

梶枕うきねも寒き浦風に、夢をさそひて鳴千鳥かな。

是等の歌をとりあつめて作れる唱歌なり。

六とかへるたかの山ふかみ、しかはあらしのこがらしに、ながるゝ水の名のみして、こほりもむすばばかりなり。

紀伊の玉河なり。

按ずるに、此唱歌の結構、とかへる鷹は飛歸る鷹なり。



第五 箏 曲 考

後拾遺に 經年戀といふ心を 左大臣

われが身はとかへる鷹と成にけり。年はふれどもとはわすれず。

といふたぐひなり。新古今匡房の歌に。

とやかへるたかのお山の玉椿霜おほふとも色はかはらじ。

といふ言葉つき同じく、此唱歌も高野山をいひ記すべきために、とかへるたか野山と言葉を構へり。しかはあらじとは、然くはあらじといふを、嵐といひかけ嵐といふよりこがらしとつけて、落葉の頃をのべり。流るゝ水の名のみしてとは、彼高野の地理を知らるるに聞に、玉河といふは、今は川にてはなく、路邊の溝同然にて、水もあるかなきかなりといへり。此唱歌の大意は、高野山深くして玉河といへば大いなる流れなるべきに、然はあらず川といふ名斗にて、殊に深山なれば、寒氣も早く、秋冬の交木枯の風にはや氷もむすぶ斗なりと。是深山に小溪の趣をのべたる作者の新意と見えたり。且亦流るゝ水の名のみして、氷もむすぶ

上の句は長秋詠藻に 俊成卿 戀せずば人はこゝろもなからまし、ものゝあはれもこれよりぞしる。

下の句は拾遺に

ある所に、春秋いづれかまさると問を給ける によみて奉りける 貫之

春秋におもひみだれてわかかねつ、時につけつ つうつる心は。

是四季の情をのぶるための序引の唱歌なり。

二糸よりかけしみどりこそ、ねみだれがみのおもかげ、ながめせしまに色も香も、うつろひやすき人心。

上の句は古今に

あさみどり糸よりかけて、白露を玉にもぬける 春の柳か。 僧正遍昭

といふに本づきて興ぜりと見ゆ。又、 嘉元百首に 柳 藤原爲世

たをやめの岸の柳の朝寝髪、かけもみだれて春

第五 箏 曲 考

斗なりといふ言葉には。 四六八

風雅集に、高野の奥院へ参る道に、玉河といふ河の水上に、毒虫の多かりければ、此流れをのむまじきよしをしめしおきて後に讀侍ける 弘法大師

わすれても汲やしつらむ、旅人の高野の奥の玉河の水。

といふ歌を含み、唱歌の表は右に解たるごとくにして裏には川なれば汲べきに、ながるゝ水なれば、名ばかりにて、汲事もなきといふ意をもたせて、紀の國河の縁をとり、言葉をひゝかせて作れると見ゆ。

四季 戀

此曲の作體、春は柳花、夏は蟬螢、秋は七夕月、冬は霽雪、皆物をあらはさず、句中に暗て戀の情を寄せり。

一物のあはれはこれよりぞしらざらまじや、しらざらめ。時につけつゝうつる心、いづれかおもひのたねならぬ。

風ぞ吹く。 といふ風興あり。

下の句は古今に

花の色はうつりにけりな、いたづらにわが身世にふるながめせしまに。

色見えでうつろふものは、世の中の人の心の花にぞありける。

よみひとしらす

世の中の人の心は花染のうつろひやすき色にぞありける。

此三の歌をもて作れり。

三うすきなさけをおりはへて、いとほかなくもなき暮し、つゝむにあまるむねの火に、夜すがら身をやこがすらん。

古今に

あけたてば蟬のおりはへなき暮し、夜は螢のもへこそわたれ。

四としごとにあふとてもぬる夜すくなき契りか



な。歎けとてやは照る影にぞちとにかなし  
ぬ。

上の句は古今に

躬 恒

年毎に逢ふとはすれど、七夕のぬる夜の數ぞす  
くなかりける。

下の句は千載集に月の前の戀といへる心を。

圓位法師

歎けとて月やはものをおもわする、かこちがほ  
なる我が涙かな。

古今に

大江千里

月見ればち々に物こそかなしけれ、我身ひとつ  
の秋にはあらねど。

五小笹がうへにたばしるは、別れの袖のしら玉。  
おもひふるやの軒につもる、うらみもとけてし  
のびね。

小笹がうへにたばしるとは、

公實卿

るゆへ、三つのしらべと名付く。此曲は唐の王昌  
齡が春宮曲、西宮春怨、西宮秋怨の三つの詩  
を寫して作れり。詩一首を唱歌二段づゝに寫せり。

春宮曲は、漢の衛子夫が武帝に寵をうけし事をい  
へり。西宮春怨秋怨は漢の班女が、成帝の寵をと  
ろへたる事をいへり。委しくは、左の詩の註に説  
たり。此曲の大意は、寵愛衰へし女の情をのぶる  
曲と義を取べし。初二段は新に寵をうけたる女の  
事をのべて、わが身の憂をしのび、中二段は春の  
夜月に對して、わが身をかこち、末二段は秋の  
夜月にむかひて、むかしを忍び、君をしたふ情を  
のぶ。

一春の夜の間の風にふきひろく露井の桃の花、な  
かばならざる宮のまへ、月のかつらのかげた  
かし。

二雲の空に君愛づる、すがたやさしきまひひめ  
の、夜やさむさとてめぐみそふ、花のにしきの

玉笹にあられたばしるゆふ暮はいとゞざさゆる  
とふすがごも。

といふたぐるなり。

○おもひふるやの軒とは。

夫木に

俊成卿女

かきくらし日數ふる屋の軒とちて、空にもふか  
き雪の白雲。

古今に

ひとりのみながめふる家の妻なれば、人をしの  
ぶの草ぞ生ける。

といふたぐるの言葉つゞきと同じ。

此唱歌の心は、小笹にたばしるあられをいふて、きぬ  
ふの別れの涙を寄せ、おもひ經るを古家といひかけ  
軒につもるにて、雪を含み、つもるうらみもとけて忍  
びねといふて、逢夜の快意をのべたり。

三 調

はじめ二段、中二段、末二段と三たび調子をかへ

たもとかな。

此唱歌二段とも詩のをもむきを其まゝに寫したり。

春宮曲

王昌齡

樂府題なり。此詩はあらたに寵をうけし女の事を  
いふて、寵を失ひし女の怨情を寄せし作なり。  
昨夜風開露井桃。未央前殿月輪高。  
平陽歌舞新承寵。簾外春寒賜錦袍。

露井は、やねなき井をいふ。露はあらはるゝとい  
ふ義。○未央宮は漢の宮殿の名。○平陽の歌舞と  
は、漢武帝平陽公主といふひめみやの方へ行幸あ  
りしに、公主にみやづかへせる衛子夫といふ女の  
歌舞の上手なるを愛して、車にのせ歸り、遂に后  
にし給へり。是を衛皇后といへり。○錦袍はにし  
きのはだぎなり。

此詩の心は露井の桃、昨夜の風にひらき、未央宮の南  
御殿にて、御遊宴あり、夜に入て月もおもしろきに、  
衛子夫が舞のすがた、歌のうるはしきにめで、夜更  
るまで興にいらせ給ふ、春の夜の更行にしたがひ、簾



の透風寒しとて、錦の御衣たまわりて着せ給ふとなり  
これ寵愛ふかき事をいふて、寵をうしなひし女の情を  
ことばの外にあらはしたる詩なり。

三 しづけき宮のまどのうち、あやなく花のかほり  
きて、うらみはながき春の夜に、まきもえやら  
ぬ玉すだれ。

四 なゝめに琴をいだきつゝ、月にむかへばおぼろ  
なる、かげさへやがてこがくれて、ひとりつれ  
なき夜半のとし。

詩には、月影を木々のけしきもおほろに、昭陽宮のお  
もかけをこもりうつろふて見ゆるといへり。此唱歌は  
月影さへもやがて木々にかくれて、ひとりつれなき床  
といひなせり。

西宮春怨

樂府題なり。西宮は長信宮なり。漢の成帝の時、  
班婕妤といふ女、初め寵ありしが、趙飛燕といふ  
女、寵をうけてより、班女ねがふて成帝の御母太

五 池のふようもおよびなき人のたもとに吹わた  
る、風のかほりは中々に、花よりも猶かうばし  
き。

六 君がなさけのわすられで、すてぬあふぎの秋も  
ふけ、かたぶく月の夜もすがら、みゆきをまつ  
ぞはかなき。

西宮秋怨

樂府題なり。班女が秋のうらみをのぶ。  
芙蓉不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>美人粧<sub>ニ</sub> 水殿風來<sub>ニ</sub> 珠翠香<sub>ニ</sub>。  
却<sub>レ</sub>恨<sub>ニ</sub> 含<sub>レ</sub>情<sub>ニ</sub> 掩<sub>ニ</sub> 秋<sub>ニ</sub> 扇<sub>ニ</sub> 一<sub>ニ</sub> 空<sub>ニ</sub> 懸<sub>ニ</sub> 明月<sub>ニ</sub> 待<sub>ニ</sub> 君王<sub>ニ</sub>。

芙蓉は荷の花なり。水殿は池殿なり。珠翠は帳也。  
簾のかざりなり。秋扇とは、扇は團扇にて、うち  
はなり。文選に班女が作りし怨歌行といふ詩あり。  
其詩にいはいく、新<sub>ニ</sub> 裂<sub>ニ</sub> 齊<sub>ニ</sub> 纨<sub>ニ</sub> 素<sub>ニ</sub> 鮮<sub>ニ</sub> 潔<sub>ニ</sub> 如<sub>ニ</sub> 霜<sub>ニ</sub> 雪<sub>ニ</sub>。  
裁<sub>ニ</sub> 成<sub>ニ</sub> 合<sub>ニ</sub> 歡<sub>ニ</sub> 扇<sub>ニ</sub> 團<sub>ニ</sub> 々<sub>ニ</sub> 似<sub>ニ</sub> 二<sub>ニ</sub> 明月<sub>ニ</sub> 出<sub>ニ</sub> 入<sub>ニ</sub> 君<sub>ニ</sub> 懷<sub>ニ</sub> 袖<sub>ニ</sub>。  
勳<sub>ニ</sub> 搖<sub>ニ</sub> 微<sub>ニ</sub> 風<sub>ニ</sub> 發<sub>ニ</sub> 常<sub>ニ</sub> 恐<sub>ニ</sub> 秋<sub>ニ</sub> 節<sub>ニ</sub> 至<sub>ニ</sub> 涼<sub>ニ</sub> 颺<sub>ニ</sub> 奪<sub>ニ</sub> 炎<sub>ニ</sub> 熱<sub>ニ</sub>。  
奔<sub>ニ</sub> 捐<sub>ニ</sub> 篋<sub>ニ</sub> 笥<sub>ニ</sub> 中<sub>ニ</sub> 一<sub>ニ</sub> 恩<sub>ニ</sub> 情<sub>ニ</sub> 中<sub>ニ</sub> 道<sub>ニ</sub> 絕<sub>ニ</sub>。これ、いふ心

后、長信宮におはしますにつかへ奉りしなり。此  
題にては、班女が春のうらみをのぶ。

西<sub>ニ</sub> 宮<sub>ニ</sub> 夜<sub>ニ</sub> 靜<sub>ニ</sub> 百<sub>ニ</sub> 花<sub>ニ</sub> 香<sub>ニ</sub>。欲<sub>レ</sub> 捲<sub>ニ</sub> 珠<sub>ニ</sub> 簾<sub>ニ</sub> 一<sub>ニ</sub> 春<sub>ニ</sub> 恨<sub>ニ</sub> 長<sub>ニ</sub>。  
斜<sub>ニ</sub> 抱<sub>ニ</sub> 雲<sub>ニ</sub> 一<sub>ニ</sub> 和<sub>ニ</sub> 深<sub>ニ</sub> 見<sub>ニ</sub> 月<sub>ニ</sub>。朧<sub>ニ</sub> 々<sub>ニ</sub> 樹<sub>ニ</sub> 色<sub>ニ</sub> 隱<sub>ニ</sub> 昭<sub>ニ</sub> 陽<sub>ニ</sub>。

雲和は琴なり。雲和山といふ山の桐にて作れりと  
いふゆへ、琴を雲和といへるなり。

此詩の心は、春の頃なれば、宮の園生に色々花咲と、  
人もすくなき宮のうちなれば、夜もしづかにして、い  
よく花もしめやかに匂ふ。簾をかへて外面を見ま  
ほしうはおもへど、花を見れば、いと々おもひのはて  
しなきゆへ、まきもえやらず、心やりにと琴を引よせ  
ながら弾にも、ものうく、なゝめに膝にいだきて、簾  
の際よりはるかに外面を見れば、月影も樹木のけしき  
もおほろに、昭陽宮もこもりうつろふて見ゆるとなり。  
是昭陽宮は彼の寵をうけし女の居る處なれば、今宵し  
も帝のわたらせ給ふべきならん。さぞ彼所の月花はな  
がめも異なるべしと、これ春夜のけしきに對し、いか  
ばかりの怨情か句中に含めり。

は、夏のあつきうちは君の袖に出入して愛せらる  
が、秋風たちて涼しくなりなば、笥のうちに弃  
られなんと、わが身にたとへて作れり。それゆへ  
此秋怨の詩中に秋扇の字を用ひたり。

此王昌齡が詩の心は、班女池のほとりの宮殿に居るに  
荷の花も及ばぬ程のうるはしさよとほめたる首句な  
り。扱池殿に居るに、前の芙蓉の玉簾にかほりきて、  
えならぬ匂ひにいと々君の御事もなつかしく、寵あり  
し時は、此花を御遊の御供にて見し事もあるに、花は  
かわらぬ色香なれど、我はあふぎの秋になりて、笥の  
うちにすてらるゝごとく、寵つきたりと、花を見るに  
も心はなぐさまで、けくこしかたのかこちぐさとなり  
て、うらめしきかなとはてしなき情をふくみて、持る  
扇をおほひかざしつゝ、且は又今宵もやふと御入もあ  
るべきやと、はかなくも月にむかひて、君を待奉ると  
なり。是はかなき事ながら、月のごとく潔白なる貞心  
を以て君をば待奉るといふ心を、末の一句にこめたる  
作なり。



宮 鶯

此曲は白氏文集の新樂府上陽白髮人の詩を寫せり。其詩の句に宮鶯 百轉悠 厭 聞 とある宮の鶯の字を取て曲の名とせり。和歌の題にも上陽人あり。丹後守爲忠家百首に、爲忠の歌にも、いたづらにむそちの春ぞ過にける、宮の鶯聲ばかりして。

○註のうち引たる歌も、皆上陽人を讀る歌なり。

一 華清の春のあさがすみ、柳櫻の色ふかく、錦の袂かほりきて、みゆきをまつぞうるはし

華清宮は唐の玄宗帝楊貴妃と行幸の折、貴妃の肩によりて、世々爲夫婦と契りし殿なり。

此唱歌は春の御遊をもよほされ、貴妃朝まだき華清宮へ行てみゆきを待よそおひを賦して、彼の寵なき上陽人のうらやむ情を寄せり。

べかへせしより、帝の寵を得て後宮の美女別處へうつされし事あり。上陽人も其内なり。

是いふ心は、貴妃の色に君の御心まどひ給ひ、貴妃ひとりの外は御目につかず、かくのごとく上陽宮へととをさけぬこそ恨みなれ。此唱歌も詩の 妬 令 三 潜 配ニ上陽宮、一生 遂 向 空 房 宿 といふ句をとりてつくれり。

四 えらばれいりし二八の春、うつされきてはむそちの秋、むなしきとこにおいはて、ねをのみなくぞあはれなる。

此唱歌は、詩の入時十六、今六十、零落年深殘此身といふ句をとりて作れり。

夫木に 長方卿 はかなしやむなしき床にあけられて、年のむそちの空に過ぬる。

五 芙蓉花おとろへて露の玉ひかりなし。今は見えじな見えもせば、うとき人にはわらはれむ。

二宮のうぐるす花になき、軒のつばめは雨をよぶ。

うらやましきはおのが身を、心のまゝにまかすらむ。

此唱歌は詩の句に宮鶯 百轉 愁 厭 聞 梁 燕 雙 栖 老 休 妬 鶯 歸 燕 去 長 情 然 とあるを取て、鶯は花に啼、軒のつばめは雨をよぶ。飛さり飛きたり己が心のまゝなるに、われは此上陽宮に閉られて、心のまゝならずと、わが身の憂きあまりに、心なき鳥をもうらやむ情をのべたり。

丹後守家百首 忠 成 おひにける身をぞうらむる、鶯の百轉をひとりきくにも。

三 やうかをいでし其色に、君の心をまどはされ、ひとりのほかは目につかで、とをさくるこそうらみなれ。

貴妃は楊氏のむすめなり。貴妃楊家より出でみや

此唱歌は詩の 臉 似 芙蓉 胸 似 玉 といふ詞をふまへて、彼の荷の花もさかりなるころは、露の光りもはへあるに今は花もおとろへて、露の光もなしと、是花の盛衰を以てわが貌にたとへ、また詞の外人不見見應 笑といふ句をとりて、かくひかりなくおとろへたるわれなれば、今は人に見えじな、もし外面の人に見えなば、笑はるべしとなり。

夫木に 二條太皇太后宮大貳 紅にたとへし顔も霜ふりて、うとき人には見えじとぞおもふ。

六 かべにそむけるともしびの、まだたきのこる夜はすがら、窓うつ雨のをときけば、いとと近え寝られぬ。

此唱歌は詩の 夜 長 無 寝 天 不 明 歌々 殘 燈 背 壁 影 蕭 々 聞 雨 打 窓 聲 といふ句を寫せり。ながき夜のあかしがたきに、ともしびのかげはほのかに、窓には風の雨をさそひて、いと心すみてねられずと、憂寝の閨情をのべたり。



第五 箏 曲 考 盛 忠

丹後守家百首  
さらぬだに老の寢覺は久しきに、窓うつ雨の音のみぞする。

七たとへていはゞ花鳥、ふみにつくり、詩にうたふ、いまやうすがた、とりくの中にならぬ此宮たゞひとり。

此唱歌は玄宗の時、美女を采擇しに、女を花鳥にたとへて、其えらぶ役人を花鳥使と名付り。此事文集の註に出せり。是をふまへて、たとへていはゞ、花鳥といひ、又詩の君不見昔時呂尚美人賦。又不見今日上陽白髮歌とある詞をふまへて文に作り、詩にうたふといひ、又天寶末年時世粧といふ詩の言葉、ならびに同時采擇百餘人。零落年深殘此身とある詩の詞をふまへて、今様すがたとりくの中にならぬ、わびしき只ひとりといへり。唱歌の心は、我わかき時、天寶の御宇とりえらびたる色音うるはしき花鳥にたとへしおほくの美人、あるひは文に作り、

怨の字を男女に懸ていへり。こゝは怨曠の二字を女のみ懸て、年老るまで夫なきを怨み、年月曠しく暮すを怨むといふ義なり。是詩經の關雎后妃之徳也。葛覃后妃之本也。といへるたゞひの小序と同じ。  
上陽一人。紅顔閹老白髮新。綠衣監使守宮門。一閉上陽多少春。

此詩は上陽宮にうつされし女の事をいふゆへ、首句に上陽人とあらはしていへり。凡そ白氏が、諷諭の詩は、首句に其目を標し、卒章に其志を顯せり。

○紅顔はわかうるはしきかをばせ○閹老とは人しれずいつの間にやら年老たりといふ義。○綠衣監使は婦人にして目付役をつとめる人をいふ。多少はいかばかりといふ義。此四句上陽人此上陽宮へ移されし時は若かりしが、いつの間か、頭に霜置り宮守の關あれば、外面を見る事もならぬ此宮にこもれる事、幾春ぞといふ心なり。

詩に歌へる今様すがたのとりくゝあまたなる中に、われはたゞひとり、此上陽宮にのこりて、こしかたをしるのび、今のうきを歎きて、わびしく暮せるとなり。猶左りに上陽白髮人の詩を解て載り。委くは詩をよみてのち、此曲の詞を翫ぶべし。

上陽白髮人

愍怨曠也

唐の白樂天自分に此樂曲の題をまうけ、此詩を賦して時代を諷諭せり。唐の七代玄宗帝の御宇、天寶五年より後、楊貴妃寵愛專にして、後宮の一人も寵を得るものなし。其上後宮に美はしき女あれば遠ざけて別處にうつし置たり。上陽宮も別宮の名にして、こゝにうつされし人貞元の比までながらへありしを、樂天其年久しくむなしき床に老はてし事をあはれみて此詩を賦し、時代のありさまを諷せり。貞元は唐の十代德宗帝の年號すなはち樂天の時代なり。天寶五年より貞元元年までは凡そ四十年ばかり。

○怨曠とは孟子に内無怨女外無曠夫と、曠

玄宗末、歳初、選入。入時、十一、六、今、六十。同時、采擇、百餘人。零落、年深、殘、此身。選入は、えり出されて入内せしをいふ○零落はおちぶれる事○年深とは年久しく○殘の字はおとろへなりにのこるをいふ。こゝは身の末にならへあるをいふ。

此四句玄宗帝の御代はじめて入内せし時、二八の年なりしが、今ははやむそちのよはひをかさねり。其頃同じくえり出されし人あまたありしが、或は別處へうつされ、又はむかし人となれるに、われはかくおちぶれて、おいの身ながら、残りてうきを見るかなといふ心なり。

憶昔、香、悲、別、親、族。扶、入、車、中、不、教、哭。皆云、入、内、便、承、恩。臉、似、芙、蓉、一、胸、似、玉。

吞悲は涙を吞てむねにて泣事○扶入は介抱して車にのせる義○内は禁裡をいふ○臉は頬なり芙蓉は荷花なり。

此四句身のつらき時は、父母親類をしたふ例しなれば、



ましてわかれのかなしかりし時をわすれぬは、猶更なり。是いふ心は、むかし入内の折、親類に別し時、人々介抱して車にのせ、泣事を制していふは、顔は芙蓉のごとく、胸は玉のごとく、美はしき生質なれば、入内せば、其儘御寵愛あるべしとなぐさめし事を、今にわすれもやらずとなり。

未容二君 王得見レ面 スデニラレタリヤウ 已被二楊 妃 遙側目 ヒニハルカニツバメノメヲ  
妬令三潜 配二上 陽一宮 シヤウノヒニ 一生 遂 向二空 房一宿 タクワホウニイルコトヲ

○遙側目とは遠く目かどにかける義○潜はひそかにそれとなしといふ心。配は配流とつづきて其處へくばりてながす○空房はひとりねの床○宿は寝るといふ義。

此四句右のごとく親類の人々なぐさめけるが、女は宮に入て始まるゝのためし、入内してはまだ君に見えもなきに、はや楊妃にねたまれたり。うらめしきはわれをばひそかに上陽宮へうつさしめ、生涯さびしき聞に臥事かなといふ心なり。

唯 向三深 宮一望 影 月一 東 西 四 五 百 遍

長悄然は、いつまでも愁のはてしなき義○東西の字東嶺の月をむかへ西嶺の影を送る情と見ゆ○五百回圓は月は一月に一度満るものなれば、凡そ四十年餘り○不記はおほえずといふ義。

此四句、いとひし驚も、ねたみし燕も、うき友となれるに、今は己がまゝ、いづちへか去し。此身はもとのまゝ、こゝにありて、愁のやむ期もなく、春秋のうつりかわるもいたづらにおほえずと、只人遠き此宮にて、月にかこち、こしかたをかぞふれば、およそ四十年にあまるとなり。

今日 宮 中 年 最 老 イトイタリ 大 家 遙 賜 尙 書 號 タイカハルカニタマフシヤウシヨノガウ

大家は天子をさしていふ。蔡翁獨斷親近侍從之臣稱天子曰大家とあり○遙の字朝廷と隔たりし義見ゆ○尙書は官の名。

此二句いふ心は、けふにては宮中にてわが身年もいと老たれば、今の朝廷より尙書の官號を賜りしが、是とも朝廷へめされる事もなく、やはり此宮に居ながら

歌々は小美貌、ほのぐらきなり。蕭々はさびしき雨の聲。

此四句は秋夜すがら憂寝の床のわびしき情をいへり。それゆへ秋の夜長しの句をのべり。壁にそむけるともしびの更行かけ、寢覺の窓に秋の雨風さそふ聲いと長き夜のあかしがたきといふ心をのべり。

春 日 遲 日 遲 獨 坐 天 難 暮 モガクシクレ 宮 鶯 百 轉 愁 ミヤウ  
厭 聞 梁 一 燕 雙 一 栖 老 休 妬 イトフナコトヲ

梁燕は軒のつばめといふも同じ。

此四句春は誰しもなぐさむ時なるにおもひある身は長き日暮しがたき情をのべり。それゆへ春の日遅しの句をいへり。いふ心は昔のねの長き日かけかたらふべき人もなく、鶯はなぐさむものなるに、憂身に聞はいとはしく、軒のつばめならびすむを見れども、老の心にはねたましともおもはずと此詞にはわかき時より幾春かねたみ來りしといふ餘意を含めり。

小 頭 鞋 履 窄 衣 裳 ホトケノカニタマハリケルコトナリ 青 黛 點 眉 眉 々 細 長 ホトケノカニタマハリケルコトナリ  
外 一 人 不 見 々 應 笑 ウチノヒトニハミエズニシテバマナニシラフ 天 一 寶 末 年 時 世 粧 アメノタカラノシノトキノヨロシ

○小頭鞋履はくつのかしらの小さくしてかざりもすくなきをいふ。窄衣裳は身にせまきしたての衣裳なり。點眉は眉を畫く事。

此四句かしらの小さき履をはき、身にせまき衣裳を着、眉のつくりも細長し。此よそおいは四十年餘りも前に入内せし天寶のころの今様すがたなりしが、久しく外面を見ぬ事ゆへ、今の風俗もしらず、さぞ今は好もかはりぬべし。外の人にはま見えじ。もしも見えなば、わがすがたをわらふべしとなり。

上 一 陽 一 人 苦 最 一 多 ウラシムモツトモオ、シ 少 一 亦 一 苦 老 一 亦 一 苦 シカウシテ  
苦 老 一 苦 兩 如 一 何 クルシメ、テ

此三句は樂天上陽人の事をあはれみていふ、わかきより老てののち心くるしき事のみなれば、心中いかゞあらんとなり。

君 不 見 昔 一 時 呂 尙 美 一 人 賦 ミエズ 又 不 見 今 一 日 ミエズ



上陽白髮歌

君不見とは誰ともささず、ひろくさす詞なり。

○呂尙は唐の人なり。字を子回といふ。文集の註に據るに、玄宗の時ひそかに美麗なる女を採擇し事あり。其役人を當時花鳥使と號せり。凡そ天子の御用をうけたまはる人を使といふ。時に呂尙夫人の賦を書いて奉り、帝を諷諭せし事あり。又唐書呂尙が、傳を見るに、右の賦を奉りし時、帝これを悦び給ふとあり。

此四句むかし呂尙は奉りし文もさぞ見給ふらん。今又この上陽白髮人の歌を見給へかし。實あはれむべき事ならずや。いかなる剛腸の人なりとも、感涙せきあへ給ふまじといふ心を寓せり。是白氏が諷諭の詩は卒章に其志を顯すとはじめにいへる通りなり。

うたはことをながうしりちはこゑをやはらぐ。やまともろこしおなじさま成べし。峰の松風かよひて、いづれの緒のしらべぞとおもひ、ながるゝ水のをとにたぐへてはほしあへぬそでをかこつ。月のゆふべ、雪のあしたのもてあそび、何かはこれにすぎむ。この巻々を見るに、よく六義のことはりをさとし、ひろく百家のふみにわたり、誠にふるきをたづねて、あたらしきをしるとやいはむ。猶もことばのあやまちもやあなるときかまほしくまたふみの末にしろさむ事をもとむ。予おほけなく累葉の名を繼といへども、摛藻の才にたへず。もとより絲竹の技にうとく、まいてつたなき筆をそへむ事は、世のあざけりも心ぐるしく、いな舟のいなといはむも最上川のもだしがたくて、ただ曲中のをもむきをいつゝの言葉のうかぶにまかす。水莖のながれも心のひきゝにやつかむ。

つきかけのおほろけならぬ契りとして

めぐり逢夜の春のほそどの。

雲井より山郭公をとづれて

はなたち花の軒ばとふ、こゑ。

しほたるゝ須磨の浦波袖かけて

こゝろづくしの秋風ぞふく。

こずるより散かふ花のおもかけを

まだきに雪のいろやみすらむ。

とことはおさまる御代の松の風

つるもゆたけき聲かすはらし。

天明むつとし

長月のはじめ

前大納言 押花

箏曲考之爲書也 余私乞以 太公之所藏者也 謄録寶之深襲 筐中云々

箏 曲 考 終



第六 吾孀筆譜考證



吾嬬箏譜考證

東都 沙門了阿 選

首 卷

吾嬬

日本紀第七景行紀四十一年冬十月曰自甲斐北轉歷武藏上野西逮于碓日坂時日本武尊每有顧弟橘媛之情故登碓日嶺而東南望之三歎曰吾嬬者耶嬬此云故因號山東諸國曰吾嬬國也。

後拾遺集第十六雜曰女のもとにまかりたりけるにあづまごとをさし出て侍りければ。大江匡衡朝臣。あふ坂の關のあなたもまだみねばあづまのこともしられざりけり。

源氏物語若紫卷湖月抄第五曰あづまをすががきて常陸には田をこそつくれといふ歌をこころはいとなまめきてすさびる給へり。註明あづまは源氏物語の地名なりと云

說文眞本第五上曰箏、鼓絃竹身樂也從竹爭聲側莖切。

釋名第七釋樂曰箏、施絃高急箏々然也。

晉書第八十一列傳五十一相伊傳曰帝召伊飲讌安侍坐帝命伊吹笛伊神色無逆即吹爲一弄乃放笛云臣於箏分乃不及笛然自足以韻合歌管請以箏歌並請一吹笛人帝善其調達乃勅御妓奏笛伊又云御府人於臣必自不合臣有一奴善相便申帝彌賞其放率乃許召之奴既吹笛伊便撫箏而歌怨詩曰爲君既不易爲臣良獨難忠信事不顯乃有見疑患周且佐文武全滕功不刊推心輔王政二叔反流言聲節慷慨俯仰可觀安泣下沾衿乃越席而就之捋其鬚曰使君於此不凡帝甚有愧色。

隋書第十五志第十曰絲之屬四一曰琴神農制爲五絃周文王加二絃爲七者也二曰瑟二十七絃伏羲所作者也三曰筑十二絃四曰箏十三絃所謂秦聲蒙恬所作者也。

藝文類聚第四十四樂部四引英雄記曰呂布詣袁紹紹患布欲殺之遣三十六兵被鎧迎布使著帳邊臥布知之使於帳中鼓箏諸兵臥布出帳去兵不覺也。

箏

和訓栞第二阿之部曰あづまごと、倭琴をいふ。源氏物語にあづまと計もいへり。東琴の義也。此東は西土に對せる詞なるべし。筑紫琴にむかへていふにはあらじ。源氏に、あづまところ名も立くだりたるやうなれど御前のみあそびにも、まづぶんのつかさをめすは人の國にはしらす是を物のおやとしたるにこそあめれ。花鳥餘情の序に東琴を諸の器の上におくとみえたり。上代には夫婦の結をなすに必ず女の親の方より箏に琴をあたへて、それを永く夫婦の中の契とせし事有りしにや、古事記天詔琴の用ひらるゝは又吾妻の義も此故なるべくやと本居氏の説也。西土にも夫婦の間の好合へるを琴瑟をしらぶるに譬へいへり。  
(今こゝに名づくるあづまは東都にて新におこせる箏の曲節といふ義なり)

風俗通第六釋音曰箏、謹按禮樂記五絃筑身今並涼二州箏形如瑟不知誰所改作也或曰秦蒙恬所造。

同引傅子曰郝素善彈箏雖伯才妙手吳姬奇聲何以加之又曰箏者上圓象天下平象地中空准六合絃柱十二擬十二月乃仁智之器也。

同引魏阮璃箏賦曰惟夫箏之奇妙極五音之幽微苞群聲以作主冠衆樂而爲師稟清和於律呂籠絲木以成資身長六尺應律數也故能清者感天濁者合地五聲並用。

字彙未集竹部曰箏、笛耕切音爭樂器以竹爲之秦樂也一說秦人薄義父子爭瑟而分之因以爲名一說秦蒙恬所造制長三尺絃十三柱高三寸。

根本昆奈耶第四十五八十二之二曰彼仙道大王妙解彈箏其月光夫人善能爲舞。

體源抄第八上部曰譜云秦箏者秦蒙恬依作之其長七尺二寸增琴一倍廣八寸其絃十三或云秦女姊妹爭瑟引破終爲兩片其一片有十三絃爲姊分其一片有十二絃爲妹分秦皇奇之立號爲箏。

同等六調曰或云秦ノ腕無義ト申者一ノ瑟ヲフタリノ娘ニ傳フニ此ヲ爭ヒテナカバヨリ引破テ即箏ノ體ヲ作ル此ニ依テ爭ノ字ヲ從ヘタリ其長ヲ云ヘバ六尺五



寸六合五行ニ象ル左右ノ手ノ常ニ動クハ日月ノメグル相ヲ表ス甲ノソレルハ天ノ圓ナルガ如ク腹ノヒラナルハ地ノケタナル體ナリ柱ノ長二寸ハ陰陽ノ法度トス我朝ニ傳ハル事ハ仁明天皇ノ御時ニ遣唐使ノ准判官掃部頭貞敏廉承武ガ娘ニ傳フト云或說内教坊ノ妓女命婦石川色子筑紫ノ彦ノ山ニテ唐人ニ此ヲ傳フトモ見エタリ。

譜

說文眞本第三上曰譜、籀錄也從言普聲史記從並博古切。

釋名第六釋典曰譜、布也布列見其事也。

秘曲目次

- 弓八幡第一
- 夏瘦第三
- 明烏第五
- 葉隱第七
- 春宮曲第九
- 布袋第二
- 廻逢瀬第四
- 今様朝妻舟第六
- 竹筏第八
- 四季之艶第十

考證典籍

- 異苑
- 遊仙窟
- 伊呂波字類抄
- 西陽雜俎
- 伊勢物語
- 異名分類抄

通計卅五曲

- 八重垣第卅五
- 葵上第卅三
- 小督曲第卅一
- 江島曲第廿九
- 那須野第廿五
- 千里梅第廿七
- 芙蓉峯第廿三
- 花曆第廿一
- 東花第十九
- 子規第十七
- 花孀第十五
- 相生第十三
- 山櫻第十一

- 暈内第十二
- 曲水第十四
- 夏第十六
- 千箱玉梓第十八
- 花鏡第二十
- 蓬萊第廿二
- 播磨八景第廿四
- 住吉第廿六
- 櫻狩第廿八
- 紀路奧四季段第三十
- 長恨歌曲第卅二
- 湯谷第卅四

論衡

- 白氏文集
- 寶物集
- 仁王般若經
- 廿二社注式
- 法句經
- 法苑珠林
- 北山抄
- 本朝文粹
- 平家物語
- 東觀漢記
- 智度論
- 塵添搥囊抄
- 龍城錄
- 龍鳴抄
- 王勃詩集
- 和漢朗詠集
- 和漢三才圖會
- 白氏六帖
- 佩文齋韻府
- 播州名所記
- 日本紀
- 耳底記
- 法華經
- 本草和名
- 堀川百首
- 本朝神社考
- 平家物語考證
- 東坡先生詩集注
- 中宮亮顯輔家歌合
- 劉淵釋名
- 林葉和歌集
- 王昌齡詩集
- 和名抄
- 和歌藻鹽草
- 和訓栞

- 鐘詩外傳
- 羯鼓錄
- 諧聲品字箋
- 下學集
- 貝盡浦之錦
- 唐會要
- 大寶積經
- 大愛道比丘尼經
- 大日經疏
- 體源抄
- 唐詩選餘言
- 大内裏圖考證
- 禮容筆粹
- 續齊諧記
- 宗五大草紙
- 徂徠集
- 涅槃經
- 長門本平家物語
- 漢武內傳
- 樂府詩集
- 河海抄
- 樂家錄
- 大戴禮
- 太平廣記
- 大方便佛報恩經
- 大乘起信論
- 竹取物語
- 大諸禮集
- 玉勝間
- 列子
- 楚史禱机
- 增壹阿含經
- 宗牧東國紀行
- 徒然草
- 年中行事歌合
- 老子道德經



琅邪代醉編

夢溪筆談

歌枕名寄

野槌

大鏡

應仁記

群芳譜

俱舍論

管絃音義

懷橘談

楊子方言

夜鶴庭訓抄

八雲口傳

萬葉集

萬葉仙覺抄

松葉

舞曲扇林

藝文類聚

華嚴經

賢愚因緣經

華嚴經演義抄

源氏物語

源平盛衰記

月清集

教訓抄

源氏物語奧入

元永元年十月內大臣家歌合

堯惠法印北國紀行

見聞諸家紋帳

風俗通

舞曲口傳

夫木抄

覆醬集

富士百詠

懷子

清輔袋草紙

玉葉集

玉海集

玉山詩集

維摩詰所說經

未曾有因緣經

躬恒家集

尙書

爾雅

尸子

史記

晉書

新唐書

初學記

字彙

事文類聚

神僧傳

正法念處經

心地觀經

新撰萬葉集

拾遺集

釋日本紀

袖中抄

次郎百首

詞花集

式子內親王御集

續世繼物語

新古今集

續古今集

新千載集

新後拾遺集

拾芥抄

新撰六帖

絲竹口傳

深窓祕抄

寂照堂谷響集

物類稱呼

孔子家語

後漢書

五車韻瑞

金光明最勝王經

根本毘奈耶

古事記

古今集

後撰集

古今六帖

後拾遺集

江家次第

後照念院殿裝束抄

古今序注

後太平記

延喜式

謠曲拾葉抄

傳燈錄

東鑑

安多物語

雨舍

莊子

三國志

三體詩

薩天錫詩集

狹衣物語

散木奇歌集

山家集

西行法師家集

草菴集

殘夜抄

雜祕別錄

禽經

祇洹圖經

金葉集

清輔奧義抄

集外歌仙

新編錄倉志

諸禮常用集

新撰犬筑波集

神靈矢口渡

埤雅

百聯抄解

祕傳花鏡

百練抄

美人妝

文選

物具裝束抄

山海經

前漢書

說文解字真本

西京雜記

全唐詩

善見毘婆沙律

撰集百緣經

清少納言枕草紙

千載集

千五百番歌合

全唐詩逸

隋書

通計二百九種



吾孀箏譜考證

第一 弓八幡

松たかき、えだもつらなる、はとのみね、くもらぬ御代は、久かたの、月のかつらの、男山、げにもさやけき、かげにきて、君ばんせいと、いのるなる、神にあゆみを、はこぶなり、く。

弓八幡

謡曲拾葉抄第二弓矢曰此謡を弓矢幡と名づくる事は八幡大菩薩は源家の氏神弓矢の守護神なれば弓と矢と幡との三つの兵具に譯して弓矢幡とは名づくる

即再三奉拜之後拂曉見山上光處誠是奇異靈驗處也。

ひさかたの月のかつらのをとこ山けにもさやけき影にきて

續古今集第七神祇歌、大納言通方よませ侍りける石清水歌合に社頭月といふ事をよめる、下部兼直曰

ひさかたの月のかつらのをとこやまさやけき影はところがらかも。

第二 布袋

戀といふ、うきはかうした、うきものと、がてんはしても、しらぎぬの、もたれぶくろの、長きひも、うちはかた手に、思ひねの、うつらくと、こがれてくらす、そのぬしさんの、三重のおび、つひくるくと、ひとへには、むすびもはてぬ、春の夢、あだなこのよに、すみぞめの、こちや木の端ぢや、ないものを。

布袋

神僧傳第九此契曰釋契此者不詳氏族或云四明人形裁服鳥罪切暖乃罪 燈類幡腹言語無恒寢臥隨處常以杖荷布袋

也。

廿二社註式石清水臨時祭錄曰舊記云人皇三十代欽明天皇御宇豊前國宇佐郡厩峰菱瀉山間現三歳小兒立竹葉託

東都 沙門了阿 選

吾孀箏譜考證  
弓八幡  
謡曲拾葉抄第二弓矢曰此謡を弓矢幡と名づくる事は八幡大菩薩は源家の氏神弓矢の守護神なれば弓と矢と幡との三つの兵具に譯して弓矢幡とは名づくる也  
廿二社註式石清水臨時祭錄曰舊記云人皇三十代欽明天皇御宇豊前國宇佐郡厩峰菱瀉山間現三歳小兒立竹葉託宣云我  
是日本人皇十六代譽田天皇廣幡八幡府君也我名曰護國靈驗威力神通大自在王國

宣云我是日本人皇十六代譽田天皇廣幡八幡麻呂也我名曰護國靈驗威力神通大自在王國々所々跡垂於神道是初顯御坐。はとの峯 帝王編年記第十四清和天皇貞觀二年八月二十三日曰大安寺大法師行教爲奉

拜八幡參詣宇佐宮一夏之間風轉大乘經夜誦諸尊真言

即大菩薩夢中示曰汝爲我心滿誦咒讀經吾與汝共上洛近護王城行教彌致信力奉仕勤修即著山崎離宮其夜示現汝見我佐所即驚見異方男山石清水嶋峯上現現大光

入鄭市肆見物則乞至於醴醫魚菹纒接入口分少計入囊號爲長汀子布袋師也曾於雪中臥而身上無雪人以此奇之又嘗就人乞啜其店則物售袋囊中皆百一供身具也示人吉凶必現相表兆充陽即曳高齒木屐市橋上豎膝而眠水潦則係濕草履人以此驗知以天復中終於奉川鄉邑人共埋之後有他州見此僧亦荷布袋行江浙之間多畫其像焉。

傳燈錄第廿七又載之文有廣略異同。

みへのおびつひくるくとひとへにはむすびもはてぬ

萬葉集第四大伴宿禰家持贈坂上曰一重耳妹之將結帶乎尙三重可結吾身者成。

こちや木のはしぢやないものを

枕草紙春曙抄第一なるもの曰おもはん子を法師になしたらんこそはいと心ぐるしけれさるはいとたのもしきわざを唯木のはしなどのやうにおもひたらんこそいとほしけれ。



第三 夏 瘦

あふことの、たえまがちななるかなれど、名たてがましくみな人の、うらやましいと、すてことばにも、いはれていとど、ものおもひ、さけでちらして、まざれて見ても、心ひとつに、せまるやら、しんきくくえ、うかぬすがたを、なぶられて、かくすことばも、夏やせと、人にこたふる、なみだ川、ふかいちぎりと、わしゆゑに、うき名たゝせる、身とならば、今のおもひを、わすれぐさ。

夏瘦

萬葉集第十六 嘸吟瘦人歌 二首之初 曰石麻呂爾吾物申夏瘦爾吉跡云物會武奈伎取食。

いはれていとど物おもひ酒でちらしてまざれて見ても

漢書第六十五 陳訪 曰鎮憂者莫若酒。

玉川の水。

つましあればきつゝなれにし戀ごろも

古今集第九 羅旅歌、東の方へ友とする人一人二人いざなひていきけり三河國八橋といふ所にいたれりけるにその川のほとりに杜若いとおもしらくさけりけるを見て木の陰におりめてかきつばたといふ。五文字を句の頭にすゑて旅の心をよまんとてよめる、在原業平朝臣曰。

から衣きつゝなれにしつましあればはるくきぬる旅をしぞおもふ。

こたちのきぬはむつきより

和名抄第十二 衣類 曰襪襪、孫愔曰襪襪 兼保二音和名無豆岐 小兒被也。

めぐりあふせはしづはたおびの

萬葉集第十一 寄物 陳思 曰去家之倭文旗帯乎結垂執云人毛君者不益。

いつかはれゆくころもはるさめ

古今集第一 昔歌上、歌奉れと仰せられし時よみて奉れる、貫之曰

わがせこが衣はるさめふること野邊の緑ぞ色まさりける。

第五 明 烏

今のおもひをわすれぐさ

文選六臣 第五十三 晉叔夜 曰合歡蠲忿萱草忘憂愚智所 善本 字知也。

和名抄第廿 草木部 草類 曰萱草、兼名苑云萱草一名忘憂 萱音喧 云和須禮久佐俗 云如蓮蕪二音

第四 廻逢瀬

つましあれば、きつゝなれにし、戀衣、かさなるなかに、ひとつみの、こだちのきぬは、むつきよりに、わかれくくの、うらおもて、うすきひとへの、なつかしながら、こんなしんくな、つらさおもへば、あはぬもましかと、いふもうき世ぢやえ、めぐりあふせは、しづはたおびの、とくにとかれぬ、わがおもひ、さゆえ、とかれぬわが思ひ、いつかはれゆく、ころも春さめ。

廻逢瀬

玉葉集第十 戀歌二、初遇戀の心曰 ときかへしのでのしたおび行めぐりあふせうれしき

待くらし、そしてうらみし、その夜半は、おそい來やうと、ひとことが、つひいひとつの、中々に、ないてゐるのを、わらふかと、そむけたせなか、うちたゝき、男心のにくいのも、うれしいことも、とにかくに、なみだがさきの、やぼとなる、をなごのくせぢや、ないかいな、とにかくに、なみだがさきの、よわいきを、つよう見せたり、しなうたり、うき川竹の、ながれの身、せめてくめかし、あけがらす。

明烏

樂府詩集第三十一 雙桐生空 井曾齊己 曰季月對桐井新枝雜舊株晚葉藏栖鳳朝花拂曙烏還看稚子照銀牀繫轆轤。

(五車韻瑞第十二載晚葉朝花之句而爲梁昭明太子詩且栖字作棲)

にくいのもうれしい事もとにかくに涙がさきの

古今集第十八 雜歌下 題不知 讀人知らず 曰 世の中のうきもつらきも告なくに先しるものは涙な



第六 吾孀筆譜考證  
りけり。

河竹のながれの身

和名抄第廿竹類 曰管竹、四聲字苑云管音與苦同辨色立成云  
用河竹二字今案 竹名也。  
苦宜從竹作管

美人妝第一曰遊女ヲ姪レメカ 亦名ハ川竹流女トモイフ

川竹ハヨゴトニフシムアル人トモ交リ世流ヨリノ

業トスルナレバ流女トモイフ也。(實永六年正月印板

松竹梅第五女仙人曰たま〜受がたき人身を受たれど

ためしすくなき河竹の流の身となる悲しさよさきの  
世のむくいまでおもひやられて悲しやな)

第六 今様朝妻舟

一夜かりねに、あふみちの、あさづまやまは、ふ  
かゝらぬ、人のちぎりの、名なれやと、なれにし  
とこの、山風に、ねみだれがみの、やなぎかげ、  
つながぬ舟の、うきてよに、つひのよるべは、い  
さや川、いさしらなみも、こゑをへて、うつやつ  
とみの、うつやつとみの、うつつなや。

いさしら浪も聲そへてうつつや鼓の

次郎百首卷下唐人曰立波に鼓の聲を打そへて唐人よ  
せくおきの島より。

第七 葉隠

それつみふかき、女の身、あるがなかにも、河竹  
の、ひとよ〜の、あだ枕、ほんにしみ〜、う  
やつらやとは、いふもの、あるときは、おもふ  
男に、おもはれて、とけてあふよの、うれしさ  
は、何にたとへん、言の葉の、かたりもつきず、  
つひきぬ〜の、わかれぢや、ア、あすのひの、  
くれをまつちの、神かけて、かはらぬ色の、ふか  
みどり、ふかきちぎりの、中々に、しげき人目  
に、へだてられ、あはでもどした、心のうちを、  
君ならずして、誰か知る、はかなやま〜に、なら  
ぬ身を、おもひつ〜けて、ひとりねの、あけゆく  
そらも、はしたなく、なくねちをはく、ほと〜ぎ

今様朝妻舟

松葉第三朝妻舟曰あだし仇波よせてはかへる波朝妻舟  
のあさましやあゝ又の日は誰に契をかはして色をか  
はして色を枕はづかし偽がちななるわがとこの山よし  
それとても世の中。

あふみちのあさづま山

萬葉集第十春雜 曰子等名丹闕之宜朝妻之片山木之爾

霞多奈引右柿本朝臣人  
麻呂歌集出

なれにしとこの山風に

萬葉集第十一曰狗上之鳥籠山爾有不知也河不知二五

寸許須余名告奈。

つながぬ舟のうきて世につひのよるべは

源氏物語帚木卷湖月抄 第二曰つながぬ舟のうきたるためし

もけにあやなし。

文選六臣第十三鳥賦上賈曰澹乎若深淵善本作之靜泛乎若不

繫之舟。(莊子第十列御曰汎若不繫之舟虛而遨遊者也)

本朝文粹第九江見遊女曰維舟門前運客河中少者脂粉語咲

以蕩人心老者皆登雜神以爲己任。

す、月のかつらのはがくれか。

葉隠

式子内親王御集春廿七曰のこりなくありあけの月のも

る影にほの〜おつる葉隠の花。

それつみ深き女の身

寶積經第九十七優陀延王 曰女人能壞清淨禁戒亦復退失

功德名聞爲地獄因障生天道何有智人於此忻樂。

增壹阿含經第十二三寶 曰女人入地獄多於男子所以然

者比丘當知以三事故衆生之類身壞命終入三惡趣云何

爲三所謂貪欲睡眠調戲有此三事纏著心意身壞命終入

三惡趣女人竟日習翫三法而自娛樂云何爲三晨朝以嫉

妬心而自纏絡若至日中復以睡眠結而自纏絡向暮以貪

欲心而自纏絡以此因緣使彼女人身壞命終生三惡趣。

佛說大愛道比丘尼經卷下曰女人凡有八萬四千匿態迷

惑清淨道士使墮泥犂中

河竹のひとよく

年中行事歌合群書類從曰卅七番石寄竹臺よそにみる雲居の

庭の河竹のひとよのふしもうとき中かな。



明け行く空もはしたなく

源氏物語若紫卷<sup>湖月抄</sup>第五曰まだ人もいでこねばかへるも情なけれど明け行く空もはしたなくてとのへおはしぬ。

鳴音血をはく杜鵑

異苑第三曰杜鵑始陽相催而鳴先鳴者吐血死常有入山行見一群寂然聊學其聲便嘔血死初鳴先聽其聲者主離別圃上聽其聲不祥厭之法當爲大聲以應之。

酉陽雜俎第十六<sup>羽</sup>又同之。

埤雅第九<sup>釋鳥</sup>曰杜鵑一名子規苦啼啼血不止一名怨鳥

夜啼達旦血漬草木。

月のかつらの葉隠か

初學記第一<sup>月部</sup>曰虞喜安天論曰俗傳月中仙人桂樹今視其初生見仙人之足漸已成形桂樹後生。

酉陽雜俎第一<sup>天咫</sup>曰舊言月中有桂有蟾蜍故異書言月桂高五百丈下有一人常斫之樹創隨合人姓吳名剛西河

人學仙有過謫令伐樹。

う／＼と常に流るゝ河水もいと物すゞき門口のひとむれしける藪の中。

こひし鳥

異名分類抄第三<sup>部</sup>曰無常鳥、後撰口訣に見ゆ、此鳥無常をすゝむといへり云々、こひし鳥、前に同じ、昔のつまをこふと云々。

眞如の月は西の空

長門本平家物語第十七<sup>維盛高野野事</sup>曰發心門を打過ぎて本宮にもかゝぐりつき給ひにけり、佛性眞如の月の影は生死の御顔にくまごなき。

華嚴經第三十<sup>品</sup>曰眞如照明爲體。

大寶積經第六十<sup>授記會</sup>曰眞如圓滿如虛空圓滿。

水は東にとゞまらで

家語第二<sup>三怨</sup>曰孔子觀於東流之水子貢問曰君子所見大小必觀焉何也孔子曰以其不息且徧與諸生而不爲也夫水似乎德其流也則卑下倨拘必循其理此似義浩浩乎無屈盡之期此似道流行赴百仞之嶮而不懼此似勇至量必平之此似法盛而不求概此似正綽約微達此似察發源

第八 竹筏

葉がくれて、<sup>なか</sup>亥中の影の、ふけがてに、おもかげのこる、ひとこるは、夢か戀しや、ア、戀し鳥ぞ、まつよのねやに、風さそふ、松のしらべの、をのへより、しんによの月は、西の空、水はひがしにとゞまらで、ながれにうかぶ、たけいかた。

竹筏

楊子方言第九曰附謂之箠<sup>音</sup>箠謂之筏<sup>音</sup>筏秦晉之通語也。

字彙未集<sup>竹部</sup>曰筏<sup>房切音附也船也</sup>又編竹澆水亦曰筏

るなかの影のふけがてに

(亥中の影といふ詞ふるくはいはぬ事と見えて體に見およばず)

(唐糸草紙<sup>御伽草紙</sup>第五曰廿日るなかの雲はれて月すこし見えたまふ)

神靈矢口渡第四<sup>道行</sup>曰かくて時刻もひさかたの空さへ渡る冬の夜の廿日る中の月出で、遠寺のかねもか

必東此似志以出以入萬物就以化聚此似善化也水之徳有若此是故君子見必觀焉。

列子第五<sup>鴻問</sup>曰天傾西北日月星辰就焉地不滿東南故百川水潦<sup>音</sup>歸焉。

百川水潦<sup>音</sup>歸焉。

第九 春宮曲

三千とせに、なるてふ桃の花のかほ、ひらくやつゆの、玉の井に、たまのかんざし、さす月影の、玉しくみやの、まひの袖、からのやまとの、おりものは、梅にぼたんに、名もかをる、みやことばは、すいも草、あづまはだての、おもだかや、はひまつはるゝ蔦かづら、にはふ花びし、ふさじざい、めうがありける、此とのゝ、みすのひまもる、春風の、さむさしのげと、めぐみもあつき、君がたまもの、かさねていくへ、千代にやちよも、さかえつきせじ。

春宮曲



王昌齡集卷下曰春宮曲、昨夜風開露井桃未央前殿月輪高平陽歌舞新承寵麗外春寒賜錦袍。

唐詩選餘言恒山詩九卷下曰王昌齡春宮曲全用子夫事仲言解云此爲失寵者欣羨寵者之辭非矣史外戚傳子夫爲平陽主之謠者武帝初即位數歲無子平陽主求諸良家子女十餘人飾置家武帝祓禱上還因過平陽主主見所侍美人上弗悅既飲謳者進上望之獨悅衛子夫是日武帝起更衣子夫侍尙衣軒中得幸上還坐驪甚主因奏子夫奉送入宮王用此事而不露其詩云昨夜風開露井桃此上巳時風漸暖桃始華光景逼真未央前殿月輪高宸遊到夜闌月高懸也平陽歌舞新承寵子夫新人宮得寵也麗外春寒賜錦袍三月深夜餘寒猶在故賜錦袍寵遇可見麗外二字乃見其新進態也。

(衛皇后之事は史記第四十九の六葉左、外戚世家第十九に詳なり) 十九に詳なり) 十九に詳なり)

みちとせになるてふ桃

漢武内傳曰又命侍女更索桃果須臾以玉盤盛僊桃七顆大如鴨卵形圓青色以呈王母母以四顆與帝三顆自食桃

物類稱呼第三陸類曰酢漿草のむぎ京にてとんぼぐさ泉州堺にてすも、筑紫にてこがねばな出雲にてすいぐさ相模にてはすぐさ江戸にてすぐさ奥の津輕にてすかんこ尾張にてすいものぐさといふ。

和名抄第七草類曰酢漿、本草云酢漿草和名加太波美。

塵添搥囊抄第三草類曰酢漿。

見聞諸家紋帳曰多賀、赤田(酢漿の紋なり)

あづまはだてのおもだかや。

本草和名卷上第六卷草上曰澤蒿仁無音昔楊立一名水寫一名

一名芒芋一名高寫一名鼠寫一名鬼寫一名水芒一名鶴

朱一名蓬菓已上六名一名澤足一名禹芝一名悲通天一名鶴

朱一名蓬菓已上出神一名鶴珠一名藥菜藥名也己上和名奈

末爲一名於毛多加。

塵添搥囊抄第三草類曰菱澤瀉松皮菱。

見聞諸家紋帳曰築田(澤瀉の紋なり)

はひまつはるゝつたかづら。

本草和名卷上第七卷草上曰落石蘇敬註云落石一名石鯨

一名石礎千何反一名略石一名明石一名領石一名懸石

味甘美口有盈味帝食輒收其核王母問帝帝曰欲種之母曰此桃三千年一生實中夏地薄種之不生。

梅

爾雅註第九釋木曰梅梅似杏實酢。

埤雅第十三釋木曰梅一名栳杏類也其實酢子赤者材堅子白者材脆華在果子華中尤香俗云梅華優於香桃華優於色故天下之美有不得而兼者多矣。

見聞諸家紋帳詳書類從第四百廿四曰松任修理亮利慶(梅鉢の紋なり)

牡丹

酉陽雜俎第十九廣動植類之曰牡丹前史中無說處唯謝康

樂集中言竹間水際多牡丹成式檢隋朝種植法七十卷中

初不記說牡丹則知隋朝花藥中所無也開元末裴士淹爲

郎官奉使幽冀廻至汾州衆香寺得白牡丹一窠植於長安

私第天寶中爲都下奇賞。

見聞諸家紋帳曰攝州源氏、田能村一番佐分サツ(牡丹の紋なり)

みや、詞はすいもぐさ。

一名耐冬一名石血一名石龍藤肥土略一名鱗石一名雲母一名雲華一名雲珠一名雲英出上五名一名破血莓出和和名都多。

見聞諸家紋帳曰椎名(蕪の紋なり)

にはふ花菱。

本草和名卷下第十七卷草四曰芟實仁無音一名蔞揚菰首仁

陶景注音一名蕨麩一名猪鼻一名水栗一名解唇音已上

兼名和名比之。

塵添搥囊抄第三草類曰菱澤瀉松皮菱。

見聞諸家紋帳曰武田大膳大夫源賢信(花菱の紋なり)

ふき自在

(四諦論第二曰少壯無病壽命家色形富貴自在)

和名抄第十七類曰蔞、崔禹錫食經云蔞音路和名葉似葵

而圓廣其莖煮可噉之。

めうがありける此との、

本草和名卷下第十八卷菜六十曰白藜荷羊反一名覆菹赤也楊立

和名女加。標註曰按婦下脫文

見聞諸家紋帳曰三宮二宮(抱囊荷の紋なり)



冥加ありける

新古今集第二十釋教比叡山中堂建曰阿耨多羅三藐三菩提  
立之時、傳教大師  
の佛たち我立袖に冥加あらせ給へ。

第十 四季之艶

春がすみ、むらさきだちしあけぼの、うめにこ  
づたふ、鳥のねも、いつしかふけて、卯の花の、衣  
やうすき舟人の、こぎゆくかたは、すみだ川、あ  
りやなしやの、よひの月、尾花のかせは、君まね  
く、あさきちぎりは、たなばたの、さゝの一夜の、  
かりまくら、思ひはつもある、ゆきのあさ、すだれ  
かゝぐる、わかれには、もすそひかへて、みわな  
らぬ、そのをだまきの、いとよるこひ。

四季之艶

三體詩卷下送人尉曰盤山行幾驛水路復通巴峽漲三川  
雪園開四季華公庭飛白鳥官俸請丹砂知尉人後高吟  
採物華。

吾復三年當還明日失武丁至今云織女嫁牽牛。

琅邪代醉編第一女曰述異記天河之東有美麗女人乃天  
帝之子機杼女工年々勞役織成雲霧綃縵之衣辛苦殊無  
歡悅容貌不暇整理天帝憐其獨處嫁與河西牽牛之夫婚  
自後竟廢織紉之功貪歡不歸帝怒責歸河東但使一年一  
度與牽牛相會。

雪の朝すだれかゝぐるわかれには

枕草紙春曙第十一きりく曰雪いと高く降りたるをれい  
ならず御格子參らせてすびつに火おこして物語など  
して集りさぶらふに少納言よかうろほうの雪はいか  
ならんと仰せられければ御格子あけさせてみす高く  
まきあけたればわらはせ給ふ人々もみなさる事はし  
り歌などにさへうたへどおもひこそよらざりつれ。

白氏文集第十六香羅峰下新下山居草曰日高睡足猶慵起小閣  
堂初成偶題東韻五首  
重衾不怕寒遺愛寺鐘歇枕聽香爐峯雪撥簾看匡廬便是  
逃名地司馬仍爲送老官心泰身寧是歸處故聊可獨在長  
安。

もすそひかへてみわならぬ其をだまきの糸によるこ

諧聲品字箋第二乙卷曰季、又末也俗云四時爲四季指  
四時末月言又末世謂之叔季亦此意。

說文眞本第五上曰豔、好而長也從豐豐大也盍聲春秋  
傳曰美而豔以贍切。

春霞紫だちし明ほの、

枕草紙春曙第一曰春は曙やうく、白くなりゆく山際  
すこしあかりて紫だちたる雲のたな引たる。

衣やうすき

新古今集第十九神祇曰夜や寒き衣やうすきかたそぎ  
のゆきあひの間より霜やおくらむ、住吉の御歌とな  
ん。

すみ田川ありやなしやの宵の月

古今集第九羅旅歌在原曰名にしおはゞいざこと問はん  
都どりわが思ふ人はありやなしやと。

たなばたのさゝのひとよのかり枕

續齊諧記曰桂陽成武丁有仙道常在人間忽謂其弟曰七  
月七日織女當渡河諸仙悉還宮吾向已被召不得停與爾  
別矣弟問云織女何事渡河去當何還答曰織女暫詣牽牛

古事記卷中神曰活玉依毗賣其容姿端正於是有神壯  
夫其形姿威儀於時無比夜半之時儻忽到來故相感共婚  
供住之間未經幾時其美人妊身爾父母怪其妊身之事問  
其女曰汝者自妊无夫何由妊身乎答曰有麗美壯夫不知  
其姓名每夕到來供住之間自然懷妊是以其父母欲知其  
人誨其女曰以赤土散床前以閉蘇此二字紡麻貫針刺其衣  
欄故如教而且時見者所著針麻者自戶之鈎穴控通而出  
唯遺麻者三勾耳爾即知自鈎穴出之狀而從絲尋行者至  
美和山而留神社故知其神子故因其麻之三勾遺而名其  
地謂美和也。

第十一 山 櫻

のどかなる、春の心にさそはれて、花の下ひもう  
ちとくる、ちぎりやきのふ、けふはまた、おもは  
ぬかたの、山風の、吹にまかする、花のえだ、そ  
れもうきよの、ならひぢやものを、心よわさをと  
がにして、あだなる花と、ともすれば、たつなは



づかし、やまざくら。

山櫻

萬葉集第八山部赤人歌四首之二 曰足比奇乃山櫻花日並而如是開有者甚戀目夜裳。

花の下ひもうちとくる

古今六帖第五服部、貫之 曰山里にひとめ見しよりわがこふる花の下ひもいかにとくらん。

新古今集第一春歌上、題不知、讀人不知 曰ふしておもひおきてながむる春雨に花の下紐いかにとくらむ。

山風の吹くにまかする花の枝

古今集第二春歌下、ひえにのぼりてかへりまうできてよめる、貫之 曰山たかみ見つゝわがこし櫻花風はこゝろにまかすべらなり。

仇なる花とともすればたつ名はづかしやまざくら

古今集第一春歌上、櫻の花の盛りに久しくとはざりけり人の來りける時によみける、讀人しらす 曰仇なりと名にこそたてれ櫻花としにまれなる人も待けり。

第十二 暈 内

ほしゝぎすあれ〜月の、かさのうち、ぬれぬか

同日海西公太和四年閏月乙亥月暈軫復有白暈貫月北暈斗柄三星。

よひ〜ごとの關守も

古今集第十三戀歌三、在原業平朝臣 曰人しれぬわが通路のせきもりはよひ〜ごとにうちもねなむ。

人まつよひの鐘の聲あかぬわかれのとりはものかは

平家物語第五月見の事第二 曰待宵の小侍従と申女房も此御所にぞさぶらははれる抑々此女房を待宵とめされける事は或時御前よりまつよひかへるあしたいづれかははれまされると仰せければ彼女房待宵に更行く鐘の聲きけばあかぬ別のとりは物かはと申たりける故にこそ待宵とはめされけれ。

第十三 相 生

われ見ても、久しくなりぬ、すみよしの、松のふたもと、しげりあひ、れんりのえだを、うちかはし、いもせのみちは、いつとても、かよふ夜ごとの、かさのうへ、とほほとゝぎす、なきつるゝ、

ほする、あどなさを、おもひやつたが、よいわいな、よひ〜ごとの、せきもりも、ゆるさぬからに、うきなかは、ないてうれしき、ひもあれば、わらうてつらき、かり枕、ひとりぬるよは、ふたりがさびし、ほんにしんきな、ことぢやいな、人まつよひの、かねのこゑ、あかぬわかれの、とりはものかは、

暈の内

劉熙釋名第一天曰暈捲也氣在外捲結之也日月俱然。

和名抄第一天部景 曰郭知玄切韻云暈音運此間云日月加左辨色立成云月院。

あれ〜月のかさのうち

漢書第廿六天文志第六 曰漢七年月暈圍參畢七重占曰畢昂間

天街也街北胡也街南中國也昂爲匈奴參爲趙畢爲邊兵是歲高皇帝自將兵擊匈奴至平城爲昌頓單于所圍七日

酒解。

晉書第十二志第二 曰魏文帝黃初四年十一月月暈北斗占曰有大喪放天下。

みじかき夏の、あけちかき、をのへのかねぞ、つげわたる、又とかはせし、なかのいつまで。

相生

古今集序曰高砂住の江の松もあひおひのやうにおほえ男山の昔を思出て女郎花の一時をくねるにも歌をいひてぞなぐさめける。

拾遺集第十神樂、住吉にまうで、安法師 曰天くだるあらひと神のあひ

おひをおもへばひさし住吉の松。

われ見てもひさしくなりぬ住よしの松のふたもと

古今集第十七雜歌上、題不知、讀人しらす 曰我見てもひさしくなりぬ住の江の岸のひめ松幾代へぬらん。

れんりの枝をうちかはし

(白虎通第三封禪 曰德至草木朱草生木連理)

東觀漢記第三孝安皇帝 曰光三年鳳凰集濟南台丞霍穆舍

樹上賜帛各有差衛縣木連理定陵縣木連理潁川上言麒麟

麟白鹿見黃龍見歷城又見諸縣。

晉書第六帝紀第六元帝紀建武元年 曰天地之際既交華夷之情允洽一角之獸連理之木以爲休徵者蓋有百數。



藝文類聚第九十八詳瑞部上曰瑞應圖曰木連理王者德化  
洽八方合爲一家則木連理一本曰不失小民心則生。

第十四 曲水

さかづきを、かずかく水に、ながしては、思ひ  
くくの、うたのさま、心のうちは、いはぬ戀、ゆ  
かしき人は、山吹の、かきのおくなる、あげじと  
み、花のかんばせ、すきびたひ、ねむれるすが  
た、かいだうの、ゆめかうつゝか、わすられぬ、  
こきむらさきの、ふぢのはな、さむるといふは、  
色ならで、さけの手枕、よひながら、おぼろ月夜  
の、かげうすく、ほしもみつよつ、ひかる君、す  
まにみの日の、はらひして、心もころも、はるゝ  
春雨。

曲水

晋書第五十一列傳第廿一曰武帝嘗問摯虞三日曲水之義虞  
對曰漢章帝時平原徐肇以三月初生三女至三日俱亡村

召太眞妃子妃子時卯醉未醒命力士從侍兒扶掖而至妃  
子醉顏殘粧髮亂釵橫不能再拜上皇笑曰此眞海棠睡未  
足耳。

光君須磨に巳の日の祓して

源氏物語須磨卷御月抄十二曰やよひのついたちにいできた  
る巳の日けふなんかくおほすことある人はみそぎし  
給ふべきとなまさかしき人のきこゆれば海づらもゆ  
かしくて出で給ふいとおろそかに軟障ばかりを引め  
ぐらして此國にかよひける陰陽師めしてはらへせさ  
せ給ふ舟にことくしき人形のせてながすを見給ふ  
にもよそへられてしらざりし大海の原にながれ来て  
ひとかたにやはものは悲しきとて給へるさまはれ  
に出ていふよしなく見え給ふ。

巳日のはらへ

後漢書第十六志第四禮儀上、三月 曰是月上巳官民皆絮於東流水  
上曰洗濯祓除去宿垢疾爲大絮絮者言陽氣布暢萬物訖  
出始絮之矣。

人以爲怪乃招携之水濱洗被遂因水以汎觴其義起此帝  
曰必如所談便非好事進誓曰虞小生不足以知臣請言之  
昔周公城洛邑因流水以汎酒故逸詩云羽觴隨波又秦昭  
王以三日置酒河曲見金人奉水心之劍曰令君制有西夏  
乃霸諸侯因此立爲曲水二漢相緣皆爲盛集帝大悅賜哲  
金五十斤。

あけじとみ

源氏物語夕顔卷御月抄第四曰家のかたはらに檜垣といふも  
のあたらしうしてかみははじとみ四五けんばかりあ  
けわたしてすだねなどもいと白う涼しけなるに。

和名抄第十居處部曰節、周禮注云節音部字亦作節覆暖障光  
者也。

すきびたひ

後照念院殿裝束抄群書類從第百十五曰冠透額冠事、六條殿十八  
まで令用給于時。

物具裝束抄群書類從第百十八曰冠透額年少人。

ねむれる姿海棠の

事文類聚後集第卅一海棠部引太眞外傳曰上皇登沈香亭

第十五 花 嬌

たれになびくか、いつしかと、ひもときそむる、  
萩が花、にしきのとこに、おくつゆの、おもひみ  
だれて、秋の夜の、長きよすがら、いたづらに、雲  
の月の、かげふけて、とふにつらさの、まさなる  
とも、しらでやすぐる、秋のかせ、身にしむころ  
は、なれも亦しのびかねてや、さをしかの、ころ  
よりおつる、なみださへ、なほはぎがえに、かゝ  
るらし、とにもかくにも、おもひあまり、下葉も  
今は、いろに出て、こがるとしらば、たちこむ  
る、きりのまがきの、へだてなく、千あきをかけ  
て、紫の、ゆかりわするな、萩が花づま。

花嬌

萬葉集第八太宰部大伴卿 曰吾岳爾棹棹鹿來鳴先芽之花嬌  
問爾來鳴棹鹿。

いつしかと紐ときそむるはぎが花



第六 吾嬬筆譜考證

新千載集第四寛和元年八月十日内裏歌合に同じ心を藤原惟成 曰いつしかも行き  
はや見ん秋の野の花の下紐とけもしぬらん。  
とふにつらさのまさるとも

續古今集第十八雑歌中、建長三年九月十三夜十首 曰ふく風もと  
ふにつらさのまさるかななぐさめかぬる秋の山里。  
下葉も今は色にいで、

古今集第四秋歌上題不知 曰秋はぎの下葉色づく今よりや  
ひとりある人のいねがてにする。  
紫のゆかりわするな

古今集第十七雑歌上題しらす 曰紫のひとと故に武藏野の  
草はみながらあはれとぞ見る。

第十六 夏

あづさゆみ、やよひのそらも、たちかはり、春と  
夏との、かきつばた、むらさきさほふ、ふぢなみ  
の、かけてと名のる、ほととぎす、ゆかりの人  
の、ねざめにも、きくひとこゑは、ゆめならで、  
まぐらのうへの、五月雨、ふるのなかみち、ふり

浦島が子の箱なれや明けてくやしき  
拾遺集第二中歌 曰夏の夜は浦島が子の箱なれやはか  
なく明てくやしかららん。

第十七 子規

なつの夜の、あくるまはやみ、かりそめに、見る  
ほどもなき、月かげを、をしむとすれど、いねが  
ての、枕にかこつ、ほどをさへ、たえてしのべ  
と、おとづれぬ、うしやつらさの、人ならば、う  
らみもはてん、かにかくに、雲るにとほき、まつ  
ち山、心せきやの、里ふくかせに、あめもつそら  
の、さつきやみ、やみはあや瀬の、川船に、うき  
ねしつゝも、きかまほし、かくばかり、まつとは  
なれも、しらひげの、もりの下露くさぐさに、よ  
のみやびをの、あくがれて、きみ待つよはに、か  
はらぬは、たゞひとこゑの、ほととぎす。  
子規

し世の、むかしの人の、袖のかに、花たちばな  
の、風かよふ、のきばすゞしき、ゆふ月の、やど  
れるつゆか、とぶほたる、こがれくして、それか  
とばかり、わすられず、きえぬおもひの、はかな  
けれ。ア、われながら、君をおもへば、うらみつ  
わびつ、浦島が子の、はこなれや、あけてくやし  
き、あけてくやしき、なつのみじか夜。

夏

尚書第一典 曰日永星火以正仲夏（夏の字始めてこ、  
に出でたり）

劉勰釋名第一天 曰夏假也寛假萬物使生長也。

かけてと名のる子規

新撰犬筑波集夏部 曰佛壇にほぞんかけたかほととぎ  
す。

昔の人の袖の香に花橘の風かをる

古今集第三夏歌上題しらす 曰五月待花橘の香をかけば昔の人  
の袖の香ぞする。

禽經曰鶉鴒用子規也啼必北嚮註 爾雅曰鶉周處越間曰  
怨鳥夜啼達旦血漬草木風鳴皆北嚮也。

雲るに遠きまつち山

萬葉集第三雜歌上題 曰亦打山暮越行而廬前乃角太河原

爾獨可毛將宿。

心せきやの里ふく風に

歌枕名寄第廿一武藏 曰關屋里。

いほ崎の住田河原に日は暮ぬ關屋のさとに宿やから  
まし。右住田河にてよめるよし散梅集に見えたり。

雨もつ空の五月やみ

拾遺集第二夏 曰東宮にさぶらひける繪にくらはし山  
にほととぎすとびわたりたる所、藤原實方朝臣、五  
月闇くらはし山の子規おほつかなくも鳴渡るかな。  
やみはあや瀬の河舟にうきねしつゝもきかまほしかく  
ばかりまつとはなれもしらひげの森の下露

本庄雨舍享保十年加藤氏歌撰撰 曰寺島村 白髭杜也。けにぞふりたる

宮居と見えて松吹風も空にきこえあけの玉垣神さび  
て軒の瓦も苔むしたり云々。



綾瀬川といふ所あり、錦藻といふ浮草の浪のうねうねしけりければ小町がまかなくにの歌ぞおもひ出でらる、ついでに及ばぬ事ながらつゞけ侍る、行水の浪おりかゝる綾瀬川河の名しるく見ゆる錦藻、にしき藻といふ浮草は此處にかぎらずいづこの池にも沼にもはゆるちいさき苔のやうなる浮草なり、冬の初より春のなかばまではくれなるに色づきて水の面錦をはれるやうに見ゆれば錦藻といふと田舎人のいへりしぞやさしくおもひ侍る。

唯一聲の子規

古今集第三夏歌、寛平の御時まき、の宮の歌、総貫之 曰夏の夜のふすかとするればほととぎす鳴一聲に明る東雲。

第十八 千箱玉梓

ときはなる、松をひたせる、千とせ河、月もゆふべのしなさだめ、かつらをこの、おもかげゆかし、見そめてそめて、染かゝる、たつた姫とは、うはきばかりの、いろかへ、つゆのまも、わすら

よませ、なほいらますや、ばんせいらく、ちはこのたまづさ奉る、これぞ久しき、みつぎかな。

千箱玉梓

日本紀第十八宣化天皇紀、元年 曰夏五月辛丑朔詔曰食者天下之本也黄金萬貫不可療飢白玉千箱何能救冷。  
中宮亮顯輔家歌合群書類從第百八十四卷、戀十番右雅題 曰戀わびておつる涙の玉ならば千箱の數にぬきもしなまし。

玉梓

萬葉集第二挽歌柿本朝臣八麻呂妻死之後、泣血哀詞作歌二首并短歌 曰黄葉乃過伊去等玉梓之使乃言者梓弓聲爾聞而云々。  
玉勝間第一水藻乃詞 曰又せうそこぶみを水莖といふは玉梓といふと同じくて是もみづくしき木といふことなりそは先上古には人の許へ使をやるには梓木に玉をつけたるをもたせて使のしるしとせしなり玉梓の使と常にいふは此事なりそれよりうつりてせうそこぶみをも同じく玉梓といふ。

桂男のおも影ゆかし

狭衣物語第四下曰空の氣色も猶心盡に見まらせ給

れんぼの、なかくは、いにし驪山の、春のその、ともにながめし、花の色、その言の葉も、いもせどり、めをとのえだと、いひかはしまの、水ももらさぬ、せいしのかずを、筆にちかひし、すみいろの、こいなか、うき名のたねを、まき紙に、ぐちのありたけ、ふみまくら、ふみがやりたや、むろの津のきみへ、きみがなげぶし、なげぶみなげて、くどきぶみ、よごとにかよふ、かみかけてほんにとりなり、よいふうじぶみ、ちよつとこなたへ、かりのふみ、いのりまゐらせ候かしく、文も見ずとは、はしだてのみちよ、みちのきれとて、きれぶみいやよ、ちかひぶみ、いよしごげんと、かいたるは、ほだしのたねか、えんむすびぶみ、もみぢわけつ、しかのふみ、おもひまゐらせ候かしく、とめてうれしき、やまともじ、かへすくも、めでたけれ、君は千代ませ、やち

へるを桂男も同じ心にあはれとや見奉るらむあつけに立臺りたりつる村雲晴れて月影花やかにさし出たるに。

袖中抄第十六さくらえ 曰童蒙抄云月讀男とは桂男也云々此の義につきていはゞ月人男をも桂男といふべきか常に人のおもへるやう月の中に桂の木あり其木の本来に人あり桂男といふといへり。

そめかゝる龍田姫とは

後撰集第七秋歌下題不知誰人しらす 曰みること秋にもなるや龍田姫紅葉そむとや山はてるらん。

いにし驪山のはるのその

長恨歌曲に證す。

其ことのもいもせ鳥

和歌藻鹽草第十時鳥 曰いもせ鳥。

(いもせ鳥は杜鵑の異名なれども此曲の文句のつきは比翼鳥なるべし比翼鳥は長恨歌曲に證す)

めをとの枝

(木連理なるべし是亦長恨歌曲に證せり)



いひかはしまの水ももらさぬ

伊勢物語斷 上之下曰あひ見ては心ひとつをかはしまの水のながれてたえじとぞおもふ。

ふみがやりたや室の津の君へ

舞曲扇林卷上十六番小舞之第一種舞草 曰ふみがやりたや室町すぢへとりやちがへて餘の人にやるな花のかのさまの手にわたせ。

(元祿十七年三月印板落葉集第一古來十六番舞唱歌第二番ふみがやりたや文同)

よいふうじぶみ

大諸禮集第十四筆法門 曰ふみ封する様結び目の上に墨を引くなり是もことごとくしく引きまはすは尾籠也筆のさきにかけていかにもしどけなけに○如是まはすなり。

かりのふみ

漢書第五十四蘇武 曰言太守以下吏民皆白服曰上崩武聞之兩鄉號哭歐血且夕臨數月昭帝即位數年匈奴與漢和親漢求武等匈奴詭言武死後漢使復至匈奴常惠請其

いのりまららせ候かしく

宗五大草紙卷下書札之事 曰女房ぶみの書様云々留所は御心得して申給へとも又御心得して申入れられ候べしともしてあなかしこと留侍るべし。

諸禮當用集卷下平出 曰女中方はかしくと留る事萬にかよふべしさりながら假初の口上書はかしくとなくとも以上と留らるべし。

ふみも見ずとは橋立の道よ

金葉集第九舞部上和泉式部 曰丹後國に侍りける頃都に歌合の方有けるに小式部内侍歌讀にとられて侍りけるを中納言定額局 でおぼすらんなど歌 れてたちけるを引とめてよめる、小式部内侍 曰大江山いくの、道の遠ければまだふみも見

す天の橋立。

むすびぶみ

禮容筆粹第六之文 曰むすびやうは鯉魚の頭に表すと往々の禮書にみえたり表に封目あつて裏にはなし。諸禮當用集卷下文形之 曰豎狀は捻文にも又結文にても人によるべし結狀は捻文より又略なり。

やまと文字

守者與俱得夜見漢使具自陳道教使者謂單于言天子射上林中得雁足有係帛書言武等在某澤中使者大喜如惠語以讓單于單于視左右而驚謝漢使曰武等實在於是李陵置酒賀武曰今足下還歸揚名於匈奴功顯於漢室雖古竹帛所載丹青所畫何以過子卿。

大方便佛報恩經第四總六品 曰爾時善友太子未入大海在宮殿時養一白雁衣被飲食行住坐臥而常共俱爾時夫人往到其所報其雁言太子在時常共汝俱今入大海未還生死未分而我不能得知定實汝今云何不感念太子雁聞是語悲鳴宛轉啼淚滿目報言大夫人欲使求覓太子者不取違命爾時夫人手自作書繫其雁頸其雁音響問太子大海所在身昇虛空飛翔宛轉而去夫人見已心生恃賴今者此雁其必定得我子死活之實消息飛至大海經過周徧求覓不見次第往到利師跋國遙見善友太子在宮殿前其雁歛身擁翅往趣到已悲鳴歡喜太子即取母書頭頂禮敬發封披讀即知父母晝夜悲哭追念太子兩目失明爾時太子即作手書具以上事向父母說復以書繫其雁頸其雁歡喜還波羅奈父母得太子書歡喜踊躍稱善無量。

釋日本紀第一四 曰先師說云漢字傳來我朝者應神天皇御宇也於和字者其起可在神代賦龜卜之術者起自神代所謂此紀一書之說陰陽二神生蛭兒天神以太占而卜之乃卜定時日而降之無文字者豈可成卜哉作者事濫觴可在神代者幽玄而難測伊呂波者弘法大師作之由申傳歟此者自昔傳來之和字於伊呂波爾被作成之起也。

ばんぜいらく

隋書第十五志 曰令樂正白明遠造新聲翺萬歲樂。

羯鼓錄曰諸宮曲 萬載樂。

和名抄第四音樂部、曲調 曰萬歲樂。

舞曲口傳詳書類從第 曰萬歲樂中曲 此者唐二隋煬帝ト申御門ノ作ラセ給タルナリ唐國ニハ賢王ノ世ヲサメ給時鳳凰ト云フ鳥必ズ出來テ賢王萬歲々々ト轉タルヲ樂ニ作り振舞ノ姿ヲ舞ニ作給テ侍ナリ此朝ヘハ誰人渡シタルト云事不見。

絲竹口傳詳書類從第 曰サテ何ニテモソレノトアラバ平調ナラバ萬歲樂最靜ニサハヤカニシトノトヒキ切ヒキ切カキヤウモ靜ニアルベシ。



教訓抄第一公事曰萬歲樂拍子廿中有三帖終帖打三度拍子、或書云我朝用明天皇御作云々、旁非無不審可事也是ハモロコシ隋煬帝ト申御門ノ作ラセ給タルナリ唐國ニハ賢王ノ世ヲ治サセ給時ニ鳳凰ト云鳥必出來テ賢王萬歲々々ト轉ナルヲ轉詞ヲ樂ニ作り振舞姿舞ニ作ラセ給テ侍也此朝ヘハ誰人ノ渡シタルト云事ミエズ。

知足院禪定殿下ノ仰云光近ハヨク此道ニハ至ニケリ萬歲樂ハ興ナキ舞ト覺ユルニ此男ノ舞面白メデタキ物哉ト譽サセ給ヒケル忝キ事ナリ道ニ入ラバカヤウニ蒙仰程ニ好ムベシ今ノ世ニハ有難クコソ侍レ。

拾芥抄上末樂目曰萬歲樂調平。

樂家錄第三十一第三平調曲曰萬歲樂曲、用明天皇御製作也云々、一説古聖王之時鳳凰來儀唱聖王萬歲象其聲製此曲云々、一説隋煬帝令大樂令白明達造新聲所謂萬歲樂藏釣樂七夕樂也云々、一説漢武帝登嵩山時空中有呼萬歲之聲問之無唱之者云々、引通典曰鳥歌萬歲樂舞唐武后所造也當此時宮中養鳥能人言又常稱萬歲

の、花ざくら、さかえさかえん、御代のはる。

東の花

平家物語第十海道くたりの侍従が歌曰いかにせん都の春はをしけれどなれし東の花やちるらん。

よしのよく見し人はいさ。

萬葉集第一天皇幸于吉野宮時御製歌曰淑人乃良跡吉見而好常言師勞

野吉見與良人四來三。

都鳥にこと、ひし昔には似すわたし守

古今集第九種旅歌、在原業平朝臣曰武藏國と下總國との中にある角田川のほとりに到りて都のいと戀しう覺えければしばし川のほとりにおりておもひやればかぎりなく遠くもきにけるかなとおもひわびてながめをるに渡守はや舟にのれ日も暮ぬといひければ舟にのりて渡らんとするに皆人物わびしくて京に思ふ人なくしもあらずるをりに白き鳥のはしと足と赤き川のほとりにあそびけり京には見えぬ鳥なりければ皆人見しらす渡守に是は何鳥ぞと問ひければ是なん都鳥といひけるを聞きてよめる、名にしおはゞいざこと問

故爲樂以象之舞者三人緋大袖並畫鸚鵡冠作鳥像今嶺南有鳥名鸚鵡稍大久養之能言云々。

第十九 東 花

よしのよく見し人はいさ、花はあづまの、すみだ河、よに似ぬはるの、ひかりぞや、みやこ鳥に、こととひし、むかしにはにす、わたしもり、春はいとなく、みなれざほ、さしてつゝみを、ゆきかよふ、人のたもとの、あけみどり、やなぎのいとに、ひかれきて、ながきひぐらし、花のかを、袖にしめては、くみかはし、あそびたはれつ、たをやめの、うたふひとふし、ゆめならば、のこらじそでの、うつりがを、いかにさだめん、さきにはふ、花のたまくら、ゆめならで、かはすもあだの、花のかげ、さすがうれしき、ゆかりにも、むらさきおふる、むさし野の、ひろきめぐみや、あふぐらん、なほ行末も、千せやちよ、長きつゝみ

はん都鳥わがおもふ人はありやなしやと。

第二十 花 鏡

うつればぞ、花のかぐみに、わがすがた、うつる心は、まことのかげよ、おぼろ月よの、わたどのに、人まつかげは、たれやらん、うはのそら吹く、花のかは、こちへとどかぬ、かいま見の、人目せきちの、へだてはいやよ、せめてたのもの、かりのふみ、おくるそのひの、つじうらくに、人くくくの、初ねもうれし、むかふかぐみの、かほよどり、かはらぬちぎり、かたからめ、きみが代の、めぐみもふかき、池水に、すめるかはづも、いはひうた、うたにやはらぐ、人ごゝろ、しづもたときも、おしなべて、花のかぐみの、くもりなき、はるや久しき、はるぞひさしき。

花の鏡

古今集第一春歌上、水のほとりに梅の花のさけりけるをよめる伊勢曰春ごとく流る、



川を花と見てをられぬ水に袖やぬれなん。  
歳をへて花の鏡となる水は散りかゝるをやくもると  
いふらん。

秘傳花鏡序曰客曰唯々既非花癖何不發翁枕秘授我華  
鏡一書以公海内俾人人盡得種植之方咸誦翁爲花仙可  
乎。

朧月夜のわたどのに人待影は誰やらん

源氏物語花宴卷<sup>湖月抄</sup>第八曰夜いたうふけてなん事果てけ  
る上達部各あかれ后春宮かへらせ給ひぬればのどや  
かになりぬるに月いとあかうさし出てをかしきを源  
氏の君ゑひ心地に見過しがたく覺給ひければうへの  
人々もうちやすみてかやうにおもひがけぬ程にもし  
さりぬべきひまもやあると藤壺わたりをわりなう忍  
びて伺ひありけどかたらふべき戸口もさしてければ  
打なけきて猶あらじに弘徽殿のほそどのに立より給  
へれば三の口明たり女御はうへの御局にやがてまう  
のほり給ひにければ人すくななるけはひなり奥の樞  
戸もあきてひと音もせずかやうにて世の中のあやま

ふ鳥は水に我影をうつせば水底の魚見て浮びあがる  
と云々又かほよ鳥は沼にもよめるなり就中此かほよ  
鳥の事二様にいへり但梟のをさなきをいふか此歌  
の體はそなと聞えたりいかゞ従つて前のるぐひの上  
のとよめるは翡翠の様に聞えたるか又云流離はいと  
けなうして顔よし老いては見苦しともいへり。

池水にすめる蛙もいはひ歌

古今序註第一曰又義定ト云人住吉ニ詣タリケル時思  
ハズニウカレ妻ニ相ヌサテ忘ガタカリケレバ又ノ度  
其方ノサマノ人ニ尋ヌルニ知ラヌトナン云ケレバ悲  
シク居タリケル板敷ノ前テ蝦ガハヒトホル跡ヲ見レ  
バ歌ナリキ、住吉ノ海士ノミルメモハヅカシヤタソ  
カレ人ニマタヤトハレン。

第二十一 花 曆

ことぶきを、こゝにのふるは、としをへて、おな  
じさくららの、花のいろを、そめますものは、こゝ  
ろからひらく日かすを、いつむつと、ゆびをり見

ちはするぞかしとおもひてやをらのほりてのぞき給  
ふ人はみなねたるべしいとわかうをかしけなる聲の  
なべての人とは聞えぬ朧月夜に似る物ぞなきと打す  
じてこなたさまにくるものかいとうれしくてふと袖  
をとらへ給ふ女おそろしとおもへる氣色にてあなむ  
くづけこはたそとの給へど何かうとましきとて、深  
き夜のあはれをしるも入月のおほろけならぬ契とぞ  
おもふとてやをらいだきおろして戸はおしたてつ淺  
ましきにあきたるさまいとなつかしうをかしけな  
り。

ひとくくの初音もうれし。

古今集第十九<sup>評語歌題しらす讀人しらす</sup>曰梅の花見にこそきつれ驚の  
ひとくくといとひしもをる。

むかふ鏡のかほよ鳥。

藻鹽草第十<sup>部</sup>曰かほよ鳥、是梟のをさなき時の名也  
但又云世俗にそなといふ鳥と云々、山川のるぐひの  
上のかほよ鳥影見る時ぞ音になれける此歌梟とは  
見えするぐひなどにはいとるぬなり或云そなとい

れば、七ところ、おもひたつ、雲もひとへの、上  
野より、ながめはじめて、淺草や、かをりはふか  
き、おくやまに、そでふりあうて、いろくの、  
すがたはゆきに、隅田川、わたしもりに、ことと  
へば、げにもあづまの、みやこ鳥、言葉のはし  
の、あかなくに、きのふといひ、けふとひぐら  
し、とこしなへに、こゝはかはらぬ、あすか山、  
とりの、かほよの、一むれを、ほうとうとほむる、  
うぐひすに、もとよりうたの、えにしあれば、人  
の心を、やはらぐる、はるのひととき、小金井  
の、河の名さへも、玉なれば、ひかりのどけき、  
そらにつる、みぎはにかめの、御殿山、あふげは  
なほも、たかき屋の、めぐみもみつる、にぎはひ  
の、たみのかすく、千代かけて、よろづよしと  
の、はなごよみ。

花曆

佩文齋韻府第百一<sup>曆</sup>曰程羽文花曆序、花有開落涼



燦不可無曆祕集月令頗與時舛今更輯之以代挈壺之位  
數日記紅誰謂山中無曆日也。

(續說鄂第四十練江程羽文花曆序今字作予字日字作  
白字)

すみ田川渡守に事問へばけにも東の都鳥詞のはしのあ  
かなくに

古今集第九 羅旅歌、在原業平朝臣 曰さるをりに白き鳥のはしと足  
と赤き河のほとりにあそびけり京にはみぬ鳥なりけ  
ればみな人見しらす渡守に是は何鳥ぞと問ひければ  
是なん都鳥といひけるを。

きのふといひけふと日ぐらし。

古今集第六 冬歌、年のほつてに、よめる、春道列御 曰きのふといひけふとくら  
して明日香川ながれてはやき月日なりけり。

春のひと、き小金井の河の名さへも玉なれば光のどけ  
き

東坡先生詩集註第二十二 時序篇 曰春宵一刻直千金花有  
清香月有陰歌管樓臺聲細細鞦韆院落夜沈々。  
たかき屋のめぐみもみつるにぎはひの民のかすく千

も、しらぬひの、つくしつくせる、こゝろのうち  
を、それとさとれど、うちつけに、なんといはま  
の、うつせがひ、よその見るめも、なかくくに、  
なかだちいらぬ、にひ枕、ぬれぬうちこそ、つゆ  
をもいとへ、おもへばふしぎの、えにしぞと、な  
ごりはつきぬ、月日貝、かひあるけふの、玉手  
箱、たづさへいづれば、悠然と、浪のつとみぞ、  
きこゆなる、えだはふりても、いろかへぬ、松か  
せは、千秋のこゑ、としもやうくく、くれたけの、  
いくよかふべき、長生殿、おいせぬかどに、たち  
かへる、春をかぞふる、さざれいしの、いはほと  
なりて、こけのむすまで。

蓬萊

山海經第十二 海内北經 曰蓬萊山在海中 上有仙人宮室皆以金玉爲之  
鳥獸盡白晝之如雲在渤海中  
也

此のとはうべもとみけりさき草のみつばよつばの  
古今集序曰六つにはいはひ歌、此のとはうべもとみ

代かけて

新古今集第七 賀歌、賀物ゆるされて國とめ  
るを御覽じて、仁徳天皇御製 曰高き屋にのほり  
て見ればけぶりたつ民のかまどはにぎはひにけり。

第二十二 蓬 萊

このとは、むべもとみけり、さきくさの、三つ  
ば四つばの、いつまでも、かはらぬはるの、ひな  
づるに、色をならぶる、しらうめの、にほひもこ  
るも、のどかなる、夏をむねなる、いづみのほと  
り、ををひくかめに、うらしまが、むかしがたり  
の、いとわかくと、つりのでたちの、人がら  
は、雲ゐにまがふ、おきのかた、あらおもしろ  
の、青海波と、酔へるがごとく、たゆたうて、あ  
ゆむともなく、ゆくともなく、いたる所は、ほう  
らいきう、こがねをのべ、玉をしく、ことなるた  
つの、みやこにも、戀となさけは、めにたつなみ  
の、おとにきこえし、ひめはまだ、いひよること

けりさき草のみつばよつばにとのづくりせりといへ  
るなるべし。

夏をむねなる泉のほとり

徒然草 諸抄大成 第六曰家の造やうは夏をむねとすべし冬  
はいかなる所にもすまるあつき頃わろきすまひはた  
へがたき事なり。

尾をひく龜に。

莊子第六 秋水 曰吾聞楚有神龜死已三千歲矣王巾笥而  
藏之廟堂之上此龜者寧其死爲留骨而貴乎寧其生而曳  
尾於塗中乎二大夫曰寧生而曳尾塗中莊子曰往矣吾將  
曳尾於塗中。

浦島が昔がたりの

日本紀第十四 雄略天皇二十二年 曰秋七月丹波國餘社郡管川人水  
江浦島子乘舟而釣遂得大龜便化爲女於是浦島子感以  
爲婦相逐入海到蓬萊山歷觀仙衆語在別卷。

いたる所は蓬萊宮

史記第廿八 封禪書 曰蓬萊方丈瀛州此三神者其傳在渤海  
中去人不遠患且至則船風引而去蓋嘗有至者諸僊人及



不死之藥皆在焉其物禽獸盡白而黃金銀爲宮闕未至望之如雲及到三神山反居水下臨之風輒引去終莫能至云。

しらぬ火のつくしつくせる

萬葉集第三 沙彌彌誓詠 歌一首 曰白縫筑紫乃綿者身著而未者伎禰杼暖所見。

日本紀第七 景行天皇 十八年 曰五月壬辰朔從葦北發船到火國於是日没也夜冥不知著岸遙視火光天皇詔挾抄者曰直指火處因指火往之即得著岸天皇問其火光處曰何謂邑也國人對曰是八代縣豐村亦尋其火是誰人之火也然不得主茲知非人火故名其國曰火國。

なんといはまのうつせ貝  
萬葉集第十一 器物歌 三百二首 曰住吉之濱爾緣云打背貝實無言以余將戀八方。

幾代かふべき長生殿老いせぬ門に立かへる

和漢朗詠集 集第十萬年 祝部 天子 保胤 曰長生殿裏春秋富不老門前日月遲。

長生殿

らし、いともかしこき、人の世に、ふしもすぐなる、竹取の、おきながむすめは、よいむすめ、みがきたてたる、かつらのまゆに、かははてりそふ、秋の夜の、月にかこちて、ふるさとを、戀しがるやつ、したふやつ、やつとやつとを、ゆびをり見れば、二八十六で、ふみ玉づさを、かりがもてくる、雲より、ちらと見せたは、冬立そらに、ふりくるゆきのはだじまん、これ見よがしに、三保の松、はごろもといふ、なぞかけた、あまつ乙女は、うはきかあだか、をそこひでりか、このとしつきを、しづがふせやに、かりまくら、いともくりそろ、はたをりくゝに、霓裳羽衣の、曲をなし、あづまあそびの、するがまひ、あめにうるほふ、花の袖、かへすたもとに、充滿の、寶をあまねく、よにふらしほどこしたまふ、いつくしみつきぬその名は、ほうらいの、やままたこ、

唐會要第三十曰華清宮天寶元年十月造長生殿名爲集靈臺以祀神。

不老門

北山抄第五 大嘗會 御事 曰御前次第司在美福門御後在豐樂院不老門下。

江家次第第十五 踐祥下 大嘗會條 曰出光範門入自豐樂院不老門御清署堂。

大内裏圖考證第四之下曰不老門 年中行事後附不諸圖、古 老門假名ヲラウ 本拾芥抄曰不老門北面謂之北面外大門一門也無額五間戸三間。

さざれ石のいはほとなりて苔のむすまで

古今集第七 賀歌題しらす 讀人しらす 曰わが君は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりて苔のむすまで。

第二十三 芙蓉峯

ましろなる、高嶽もはるは、さくら花、さくや姫とは、神代のむかし、かみよも花の、いろざかり、花のすがたの、いとらし、しんぞ、いと

に、ふじのねの、あふぎのすその、するひろき、みくにのかなめと、しゆくしけり。

芙蓉峯

玉山集第五 五言絶句 望芙蓉峰 曰帝掬崑崙雪置之扶桑東突兀五千仞芙蓉挿碧空。

富士百詠 延寶丙辰印本 加藤子明詠 曰一朶千秋白雪重銀河瀉出玉芙蓉有人若是論風土先看天工在土峯。

徂徠集第三 七言律 八十一首之二 望峯 曰何物芙蓉落日寒關中霽迥綵雲端青天一柱崢嶸出白雪千秋突兀看誰指仙衣懸縹緲自疑玉女剖琅玕于今石跡山陰地喚取驪駒問大丹

豐原王馬跡石實在山。 陰昔年使使中所觀。

ましろなる高根も春は櫻花  
萬葉集第三 山部宿禰赤人望不 盡山歌一首并短歌 曰田兒之浦從打出而見者眞白衣不盡能高嶺爾雪波零家留。

さくや姫とは神代の昔  
日本紀第二 神代 下 曰時彼國有美人名曰鹿葦津姬 亦名神吾 名木花之 開耶姬

竹取の翁のむすめ







播磨八景

萬葉仙覺抄第十五引播磨風土記曰萩原里土中有井所以名萩原者息長帶日賣命韓國還上之時御船宿於此村一夜之間生萩根高一丈許仍名萩原即關御井故云針間井。

夢溪筆談第十七部書畫曰度支員外郎宋迪工畫尤善爲平遠山水其得意者有平沙雁落遠浦歸帆山市晴嵐江天暮雪洞庭秋月瀟湘夜雨煙寺晚鐘漁村落照謂之八景好事者多傳之。

山鳥のをのへの鐘

千載集第六冬歌 堀川院の御時百首の歌奉 ける時よめる 前中納言匡房曰高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜やおくらむ。

むつまし月のなかくくに

清輔興義抄上之末物異名 第廿四曰正月、たかきいやしきゆききたるが故にむつび月といへるを誤れるなり。

下學集上之一時節門 第二曰陸月正月也陸或作陸新春親類 相依櫻樂遊宴故云陸月也

おのれを名のる子規

拾遺集第十六雜詩 雜詩 雜詩曰足引の山子規さとなれて黄

和漢三才圖會第七十七國語曰增位山隨願寺、在飾東郡天台寺領二百八十石。

五風十雨のほどぐくに

尸子第三廣釋曰神農氏治天下欲雨則雨五日爲行雨旬爲穀雨旬五日爲時雨正四時之制萬物咸利故謂之神。

論衡第十七指瑞曰儒者論太平瑞皆言氣物卓異朱草醴

泉翔鳳甘露景星嘉禾蓬蓬莢屈軼之屬又言山出車澤

出舟男女異路市無二價耕者讓畔行者讓路頌白不提挈

關梁不閉道無虜掠風不鳴條雨不破塊五日一風十日一

雨其盛茂者致黃龍騏驎鳳皇。

善見毘婆沙律第十七曰若好王治化五日一雨。

第廿五 那須野

ふくろふし松やうけい柱の枝に鳴きつれ、蘭菊の花にかくる、やこのふしど、むしのこゑさへ、わかちなく、をぎふきおくる、よあらしに、いとものすごき、けしきかな、野べのきつねび、おもひにもゆる、もゆるおもひに、こがれて出し、玉藻

昏時に名のりすらしも。

しかまにかへる帆はちらくくと

萬葉集第七作 羈旅曰印南野者往過奴良之天傳日笠浦波

立見、一云思賀麻江者許藝須疑奴良思。

和名抄第五山陽郡 第六曰播磨國國府在飾磨郡行 程上五日下午三日

ひく人多き手柄山

播州名所記第四曰手柄山一名三輪山といふ櫻おほし今宿より十町 計南なり結城軍亂に葛井主水備後國葛西 十郎が道を爰に遮て討取る故に號く山頭庄屋社あり大己貴を祭る此傍遊瀧登 瀬袖扱地蔵手柄山近年名蝦治氏重居りて公にめさる。刀劍に手柄山麓と銘する 是なり。

三五夜中の新月ちさとの外の人心

白氏文集第十四八月十五日夜禁中 御直對月御元九曰銀臺金闕夕沈々獨宿

相思在翰林三五夜中新月色二千里外故人心渚宮東面

煙波冷浴殿西頭鐘漏深猶恐清光不同見江陵卑濕足秋

陰。

べふの雨きくたまくらに

播州名所記第三曰別府木庄村の西の村にて阿閉庄なり大抵千軒計 といふもの赤松より加古川の邊阿閉庄一木といふ。 所を五十町是を給ふ依て一木を改めて別府といふ。 まする山つもるがうへに積る雪

のまへ、はぎのしたつゆ、いとひなく、月にそむ けて、うらみごと、すぎし雲るに、ありし時、君 がなさけに、いくとせも、ひよくのところに、えん わうの、ふすまかさねて、ちぎりしものを、むね にしばしも、わすればやらで、ひとりなみだに、 かこちぐさ、ぬれてしほる、袖の雨、そもわれこそは、天竺にて、班足太子の、つかのかみ、もろこしにては、褒姒とよばれ、日の本には、鳥羽のみかどに、宮づかへ、玉もの前と、なりたるなり、清涼殿の、御遊の時、月まだ出ぬ、よひのそら、いさごふきこし、かぜもつれ、ともしびきえし、そのときに、わが身より、ひかりをはなちて、てらすにぞ、きみは御惱ごのうらとなり給ふ、きりの一はに、秋たちて、きのふにかはる、あすか河、いまはうきよを、かくれがさ、みやこをあとに、見なしつつ、せきのしら川、よそになし、那須野



の原に、すみなれて、つひにやさきに、はかなくも、かゝるこの身ぞ、つらかりき、殺生石と、世の人に、うとまることゝ、なりはてし、なみだのあられ、をぎすゝき、ふりみだしたる、ありさまに、きえてはかなく、なりにけり。

那須野

和名抄第七下野國第九十三 曰那須郡那須。

ふくろふは松桂の枝になきつれ蘭菊の花にかくる、野狐のふしど

白氏文集第一宅凶 曰長安多大宅列在街西東往々朱門内房廊相對空鼻鳴松桂枝狐藏蘭菊叢蒼苔黃葉地日暮多旋風。

こがれて出し玉藻の前

下學集下之一龍門 曰昔西域有斑足王其夫人惡虐過人勸王取千人之首其後出生支那國爲周幽王后其名曰褒姒滅國惑人死後出生于日本近衛院御宇號玉藻前傷人無極後化成白狐害人惟多時俗欲驅之先追走犬以試其

もろこしにては褒姒とよばれ

史記第四紀本 曰褒姒不好笑幽王爲燧燧大鼓有寇至則舉燧火諸侯悉至至而無寇褒姒乃大笑幽王說之爲數舉燧火其後不信諸侯益亦不至。

桐の一片に秋立ちて

白氏六帖第三門秋 曰一葉落天下知秋。

華嚴經演義抄第七十五曰約相類者如觀一葉落知天下秋見一華開知天下春矣。

きのふにかはるあすか川

古今集第十八雜歌下題しら 曰世の中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞ今日は瀬となる。

今はうき世を隠笠みやこをあとに見なしつゝ、

躬恒家集卷下集第一 曰しはすのつごもりのよなおにを、

鬼すらもみやこのうちと蓑笠をぬぎてやこよひ人に見ゆらむ。

拾遺集第十八雜賀忍びたる人のもとにつかはしける平公誠 曰隠蓑かくれ笠をもえてしがなきたりとひとにしられざるべく。

射騎白狐知之化而成石飛禽走獸當其殺氣者莫不立斃故謂之殺生石于今在下野那須野原也犬追者始于茲矣但聽之古老之口號雖不知本說且載之而已。

ひよくの床にゑんあうの衾

(比翼床といふ事おほく物にみえ侍らず比翼は連理に對し鴛鴦は翡翠に對せり)

王勃詩集卷上春思 曰昭陽殿裏報春歸未央臺上看春暉水精却掛鴛鴦幔雲母斜開翡翠幃。

白氏文集第十二長恨歌 曰鴛鴦瓦冷霜華重翡翠衾寒誰與共。

みんあうのふすま

西京雜記第一曰鴛鴦襦、鴛鴦被、鴛鴦褥。

はんぞく太子の塚の神

仁王般若經卷下護國品 曰昔有天羅國王有一太子欲登王位一名斑足太子爲外道羅陀師受教應取千王頭以祭家神自登其位已得九百九十九王少一王即北行萬里即得一王名普明王其普名王白斑足王言願聽一日飲食沙門頂禮三寶其斑足王許之云々。

第二十六 住吉

一千年のいろは、ゆきのうちに、ふかきねがひも、けふこそは、はるふきぬる、たびごろも、ひもうらゝかに、よものそら、かすみにけりなきのふまで、波まに見えし、あはぢしま、あをきがはらも、おもひやる、げにひろまへの、すがすがし、かたそぎの、ゆきあひのもの、いくかへり、ちぎりやむすぶ、住よしの、松のおもはん、ことのはを、わが身にはづる、しきしまの、みちを守りの、神なれば、四季のながめの、そのうへに、戀はことさら、なんだいがちに、よめたやうでも、よみおほされず、てにはちがひに、心をつくし、たかひもひくいも、あゆみをはこぶ、なか、おしてるや、なにはめの、よしあしとなく、かりそめに、うたふひとふし、みやびなる、わすれがひとの、名はそらごとよ、あうてわかれて、その



のちは、又の花見を、たのしひに、ひかずかぞへて、おもひ出す、わすれぐさとの、名はいつはりよ、しげりてかれて、それから、後の月見を、たのしひに、よはをつみつゝ、思ひ出す、春や秋、そのかみ世にひかる君、ごぐわんはたしの、よそほひの、今にたえせず、おくはなほ、ふかみどりなる、そのなかに、花やもみぢを、ひとゝきに、こきちらしたる、にぎはひは、筆もことばも、およびなき、をりしも月の、いでしほに、つれて吹きくる、松風の、つれてふきくる松風の、かよふはことの、ねがひもみつや、四つのやしろの、御めぐみ、なほいく千代の、かぎりなき、みちのさかえと、祝しけり、く。

住吉

日本紀第一上神代 曰至筑紫日向小戸橘之憶原而被除焉  
 遂將盪滌身所汚乃興言曰上瀨是太疾下瀨是太弱便瀧之中瀨也因以生神號曰八十柱津日神次將孀其柱而生

ん。

松のおもはんことの葉を我身にはづる

源氏物語桐壺卷湖月抄第一 曰命長さのいとつらうおもう給へしらるゝに松のおもはんことだにはづかしうおも給へ侍ればも、しきに行かひ侍らん事はましていとほかりおほくなん。

源氏物語奥入桐壺群書類從第三百十五 曰いかにしてありとしられし

高砂の松のおもはん事もはづかし。

敷島の道をまもりの神なれば

(新後撰集第十神祇歌) 曰神祇の歌の中に、津守國助、

敷島の道守りける神をしも我がかみ垣とおもふ嬉し

さ)

續世繼物語第十敷島のうちぎ左衛門おなじ人の人にしらるばかりの歌よませさせ給へ五年が命にかへむと住吉にまうしたりければ落葉如雨といふ題に 木の葉ちる宿は聞きわく事ぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も と讀みて侍りけるを必是ともおもひよらざりけるにや病のつきていかんと祈などしければ家に侍り

神號曰神直日神次大直日神又沈濯於海底因以生神號曰底津少童命次底筒男命又潜濯於潮中因以生神號曰中津少童命次中筒男命又浮濯於潮上因以生神號曰表筒男命是即住吉大神矣。  
 一千年の色は雪のうちに深き願ひも  
 和漢朗詠集松部第五松部源顯 曰十八公榮霜後露一千年色雪中深。

新古今集第一春歌上題不 曰春といへば霞にけりなきのふまで波間に見えし淡路島山。

きのふまで波間に見えし淡路島

新古今集第一春歌上題不 曰春といへば霞にけりなきのふまで波間に見えし淡路島山。

日本紀第一上神代 曰素戔嗚尊曰是神劍也吾何敢私以安乎乃上獻於天神也然後行覓將婚之處遂到出雲之清地

清地此乃言曰吾心清々之地此今呼此於彼處建宮。  
 新古今集第十九神祇歌 曰夜や寒き衣やうすきかたそぎのゆきあひの間より霜やおくらむ 住吉の御歌とな

かたそぎのゆきあひの霜

ける女に住吉のつきてさる歌よませしはさればえいくまじとのたまひけるにぞひとへに後の世の祈になりけるとなん。

こひはことさら難題がちに

八雲口傳曰難題は一字抄といふ物にしるせり、池水半氷、池水をいかに嵐の吹分けてこほれる程のこほらざるらん、難題をばいかやうにも本歌にすがりて詠ずる事もあり風情のめぐりがたからん事をば證歌をもとめて案じ出すべし。

てにはちがひに心を盡し

萬葉集第一奥書文永三年八月十八日權律師仙覺 曰手爾乎波之字相違等皆以

紺青令點直之也。

耳底記第一曰問手爾葉乃違とは義理の違をいふや、答いはぬなり義理は義理なり此次云手爾葉は公界ものなり又ぞけるこそけれとあながちに至ての上ではなきと聞えたり或人二條の蛸薬師を通りざまに上へや行べし下へや行べしというたるを連歌するものが聞て上へなりとも下へなりともゆきたきやうにおぢ



やあれさりながら手爾葉は公界ものぢやほどになほ  
いて御とほりあれといふなり。

おしてゐるやなには

古事記卷下七 曰於是天皇戀其黒日賣欺太后曰欲見  
淡道島而幸行之時坐淡道島遙望歌曰於志氏流夜那爾  
波能佐岐由伊傳多知氏和賀久邇美禮婆阿波志摩淤能  
碁呂志摩阿遲摩佐能志麻母美由佐氣都志摩美由乃自  
其島傳而幸行吉備國。

わすれ貝との名はそらごとよ

萬葉集第一曰大伴乃美津能濱爾有忘貝家爾有妹乎忘  
而念哉右一首身  
入部王

わすれ草との名はいつはりよ

古今集第二十貫 曰道しらばつみにもゆかむ住の江の  
岸におふてふ戀忘草。

そのかみ世に光君御願はたしの

源氏物語落標卷湖月抄  
第十四 曰其秋住吉に詣給ひ願どもはた  
し給ふべければいかめしき御ありきて世の中ゆす  
りて上達部殿上人我もくとつかうまつり給ふ。

ころがら、和光のかけに、かたしきの、花のまく  
らに、ゆめむすぶ、えにしはしらぬ、みちしば  
の、つゆとみだれん、かるかやの、關もる人も、  
心せよ、かみもなさはふかさよの、やみにもし  
るきうめがか、そも此の花は、はんばく萬木に、さきがけ  
して、かばかりの、かたちいろいろかの、花なけれ  
ば、おのづから、御神もめでさせ給ひ、花もま  
た、心ありけり、とびかよひ、あるじわすれぬ、  
いさをしを、しる人ぞしる、ことのはの、しげき  
はやしに、とりそへて、きみがちとせを、まもる  
なるく、うめのにほひや、あめにみつらむ。

千里梅

新芳隆天錫雜詩妙選彙全集曰天滿宮、無常說法現神  
通千里飛梅一夜松萬事夢醒雲吐月觀音寺裏一聲鐘。

ふかせてしがな家の風

拾遺集第八雜上  
菅原の大臣かうふりし  
侍りける夜母の誦み侍りける 曰ひさ方の月の桂も  
折るばかり家の風をもふかせてしがな。

四つの社の御めぐみ

延喜式第九神祇九  
神名上 曰住吉坐神社四次並名神大  
次相嘗  
新嘗 廿二社註  
式神書類從  
第廿二 曰住吉社延喜神祇式云攝津國住吉郡住吉坐  
神社四坐日本書紀云伊弉諾尊所生其第一 底筒男命第二 中  
筒男命第三 表筒男命是即住吉大明神此三神並  
第四 神功皇后  
鎮座以上四  
所也

第廿七 千里梅

とことほに、ふかせてしがな、いへのかせ、世を  
へてあふぐふみのみち、ひろきめぐみを、おもふ  
その、ころづくしや、ちさとまで、にほひおこ  
せし、うめの花、心をそむる、ひとえだを、たゞ  
そのまゝの、手向にて、あまみ天満つがみの、まに神  
と、ゆくての袖も、かをるまで、思ひをはこぶ、  
おもひ河、水のそこるも、ふかみどり、むすぶて  
にふく、春風は、けふささらぎの、神城わざに、よ  
るのつゞみの、すみのぼる、しんによの月も、と

ちさとまで句ひおこせし梅の花

拾遺集第十六雜春  
ながされ侍りける時家の  
梅の花を見侍りて  
贈太政大臣 曰東風ふかばに

ほひおこせよ梅の花あるじなして春をわするな。

大鏡第二左大臣時  
平公傳 曰帝の御おきてきはめてあやにくに

おはしませば此御子どもを同じ寺にだに遣はさわり

けりかたぐいいと悲しくおほして御前の梅の花を

御覽じて、東風ふかば句ひおこせよ梅の花あるじな

して春な忘れそ。

おもひをはこぶ思川

後撰集第九戀歌一  
まかる所しらせ侍りける  
又あひ知りて侍りける  
男の許より日頭尋わびて  
うせにたるとなん思ひつるといへり 曰思川絶すながる、水の沫のうたかた人にあは

できえめや。

和光の影

老子道德經卷上第四 曰和其光同其塵。

大方便佛報恩經第二品對治 曰雖與衆生和光塵俗出内財

産生業息利終不爲惡利益衆生。

かたしきの花の枕に夢結ぶ

龍城錄道師雜傳  
下正統  
第廿六 曰隋開皇中趙師雄遷羅浮一日天寒

龍城錄道師雜傳  
下正統  
第廿六 曰隋開皇中趙師雄遷羅浮一日天寒



日暮在醉醒間因憇僕車於松林間酒肆傍舍見一女人淡粧素服出逐師雄時已昏黑殘雪對月色微明師雄喜之與之語但覺芳香襲人語言極清麗因與之扣酒家門得數杯相與飲少頃有一綠衣童來笑歌戲舞亦自可觀頃醉寢師雄亦惺然但覺風寒相襲久之時東方已白師雄起視乃在大梅花樹下有翠羽啾嘈相須月落參橫但惆悵而爾。かるかやの關もる人も心せよ

新古今集第十八雜歌下道道曰かるかやの關もりにのみ見えつるは人もゆるさぬ道べなりけり。やみにもしるき梅が香

古今集第一春歌上くらぶ山に曰梅の花にほふ春べはくらぶ山關にこゆれどしるくぞ有ける。

そもこの花は萬木に魁して

群芳譜第一梅部周之曰梅公之靈生自羅浮派分廣嶺形如枯木稜々山澤之臞膚若凝脂凜々氷霜之操春魁占百花頭上歲寒居三友圖中。

しる人ぞしることの葉の  
古今集第一春歌上梅の花を折て曰君ならで誰にか見せん

も、山の、やまの岩根を、とめておつる、千すぢ百すぢ、さほひめの、手びきの糸の、たきなくば、手折りてゆかん、入相の、かねよりさきに、春がすみ、たちなかくしそ、風は吹くとも。

櫻狩

拾遺集第一春題しらす曰櫻狩雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の陰にかくれむ。

のどかなるころもきさらぎおしなべて  
草菴集第一春歌上二曰佐保姫のころもきさらぎ名もしるく霞にさゆる春の山風。

柳の糸の淺翠春の錦かあやなくも

古今集第一春歌上花盛に京を見や曰見わたせば柳さくらをこきまぜてみやこぞ春の錦なりける。

初花車めぐる日のながえつらねてみずもあらずすみもせぬ人や花の友

古今集第十一戀歌一右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりけるかはしける見ずもあらず見もせぬ人のこひしくはあや

梅の花色をも香をもしる人ぞしる。

第二十八 櫻狩

のどかなる、ころもきさらぎ、おしなべて、見わたす山も、うちけふり、柳のいと、あさみどり、春のにしきか、あやなくも、みやこにしらぬ、しら雲の、たてるやするべ、さくらがり、人の心も、あこがる、そらを見すて、こしぢには、待らんものを、ゆくかりの、かをるく、つばさは雲にきえ、こゑはあはれに、きこゆなり、ゆくへしたひて、たちとまり、なごりはしばし、わすれねど、初花ぐるま、めぐるひの、ながえつらねて、見ずもあらず、見もせぬ人や花の友、しるもしらぬも、花のかげ、あひやどりして、すがのねの、長き春ひも、いたづらに、ひかすすごして、花衣、なれしたもとも、かにそみて、野べも山べも、花ゆるるに、いたらぬくまは、なけれど

なくけふやながめくらさむ。

佐保姫の手引の糸の

詞花集第一春天徳四年内裏歌合に曰佐保姫の糸をめかくる柳をよめる平兼盛曰佐保姫の糸をめかくる青柳をふきなみだしそ春の山風。

第二十九 江島曲

春すぎて、いまぞはじめの、なつごころも、かるきたもとがうらかぜに、しなどのおひて、そよくと、福壽圓滿、かぎりなき、ちかひのうみの、それならで、ひかたとなれば、いとやすく、あゆみをはこぶ、江のしまの、繪にも、及ばぬ、ながめかな、水は山のかげをふくみ、山は水のこゝろにまかす、神仙のいはや、名にきこえたる、蓬萊洞、そばだついはね、がゞとして、すいえんしんによの、なみのこゑ、心もすめるをりからに、あまのこどもの、うちむれて、そなれこうたも、かひづくし、君がすがたを、見そめてそめて、ひくそで



がひを、ふりはらふ、こひはあはびの、かた思ひ、あだしあだなみ、さくら貝、梅の花がひ、その身はすいな、すいなすがひはをこの心、こちはひめがひ、ひとすぢな、女心は、さうぢやないわいな、いつかあふせの、とこぶしに、あうてはなれぬ、はまぐりの、その月日貝、まてがひと、いふをたのみの、いもせがひ、うたふひとふし、こひのうみ、かのふかさほの、あくりようも、たへなる天女の、しんとくに、たちまち一ねん、發起して、ながくちかひを、たつの口、むかしのあとをとどめける、いく千代も、つぎせじつさじ、このしまの、いそ山松をふくかぜ、いはねによする、なみまでも、さながら夏風樂、せいがい波を、奏すなり、ことはりなれや、名にしおふ、めうおんぼさつの、しらべのいと、ながくつたへて、富貴自在壽命長久繁榮を、まもりせたまふ、御神

の、ひろきめぐみぞ、ありがたき、ひろきめぐみぞ、ありがたき。

江島曲

東鑑第二元永曰四月五日乙巳武衛令出腰越趣江島給足利冠者北條殿仁田冠者畠山次郎下河邊庄司同四郎結城七郎上總權介足立右馬允土肥次郎宇佐美平次佐々木太郎同三郎和田小太郎三浦十郎佐野太郎等御共是高雄文學上人爲祈武衛御願奉勸請大辯才天於此島始行供養法之間故以令監臨給密議此事爲調伏鎮守府將軍藤原秀衡也云々今日即立鳥居其後令還給。

宗牧東國紀行詳書類從第 三百四十曰江島も程なし天女住給ふ勝地ことさらあすは亥日なれば結縁すべしとて駒なべていそぐに潮時さへ程よく詣たり胎金兩部の石窟凡見すまじく社壇近く荒浪打よせて岩の雫絲竹をこらす音なひ長夜の眠もさめぬべし御縁起の趣天神あまくだり地神あらはれて作出せる島とぞ。

本朝神社考下之六曰江島一作櫻島北條四郎平時政詣榎島祈子孫蕃榮之事三七日夜一人美婦綠衣朱袴忽來告

金光明最勝王經第七天女品曰或在山巖深險處或居坎窟及河邊或在太樹諸叢林天女多依此中住。

名に聞えたるほうらいとう

堯惠法印北國紀行詳書類從第 三百三十六曰江島へ詣侍り西の方の渚近く下りてはるかなる岩屋あり内に兩界の垂跡功德天まします則こゝをも蓬萊洞といへる深秘ありときこゆ。

するえんしんによの波の聲

大乘起信論曰心眞如者即是一法界大總相法門體所謂心性不生不滅一切諸法唯依妄念而有差別若離心念則無一切境界之相。

同曰如大海水因風波動水相風相不相捨離而水非動性若風止滅動相則滅濕性不壞。

ひく袖貝をふりはらふ

西行法師家集第四曰浪洗ふ衣のうらの袖貝を汀に風のたゝみおこな。

戀はあはびのかたおもひ

萬葉集第十一寄物陳思歌 三百二首曰伊勢乃白水郎之朝魚夕菜爾

時政曰汝後胤必執國權若其無道七世有失言已而還時政驚怪見之大蛇長可二十丈入海中獲其所遺三鱗鱗甚大取著之旗所謂北條家三鱗形紋是也。

しなどのおひて

日本紀第一神代上曰一書曰伊弉諾尊與伊弉册尊共生大八州國然後伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉乃吹撥之氣化成神號曰級長戸邊命亦曰級長津彥神是風神也。

ふくじゆゑんまん

金光明最勝王經第七天女品曰於現世中增益壽命資身之具悉令圓滿。

ちかひの海もそれならで

華嚴經第四世主妙品 第一之四曰復次淨喜境界身衆神得憶佛往昔誓願海解脫門。

水は山の影をふくみ山は水の心にかかす

本朝文粹第八晚秋遊淨和院同賦波 動水中山 源順曰水銜山影山任波心底深則山又深波動則山又動。

しんせんのはや



潜云鰻貝之獨念荷指天。

あだし仇浪櫻貝

西行法師家集第四待りしに人に代りて右曰風ふけば花さ

浪のおるたびに櫻かひあるみしま江の浦。

梅の花貝そのみはすいな

夫木抄第廿七貝部 梅花貝 人のもとより貝をこひ曰春風に浪

やおりけん陸奥の籬の島の梅の花貝。

すいな酢貝はをこの心

貝盡浦之錦卷上曰酢介、曆也是螺の類の介の曆也黒

きあり白くされたるあり皿に酸を入れはなてば走る

諸方に甚多しもろこしには得がたしといへり本草に

云郎君子相思子是也。

こちは姫貝ひとすぢな

貝盡浦之錦卷上曰姫簾和歌浦の名百貝 蛤類、歌仙の中に

入簾貝はあみめあり横に簾目はすぢ高くあり此姫簾

はすぢなく唯もやうにすぢの如くなる物ありて小介

なりひかりよくやさしき介なり。

いつかあふ瀬のとこぶしに

せそなへて有物をうつし人にてわがひとりぬる、是

はめをとこなり唯をんなをとこといふ事に侍りうつ

し人とは萬葉に現人とかけりうつし心などいふも現

意とかけり又貝にはめ貝を貝といふ事のあればかく

よめり。

源氏物語奥入夕露 無書類 從第三百十五曰貝すらもいもせはなべてあ

る物をうつしびとにてわがひとりぬる。

彼のふかざはの悪龍もたへなる天女の神徳に

新編鎌倉志第六江島曰景行天皇ノ御宇ニ龍の暴惡熾

也安康天皇ノ御宇ニ龍鬼アリ圓大臣ニ託シテ暴惡ヲ

ナス是人ニ託シテ煩ハシムル始也武烈天皇ノ御宇ニ

龍鬼又金村大臣ニ託シテ惱マス此ノ時五頭龍始テ津

村ノ湊ニ出入シテ人ノ兒ヲ喰フ時ニ長者アリ子十六

人有ケルニ皆龍ノ爲ニ呑マレヌ西ノ里ニ埋ム長者ガ

塚ト云フ欽明天皇十三壬申年四月十二日ヨリ廿三日

ニ至テ大地震動シテ天女雲上ニアラハル其後海上ニ

忽一島ヲナセリ是ヲ江島ト云フ十二ノ鷗島ノ上ニ

降ル故ニ鷗島來島トモ云フ此島ノ上ニ天女降居給へ

和漢三才圖會第四十七介貝部曰其子貝寸計者名止古布

志爲醃名布久太米。

あうてはなれぬ蛤の

和名抄第十九貝部曰兼名苑云蚌蛤放甲二蓄蚌或作一名含

漿。

散木奇歌集第一春部三月 群書類 從第二五十四上曰家綱がもとより蛤をおこすと

て侍りける山吹をかざしにさせば蛤を心ざしやへ山吹と思ふよ

井手のあたりの物と見るかなかへしりはまぐりかへしあはれとぞ見る。

其月日貝

貝盡浦之錦卷上曰月日介續表録異 蛤類、うすく丸し片

方赤く片方白し因て月日の名目あり大なるものおほ

く小さきもの少し和歌にて賣れども此浦にはなし他

所より來るよし

また貝といふをたのみの。

和名抄第十九貝部曰馬蛤、唐韻云蚌音理辨色立蚌屬也

本草云馬刀一名馬蛤和名。

いもせ貝

清輔與義抄中之中後撰集卷第 四十四 雜類曰古歌云かひすらもいも

り遂ニ惡龍ト夫婦ニナレリ。

たちまち一念發起して。

華嚴經第廿三兜率宮中偈 禮品第廿四曰若有智慧人一念發道心必成

無上尊慎莫生疑惑。

和風樂。

和名抄第四音樂部 曲調 類 雙調曲曰和風樂。

體源抄第二本曰和風樂又名弄春 樂舞總畢但光時記云尾張濱主國

王ノ御前ニシテ和風樂ヲ舞ヒ歌ヲ詠ズルコトアリ庭

ニ錦ヲ敷キ身ニ五色ノ玉ヲ飾テ舞之庭ニ玉コボレ落

ト云々。

又云深草ノ天皇ハ御心聰明ニオハシマス管絃ノ道ヲ

好ミ給テ常ニ御遊ヲモテ業トス又弓射方殊ニ勝レ

給ヘリ又醫術ヲ好給フ又佛法ヲ崇メテ僧ヲ歸依シ

年始ニハ一年懺悔ニ五佛名行給フ此事始レリ而此天

皇ノ御時ニゾ内外ノ道ヲ習傳セシム爲ニ人ヲ撰テ

唐へ遣事度々也衣服夏冬モワカザリケルヲ此御時

夏冬ノ衣服ヲ織出サセ給ヒケル其中ニ管絃歌舞殊ニ

好給ヒケル其道ノ人ヲバ勸ニ思食ケル爰ニ唐ノ舞



人トシテ外從五位下尾張濱主ト云モノアリケリ年來  
其道ニ付テ召仕ヒケル間年既ニ百十五歳ニ至而間々  
濱主内ニ參而帝王ノ御前ニテ和風長壽樂ト云フ舞ヲ  
舞フ年老テ起居スルニタヘズシカレドモ手ヲカナデ  
足ヲ踏若キ人ノ如シ是ヲ見ルニ帝王ヨリ始奉テ皆感  
ジホメ申ス事限ナシ濱主舞畢テ和歌ヲ讀テ奏ス春鶯  
轉ノ所ニアル歌也サテハ和風樂トハ春鶯轉ノ異名歟  
仍注之。

或記云此曲ハ春ノ曼陀羅會ノ爲ニ延曆寺僧淨藏ガ所  
作也ト此事不審也淨藏ハ寬平三年辛亥歳ニ生ゼリ時  
代多ク違ヘリ僻事也ト覺エタリ濱主和風長壽樂ヲバ  
作レル也舞師船木望眞舞ヲ作ル。

(續日本後紀第十五 承和十二年正月乙卯) 曰是日外從五位下尾張  
連濱主於龍尾道上舞和風長壽樂觀者以千數初謂鮎背  
之老不能起居及于垂袖赴曲宛如少年四座僉曰近代未  
有如此者濱主本是俗人也時年一百十三自作此舞上表  
請舞長壽樂表中載和歌其詞曰那那都義乃美爾爾萬和  
倍留毛毛知萬利止遠乃於支奈能萬飛多天萬爾流。

舞曲口傳 詳續後紀 曰青海波ハ龍宮樂ナリ裝束ノ色青  
白波ニ千鳥ヲ文ニ縫物ニシ侍リ羅路婆羅門聞之傳舞  
曲云々本ハ平調曲也。

拾芥抄上末 録曰 青海波 録曰。

樂家錄第三十一 録曰 青海波曲、龍宮樂也昔天竺彼舞  
儀浮青海之上亦波下有樂音婆羅門聞之識得之復漢帝  
都見舞形傳舞云々本平調曲也而承和帝御時依勅遷于  
盤涉調云々一說樂者和爾部大田麻呂作之 一本當世乙魚舞  
者大納言良峯安世卿作之詠者小野篁作之云々

千載集第七 雜別歌 源惟盛とし碩侍るものにて筆のことなど歌へ侍りけ  
るに着海波の歌曲のことちたつる事教へ侍りて其よしを 曰をしへおく  
かたみを深く忍ばなん身は青海の波にながれぬ。

めうおん菩薩のしらべの糸。  
法華經第七 要解 妙音菩薩 曰妙音菩薩於萬二千歲以十萬伎  
樂供養雲雷音王佛并奉上八萬四千七寶鉢以是因緣果  
報今生淨華宿王智佛國有是神力。

めうおん天女。  
大日經疏第五曰北置薩囉薩伐底譯云妙音樂天或曰辯

同日丁巳天皇召尾張濱主於清涼殿前令長壽樂舞畢濱  
主即奏和歌曰於岐那度天和飛夜波遠良無久左母支毛  
散可由留登岐爾伊天豆萬毗天牟天皇賞歎左右垂淚賜  
御衣一襲令罷退)

青海波を奏すなり  
和名抄第四 音樂部曲調 類聚抄調曲 曰青海波 有。  
源氏物語紅葉賀卷曰源氏の中將は青海波をまひ給  
ふ。

河海抄第四 紅葉 賀 曰南宮譜云此曲承和御時大納言良峯  
安世朝臣奉勅命作此舞時依勅改盤涉調但詠小野篁朝  
臣作。

龍鳴抄卷下 詳書類從第 三百四十二 曰青海波 せが。  
教訓抄第三 中曲等廿 一之七 曰青海波ハ龍宮ノ樂ナリ昔天竺ニ  
彼舞儀青海ノ波ノ上ニウカム浪下ニ樂音アリ羅路波  
羅門聞之傳之漢ノ帝都見之傳舞曲云々此曲昔者平調  
樂也而承和天皇御時此朝ニシテ依勅被遷盤涉調曲舞  
者大納言良峯安世卿之作樂者和爾部大田麻呂作 并乙魚  
也 詠者小野篁所作一説

才天次北并置其妃。  
同第十七曰妙音是天名也金光明云大辯天女大辯謂后  
也我出音勝百千梵聲故得名也。

谷響集第六 天妙音 曰客問普聞妙音天即辯才天也此說出  
何處答大日經疏五云薩囉薩伐底譯云妙音樂天或曰辯  
才天次北并置其妃、又十七云妙音是天名也金光明云  
大辯天女大辯謂后也、問依第五釋夫主名辯才天依第  
十七后名大辯天女義耶、答大旨然四卷金光明名大辯  
天女而十卷金光明最勝王經名大辯才天女今若會同之  
者夫主名辯才天后名大辯天女亦名辯才天女矣。

第三十 紀路與四季段

山寺のヤ春のゆふぐれ、きて見れば、入あひのか  
ねに、花ぞちりける、ちればこそ、いとどさくら  
は、めでたけれ、よしやちらでも、あだしよと、  
花によそへし、くちずさみ、それをてほんに、う  
ぐひすが、うたをうたへば、ことひく鳥の、こゑ  
にあはせて、つゞみ草チ、チツチ、タンボ、手をつく



ぐし、つぼすみれ、つゝし山吹いろくゝの花も  
いつしか、夏山の、青葉をわけて、初音めづら  
し、時鳥、雲のよそにこひしたふ、身は卵の花  
の、しらむまで、ねずにまつのを、なぶりにくる  
か、まきのいた戸を、ほとくくと、たゝくくひな  
の、だましくさつたがエ、しんぞつらにくや、に  
くいかあいの、むつごとを、誰にもらして、名は  
たち花の、かをりほのめく、うす衣、たもとすし  
き、秋風に、まねくすゝきは、わかむらさきの、  
はぎにそをとて、こぼるゝつゆの、つゆのよすが  
を、しのびね、松むし鈴虫、きりくゝす、きりは  
たりてふ、きりのまを、わけこえきつる、初かり  
の、つばさにかけて、おくるふみ、見よかしゝ、  
もみぢばも、いろのものなかの、しぐれにぬれて、  
たつたの河に、ながれの身、こひでやせくまい、  
うき世はくるま、めぐる月日も ふるやふるふる、  
ゆきもしもも、あられもサきえてたまられぬ、諸

行無常の、ことわりを、つげてやかねも、ひゞく  
らむ。

紀路奥四季段

萬葉集第一 雜歌 越勢能山時 阿閉皇女御作歌 曰此也是能倭爾四手者我戀

流木路爾有云名二負勢能山。

山寺の春の夕暮來て見れば

新古今集第二 春歌下山里にまかりてよ 能因法師 曰山寺の春の夕ぐれ

來て見れば入相の鐘に花ぞちりける。

ちればこそいと櫻はめでたけれ

古今集第二 春歌下題知ら 予讀入しらす 曰のこりなくちるぞめでたき櫻

花ありて世の中果のうければ。

鶯が歌をうたへば

古今集序曰花になく鶯水にすむ蛙の聲をきけばいき

としいけるものいづれか歌をよまさりける。

ことひく鳥の聲にあはせて

安多物語卷上 照靈姫 寛永十七 庚辰年二月吉辰寫 曰是より北にあたりて一

の山あり木立故ありてゆほびかなる所にてりうそ君

とて毛色もかはり此世にはにけなき程の姫宮おはし

ますかたちをほめに詞たらささひづり給ふ御聲な  
どは頻伽かひ子に在て聲衆鳥にすぐれたりといはれ  
し鳥もはぢらひぬべく聞ゆ品を申さんには天照大神  
の御末なれば照の字をいみ名にて照鸞姫とぞ申ける  
龍田姫といはんにもつきなからず棚機の手にもおと  
るまじく中にもこと引給ふ事世にたぐひなし古の花  
陽夫人の爪音伯牙絃をたちけんのね俊蔭があすらよ  
りつたへしことのひゞきもおおせんやうに覺ゆあし  
垣の間近きひゞきをきかんはおほけなき事なり。

玉海集第一 貞室撰 明 曆二年印本 曰櫻木に鳴鸞の音や吉野琴。

懷子第九 春部 作者不知 曰鸞姫のひくことの音や想夫戀。

鼓草子、チツチ、タンポ、

後太平記第一 赤松律師則祐佐々木 佐渡入道上洛之事 曰赤松律師則祐ハ云々三

月十三日播磨ノ白旗ヲ討立已ニ上洛セシ處ニ其境子

息上總介義則因疾病攝津國有間ノ温泉ニ在シテモ同

道セバヤトテ出温泉ニ立寄兩日滯留シテ是ヨリ鼓ガ

瀧ニ赴キ我累年大小ノ鼓ヲ好テ翫ベバ幸ニ瀧ノ音ニ

調子ヲ調べ合琢磨ノ功ヲ盡シ衰老ノ樂ヲ可挑ト喜ビ

數多ノ猿樂ヲ呼テ終日囀テ興行ス亂舞宴ノ半彦部新  
左衛門尉秀光追行御使ノ由ヲ申セバ云々律師モ祇今  
發馬仕候御返事ノ證ニハ天下全討治メ給フ千代迄目  
出度狂歌一首ヲ猷シ候トテ筆ヲ執ツテ、音ニキク鼓  
ガ瀧ヲ來テ見レバ上ニハチ、ト蒲公ノ花。  
本草和名卷上 卷十一 曰蒲公草一名構釋草 上江項反 下收豆反 和名布  
知奈一名多奈。

てをつくくし

夫木抄第廿八 土草 眞應三年百 民部卿爲家 曰佐保姫の筆かとぞ見る

つくくし雪かきわくる春のけしきは。

つほすみれ

萬葉集第八 高田女王歌一 高安之女也 曰山振之咲有野邊乃都保須美禮

此春之雨爾盛奈里鷄利。

つゝじ

萬葉集第二 皇子尊宮舍人 等備傳作歌 曰水傳磯乃浦回乃石乍自木丘開

道乎又將見鴨。

山吹いろくゝの  
萬葉集第二 二十市皇女 高市皇 子尊御作歌三首之三 曰山振之立儀足山清水酌爾



雖行道之白鳴。

子規雲のよそにこひしたふ身はうの花の

山家集卷上杜鵑 曰ほととぎす花橘はにほふとも身を

うの花の垣根忘るな。

まきの板戸をほとくとたしく水鶏の

續古今集第三夏命婦 曰月のさす眞木の板戸としりなが

ら誰あけよとてたしく水鶏ぞ。

まつ虫

古今集第四秋歌上題不知誰人 曰君忍ぶ草にやつるゝ故郷はま

つ虫のねぞ悲しかりける。

鈴虫

躬恒集卷上歌仙集第一野 曰人のこもかるときくまで女郎

花もとごとになく鈴虫の聲。

きりくす

古今集第四秋歌上 人の許にまかれりける夜きりくす曰葦いたく

な鳴きそ秋の夜の長きおもひは我ぞまされる。

和名抄第十九類 曰蟋蟀兼名苑云蟋蟀二音一名葦一音反

木里集

し、なくねにつれて、仲國が、れうの御馬、給はりて、とのるすがたの、ふぢばかま、たづぬる人の、おもかげに、たつうすぎりの、女郎花、それかあらぬか、まぼろしの、よもぎがしまね、たづねわび、こまひきとむる、さゝのくま、やすらふかげの、松かぜに、かよふ、かよふつまおと、つまこひの、ねによる鹿に、あらねども、昔おぼゆる、笛竹や、あはすしらべの、まがひなき、こゑをしるべに、したひよる、さが野のおくの、かたをり戸、想夫戀の、唱歌は、ひよくのつばさの、雲をこひ、盤渉調のしらべは、松のれん理の、枝に通ふ、小督の局、世をしのお、すみかもあすは、大原に、かへんすがたの、なごりとして、夜半に手ならすつまごとの、いはこそおもひ、せきかねて、なみだにそでを、かしばばや、人目もいかど、あやめがた、いとの色音を、しるべにて、さし入月の、雲より、御つかひに、參りしと、かしこき

きりはたりてふ霧の間をわけこしきつる初雁の

新撰萬葉集卷上歌秋 曰雁歟聲之羽風緒寒美促織之管纏

音之切切砥爲。

謠曲拾葉抄第二眼 曰きりはたりてふ 機織音のかく

聞ゆるとなり。

諸行無常のことわりをつけてや鐘もひくらむ

祇洹圖經卷下曰無常院申有一堂但以白銀四面白廊白

華充滿畫白骨狀無處不有諸欲無常皆舉至此令見白骨

諸非常相既命終已從南門出西大牆之西門一切無常皆

由此路院有八鐘四白銀四頗梨云々口說無常苦空無我

手舉白拂鐘即自鳴音中亦說諸行無常是生滅法生滅滅

已寂滅爲樂病僧聞音苦惱即除得清涼樂。

第三十一 小督曲

をじかなく、此山里と詠じけん、さがのあたり  
の、秋のころ、ちぐさの花も、さまざまに、虫の  
うらみも、深きよの、月にまつ虫、まねくは尾花、  
萩には露の、玉虫や、そよぐをぎむし、くつはむ

君が、みことのり、野べのをちかた、わけきつる、  
つゆの玉づさ、さしよする、つまどのはしの、え  
んのつな、又ひきむすぶ、御かへりごと、そへて  
たまはる、いつゝぎぬ、きぬくおくる、ほども  
なく、むかひのくるま、たてまつり、むかしにか  
へる、もゝしきや、むかしにかへる、もゝしき  
や、千代をちぎりの、松のことは。

小督曲

平家物語第六小督 曰中宮の御方より小督と申女房を  
まるらせらる此女房と申は櫻町中納言しけのりの卿  
の御娘禁中一の美人ならびなきことの上手にてぞま  
しましける冷泉の大納言たかふさ卿未だ少將なりし  
時見初めたりし女房なり始は歌を讀ふみをばつくさ  
れけれども玉章の數のみ積りて靡く氣色もなかりし  
がさすが情に弱る心にや終には靡き給ひけりされど  
も今は君へめされ參らせてせん方もなく悲しくてあ  
かぬ別の涙にや袖しほたれてほしあへず少將いかに







をいみて御大はむ所に教へまらせられざりきそれに尾張へ流されさせおはしましたりしに譜を書て猶いみて教へまらせざりき。  
ばんしきでうのしらべ

源氏物語帯木卷御月抄第二曰又箏のことを盤涉調にしらべていまめかしくかいひきたる爪音かどなきにはあらねどまばゆき心地なんし侍りし。

夜鶴庭訓抄群書類從第三百四十七曰箏のしらべは幾しらべ候やらんもともこのこと今おし打まかせては呂律大食調是三しらべぞ普通のことにて候其外雙調水調盤涉調とて三しらべあらねさまぐにてしらべの候とかやいとしたりたる人すくなきなり盤涉調のしらべは習て候めでたき物に候わがひかねどさる事ありとしらぬはくちをしき事なればしるし申候ぞかゝるしらべありとも人にないはせ給ひそ。

絲竹口傳群書類從第三百四十八曰箏ノ大事ハ調子ニテサマレリ琵琶ノ大事モシカノ如シ箏琵琶ニ彈ク樂ハオホヤケモノニテ常ノコト也カ様ノ調ノ名ドモテ傳ヘルテ箏ノ

る也と御感有て仰せられしは盤涉調をば一の名は摩醯首羅天聲といふ又梵天聲といふ其故に如法經の十種供養には必盤涉調を用ふる也とぞ仰せられし是又人きかざりき又是より後五十六億七千萬歳とかや後人の七萬歳の時釋迦の佛法うせて彌勒菩薩世に出て法を説給はん其時此世に書置きたる如法經を彌勒を導師にて供養し奉らんするの法樂には萬秋樂をすべし是に依て慈尊萬秋樂といふ是は即盤涉調の樂也是に依て盤涉調にては有べき也となり。

管絃音義群書類從第三百四十一曰盤涉 所以名盤涉調者經云一切江河必有廻曲流入於海云々故水音名盤涉也。

體源抄第一調子曰盤涉調北水盤涉と名付る事盤はならべのする心涉はわたすとあり水はよく物をうかべのする能あり吹様の姿如何に喩ふべくもなし餘の調子よりも靜にのべかけて吹くべしと有之此心聊有口傳也總べて水の心は陰也陰は沈みて靜なるに其徳あり。

絲竹口傳調子異曰仙來調盤涉調ノ調子也。

奥旨トハ云也是ハ皆五音五調子ノ中ニツケカヘタル名ドモ也別ノ義ハナシ但箏ヲキハムルニハ三調ヲ以テキハムル也普通ニハ三曲トモ云也双調水調盤涉調也此三ヲ以極メタルトハ云也琵琶ノ三曲ニ於テハ名ナリトモ知レル人アリ箏ノ三曲ヲバアマリニ祕スル故ニ名ヲサヘ人ニキカセラレズ心得有ベキニヤ祕スルコトヲ仇ニイヒ愚ニスレバ師弟冥加ナキ也伊綱モ三調ノ内盤涉調ノ柱バカリマデコソ傳ヘラルレ打任テハ平調ノ柱ニテ盤涉調ノ樂黃鐘調ノ樂ナンドモヒキ大食調ノ柱ヲ以テ高麗樂ヲヒキ壹越性調ノ柱ヲ以テ水調ノ樂ヲヒク也是ハ普通ノ事也ウルハシクハ皆柱有也ソレヲナラフヲ以テ箏ヲキハムルトハ云也。

殘夜抄群書類從第三百四十七曰後白河院如法經か、せおはしまし、時十種供養有しに盤涉調にて有べしと聞えしに抑何事に十種供養は盤涉調にて必候べきぞと尋まるらせしかば是よく問ひたり物は問ふはゆゝしき大事にてあり又答ふるも大事なれども仔細をしる爲には答ふるは易し物はおもひよりて問ふは心ぎはの見ゆ

世を忍ぶすみかも明日は大原にかへん姿の名残とて夜半にてならず爪琴の

平家物語第六曰今はかゝる所のすまひなれば琴引事もなかりしが明日より大原の奥へ思ひ立事のさふらへば主の女房今夜計の名残を惜み今は夜も更ぬ立聞人もあらじなどすゝむる間さぞな昔の名残もさすがゆかしくて手馴し琴を引く程にやすうも聞出されけりなとて御涙せきあへ給はねば仲國もそゝろに袖をぞしほりける。

いはこそおもひせきかねて

絲竹口傳群書類從第三百四十八曰箏ノ具足ニ祕スル名ドコロアリ人オホク是ヲシラズ上東門院ノ今參女房ニ和泉式部ガ岩越トツケタリケルテ末代マデモ感ズル事也岩越ハ柱ノサキノ祕名ナリ彼名ヲツクル事ハ行浪ノ手歸ル波ノ手岸打波岩越手ナンド云テ彈モノアリ盤涉調ノ柱ニテ彈也仔細アリテツケタリ。

夜鶴庭訓抄群書類從第三百四十七曰ことの長さ五尺五寸其昔は有けるを弘仁の御時に六尺五寸にかへ給ひ候又岩越と



申處あり是は柱のさき緒のあたる所を申此一の名は  
努々人になきかせ給ひそ源氏作りたる紫式部は上東  
門院の女房なり其院に琴引今參のまゐりたりけるに  
院式部を召て是に箏引なり普通の名ならざらん名の  
さも有ぬべからんつけよと仰事有けるに岩越とつけ  
候はん今ひとつ候へど打聞て誰かけしきおほえ候へ  
ばと申ければ殊の外御感有けるとかや古き物にする  
して候いみじき事に候。

教訓抄第八絃類部 曰又柱ノ岩越ト申スハ絃ヲノスル  
所ヲ申スナリ。

樂家錄第八三箏曰岩越是柱頭作薄。垂絃之處也。

涙に袖をかしばばや

教訓抄第八絃類部 曰備後前司季通大宮右府ノ後家ノ秘  
曲ヲ傳フ名譽勝レタリシガ聊身ニオコタル事有テ東  
山邊ニ閉籠ル皆々ノ人誰モ訪フ事稀ナリシニ二條院  
深ク道ヲ嗜オハシマス管絃ノアルジトシテイカニ歡  
慮ノ中ニハトテ恥給ハザリケリイカナル折ニカ有ケ  
ン此御箏ヲツカハシテナニハノヨシアシヲ尋ラル季

めされけらむ御書を給はりて参りゆとて取出て奉る  
有つる女房とりついで小督の殿にぞまゐらせける是  
をあけて見給ふに誠に君の御書にてぞ有けるやがて  
御返事かいて引むすび女房の装束一重そへてぞ出さ  
れたる。

いついぎね

深窓秘抄群書類從 曰五衣、四時ニ依テ用之女服也。

迎の車たてまつり昔にかへるも、しきや

平家物語第六曰小督の殿の御返事をこそまゐらせけ  
れ主上なのめならず御感あつてさらば汝やがて夕  
さりぐして参れとぞ仰せける仲國入道相國のかへり  
聞給はん所はおそろしけれども是又勅詔なれば人に  
車かつて嵯峨へ行向ふ小督の殿参るまじきよしの給  
へどもやうやうにこしらへ奉りて車にのせてまつ  
りて内裏へ参りたりければ幽なる所に忍ばせてよな  
くめされまゐらせける程に姫宮御一所出来させ給  
ひけり坊門の女院とは此宮の御事なり。

通ウレシサノアマリニ涙マツサキダチテ柏形ニ一首  
ノ和歌ヲ書テ奉ル君ガヨニトハル、コトノツツマナレ  
ヤ今ゾウレシキタメシニハヒク。

夜鶴庭訓抄群書類從 曰箏の絃はるやう二からまきそ  
のほか今ひとつからまきをうへにかけてからむなりふ  
と絃は少しつよくはるべし此外に巻絃といふものあ  
り柏形のゑりめのもとに二寸計まろにわけてことを  
にて上に横様にまばら／＼巻て云々。

人めもいかゞあやめ形

(あやめ形を箏の名とせられしも古くものに見えた  
る名をとられたるか)

和名抄第十五調度部下鞍馬 曰金鏡、蔡邕猶斷云金鏡祖寔反  
駿今案俗云銀 面之昌蒲形是馬冠也高廣各五寸上如三華形者也。

さし入る月の雲より御便に参りしとかしこき君がみ  
ことのりのべの遠方分來つ、露の玉章さしよする妻戸  
の端のえんの綱また引むすぶ御返事そへて給はる五  
衣。

平家物語第六曰かやうに申さばうはの空とやおほし

第三十二 長恨歌曲

今はむかし、もろこしに、いろをおもんじ給ひけ  
るみかど、おはしませしとき、楊家のむすめ、かし  
こくも、君にめされて、あけくれの、おんいつくし  
み、淺からず、常にかたはらに、はんべりぬ、みや  
のうちの、たをやめ、三千の、寵愛も、わが身ひと  
つ、春の花、ちりていろかも、なきたまの、あり  
かをたづね、みなれざほ、さしてはる／＼、行船  
に、方士はなみの、うきねする、とこよの國に、  
來て見れば、樓閣玲瓏として、五雲起れり、うち  
になまめく、めのわらは、ことにすぐれて、玉眞  
の、姿はいづれ、李花一枝、雨をおびたる、その  
けはひ、見るよりそれと、ことのはも、なんだこ  
ぼれて、らんかんを、ひたすもいかに、なれそめ  
し、りさんの昔、思ひやる、あらなつかしのみや  
こ人、恥かしながら、ありしよの、そのむつごと



も、きえはつる、つゆのちぎりの、うさはらし、  
いうてみよなら、ひとかたに、おぼしめすかや、  
深き江に、春の氷の、薄きはいやよ、おもひあふ  
よは、うちとけて、ねみだれ髪を、そのまゝに、  
とりつくるはぬ、をなごぎを、かあいがらんせ、  
からすばの、いろにこの身をそめ糸の、むすびめ  
かたき、かたらひも、えんつきぬれば徒らに、又  
このしまに、かへり來て、猶なつかしき、いにし  
へを、おもひいづれば、あはれなる、そよや霓裳、  
羽衣の曲、稀にぞかへす、乙女子が、まれにぞ、  
かへす乙女子が、袖うちふりし、心しりきや、さ  
るにても、君には此世、あひ見んことも、よもぎが  
しまつどり、うきよなれども、戀しやむかし、こひ  
しやむかしの、ものがたり、つくさば、月日も、う  
つりまひの、しるしのかんざし給はりて、みやこ  
にかへる、家づとは、文にもまさる、文月の、七日  
のよはの、さゝめごと、ひよくれんりも、今はは

らにはんべりぬ

一朝選在君王側第六句

宮の内のたをやめ三千の寵愛も我身一つの

後宮佳麗三千人三千寵愛在一身第十九句

なきたまのありかを尋ねみなれ棹さしてはるく、行舟  
に方士はなみのうきねするとこよの國に來て見れば樓  
閣玲瓏として五雲おこれり内になまめくめのわらはこ  
とにすぐれて玉眞の

遂教方士殷勤覓排空馭氣奔如電昇天入地求之遍上窮

碧落下黄泉兩處茫茫皆不見忽聞海上有仙山山在虛無

縹緲間樓閣玲瓏五雲起其中綽約多仙子中有一人字玉

眞自第七十八句至第八十七句

りくわ一枝雨をおびたる

梨花一枝春帶雨第一百句

なんだこほれてらんかんを

玉容寂寞淚欄干第九十九句

りさんの昔おもひやる

驪宮高處入青雲仙樂風飄處々聞緩歌慢舞凝絲竹盡日

や、かれなりし、うきちぎり、あめのとこしな  
へなるも、つちのひさしく、ふりぬるも、つくる  
ときあり、このうらみ、めんく、らうくとし  
てたえまなく、いまにのこせし、筆のあと。

長恨歌曲

白氏文集第十二長恨歌傳前 曰元和元年冬十二月太原白

樂天自校書郎尉于熱屋鴻與琅邪王質夫家于是邑暇日

相携遊仙遊寺話及此事相與感歎質夫舉酒於樂天前曰

夫希代之事非遇出世之才潤色之則與時消沒不聞于世

樂天深於詩多於情者也試爲歌之如何樂天因爲長恨歌

意者不但感其事亦欲懲尤物窒亂階垂於將來也。

白氏文集第十二長恨歌。

もろこしに色をおもんじ給ひける帝

漢皇重色思傾國第一句

やうかのむすめ

楊家有女初長成第三句

君にめされて明暮の御いつくしみ淺からず常にかたは

りさん君王看不足至第三十句

新唐書第三十七地理志曰有宮在驪山下貞觀十八年置咸

亨二年始名溫泉宮天寶元年更驪山曰會昌山三載以縣

去宮遠析新豐萬年置會昌縣六載更溫泉曰華清宮治湯

井爲池環山列宮室。

ねみだれ髪を其まゝにとりつくるはぬをなごぎを

雲鬢半垂新睡覺花冠不整下堂來第九十五句

そよやけいしやうういの曲

漁陽鼙鼓動地來驚破霓裳羽衣曲第三十一句

げいしやうういの曲

龍城錄明皇夢遊曰開元六年以上皇與申天師道士鴻都客八

月望日夜因天師作術三人同在雲上遊月中過一大門在

玉光中飛浮宮殿往來無定寒氣逼人露濡衣袖皆濕頃見

一大宮府榜曰廣寒清虛之府其守門兵衛甚嚴白双蹠然

望之如凝雪時三人皆止其下不得入天師引上皇起躡身

如在煙霧中下視王城崔嵬但聞清香靄鬱視下若萬里琉

璃之出其間見有仙人道士乘雲駕鶴往來若遊戲少焉步



向前覺翠色冷光相射目眩極寒不可進下見有素娥十餘人皆皓衣乘白鸞往來舞笑於廣陵大桂樹之下又聽樂音嘈雜亦甚清麗上皇素解音律熟覽而意已傳頃天師亟欲歸三人下若旋風忽悟若醉中夢迴爾次夜上皇欲再求往天師但笑謝而不允上皇因想素娥風中飛舞袖被編律成音製霓裳羽衣舞曲自古洎今清麗無復加於是矣。

新唐書第二十二禮樂志曰文宗好雅樂詔太常卿馮定采開

元雅樂製雲韶法曲及霓裳羽衣舞曲。

をとめこが袖うちふりし心しりきや

源氏物語紅葉賀卷抄七曰つとめて中將の君いかに御覽じけむよにしらぬみだりごちからこそ物おもふに立まふべくもあらぬ身の袖うちふりし心しりきやしるしのかんざし給はりて都にかへる家つとはふみにもまさるふみ月の七日の夜半のさゝめごとひよくれんりもつき契り

唯將舊物表深情鈿合金釵寄將去釵留一股合一扇釵擊黃金合分鈿但令心似金鈿堅天上人間會相見臨別殷勤重寄詞詞中有誓兩心知七月七日長生殿夜半無人私語

あめのとこしなへなるもつちのひさしくふりぬるもつくる時あり此恨めんくろうくとして絶間なく

天長地久有時盡此恨綿々無絶時第百十九

あめのとこしなへなるもつちのひさしく

老子道德經王上篇第七曰天長地久天地所以能長且久者以其不自生。

第三十三 葵 上

三つの車に、のりのみち、火宅のうちをや、出ぬらん、夕顔のやどの、やれ車、やるかたなきこそ、かなしけれ、うき世はうしのをくるまの、めぐるやむくいなるらん、ノ、おほよそりんゑは、くるまのわのごとく、六趣四生を、出やらず、人間の不定、芭蕉泡沫の、世のならひ、きのふの花は、けふのゆめと、驚かぬこそ、おろかなれ、身のうきに、人のうらみの、なほそへて、忘れもやらぬ、わがおもひ、せめてやしばし、なぐさむと、あづさの

時在天願作比翼鳥在地願爲連理枝自第百七句至第百十八句

ふみ月

清輔與義抄上之末物異名第廿四曰七月フツ

七日たなばたによすとてふみどもをひらく故にふみ月といふをあやまれり。

ひよく

山海經第二西山經曰有鳥焉其狀如鳧而一翼一目相得

乃飛名曰鸞比翼鳥也色青赤不比不能飛爾雅作鸞鳥也見則天下大水。

爾雅疏第六釋地曰南方有比翼鳥焉不比不飛其名謂之鸞

鷦鷯

れんり

東觀漢記第三帝紀三恭曰延三年鳳凰集濟南臺丞霍穆舍

樹上賜帛各有差衛縣木連理定陵縣木連理潁川上言麒

麟白鹿見黃龍見歷城又見諸縣。

晉書第六帝紀第六元曰天地之際既交華夷之情允洽一角

之獸連理之木以爲休徵者蓋有百數。

藝文類聚第九十八祥瑞上曰瑞應圖曰木連理王者德化

洽八方合爲一家則木連理一本曰不失小民心則生。

ゆみに、をんれうの、これまであらはれ出たるなり、あらはづかしや、いまとても、しのびくるまの、わがすがた、月をばながめあかすとも、月には見えじ、かげろふの、あづさのゆみの、うらはづに、立よりうきを、語らん、梓の弓の、おとはいづくぞ、あづま屋の、もやのつまどに、ゐたれども、すがたなければ、とふ人もなし、ふしぎやな、誰とも見えぬ、上臈のやぶれ車に、めされたるに、青女房とも、おぼしき人の、牛もなき、車のながえにとりつき、さめんとなき給ふ、いたはしさよ、もしかやうの人にてもや、候らん、大方は、推量申して候、たゞつゝまず、名を御なのり候へ、それ娑婆電光の、堺にはうらむべき人もなく、かなしむべき身も、あらざるに、いつさてうかれ、そめつらん、只今あづさの、ゆみのおとに、ひかれてあらはれ、出たるをば、いかなるものとか、おぼしめす、これは、六條の御息所の、怨靈なり、われ



世にありし、古へは、雲上うんじやうの花のえん、春のあしたの、御遊ごゆうになれ、仙洞せんどうの、紅葉もみぢの、秋のよは、月に戯あそぶれ、色香しきかうにそみ、花はなやかなりし、身みなれども、衰おとろへぬれば、あさがほの、ひかげまつまの、有様ありさまなり、たゞいつとなき、わが心こころ、ものうき野のべの、さわらびの、もえいでそめし、思おもひのつゆ、かゝるうらみを、はらさんとて、これまであらはれ、出いたるなり、おもひしらずや、世よの中の、なさけは人のためならず、我人われひとのため、つらければ、必ず身みにも、むくふなり、何をなげくぞ、葛くわの葉はの、うらみはさらに、つますまじ、あらうらめしや、今はうたでは、かなひ候まじ、あらあさましや、六條むつじょうの御息所ごせきじよほどの御身ごみにて、うはなりうちの、御ごふるまひ、いかで、さることの候まじべき、只ただおぼしめし、とまりたまへ、いやいかにいふとも、今はうたではかなふまじと、まくらに立たより、ちやうとてば、此上こゝはとて立たよりて、わらははあとにて

けふを待ける、源氏君の返しに かざしける心ぞあだにおもほゆる八十氏人やそぢひとになべてあふひを依よりて此歌うた爲なる卷まき名な云々、葵上あゐのうへと申まをは引入いれ大臣だいじんの御子ごこなり母ははは桐壺きりつゝ帝みかど同腹どうぶくの御妹ごいも三さんの宮みやと申まをて源氏げんじの御爲ごために姑おばなり源氏げんじ十二歳じふにさいの御時ごとき清涼殿せいりやうでんの東あづまの廂むすぶにて御元服ごげんぷくの事ことあり則すなはち引入いれ大臣だいじん加冠かかんし給たまふ其夜そのよ大臣だいじんの姫君ひめぎみを源氏君げんじぎみの御ごそひぶしになし給たまふ是こゝは葵上あゐのうへの御事ごこと也。

（今此箏曲は謡曲よりうつせるもの故即其序説を用ふ）

三つの車くるまにのりの道火宅みちかたくのかどをや出いぬらん

法華經ほふくわきやう第一品だいいちひん曰いは此羊車ひつじぐるま鹿車かめぐるま牛車うしぐるま今いま在ある門外かど可以遊あそ戯あそぶ汝等なんぢら於お此火宅こゝ宜速よろしく出來こ隨したがう汝所なんぢ欲ほす皆みな當あたる也。

うきよはうしの小車こくるまのめぐるやむくいなるらん

未曾有むじやう因緣經いんげんきやう卷下くわんげ曰いは譬如たとへ車牛くるまうし厭患いと車故ゆゑ欲使ほ車壞くるまこ前車まへくるま若壞し續得つづ後車のちくるま輓ひ其項かた領罪りやうざい未畢ま故人こゝろ亦如是また假令たとへ燒壞や百ひやく千萬せんまん身罪業みづか因緣いんげん相續あ不滅た也。

りんゑは車の輪りんの如ごとく

心地觀經こんぢくわんきやう第三卷だいいさんくわん第二下だいにげ曰いは有情輪廻じやうじやうりんゑ生な六道むだう猶如ごと車輪くるま無始むし

くを見する、今のうらみは、ありしむくい、瞋恚しんゑのほむらは、身をこがす、おもひしらずや、おもひしれ、うらめしの心こころや、あらうらめしの、心こころや、人のうらみの、深くして、うきねになかせ、たまふとも、いきて此世こゝに、ましまさば、水みづくらしき、澤邊さわべの、ほたるのかげよりも、ひかるきみとぞ、ちぎらん、わらははよもぎふの、もとあらざりし、身みとなりて、はずるのつゆと、きえもせば、それさへことに、うらめしや、夢ゆめにだに、かへらんものを、わがちぎり、昔語むかしごとりに、なりぬれば、猶なほもおもひは、ますかぢみ、そのおもかげの、はづかしや、枕まくらにたてる、やれ車くるま、うちのせかくれゆかふよ、く。

葵上

謠曲拾葉抄らうきよくしやくしやく第二十葵上あゐのうへ曰いは此謠このらうは源氏葵卷げんじあゐのまきを以て作れる者也彼卷かゝるまきと葵あゐを稱なづする事は花鳥餘情はなとりよじやう云源典侍げんてんじが歌にはかなしや人のかざせるあふひ故神こゝろのしるしの

終。

六しゆ四しやうを出いやらす

法華經ほふくわきやう第六卷だいろくくわん曰いは若し四百萬億阿僧祇しよはくばんいふじやうぎ世界せかい六趣むくしゆ四生しよせい衆生しゆじやう卵生らんせい胎生たいせい濕生しつせい化生けせい。

智度論ちどろん第三十卷だいいじゆんさんじゆ善根ぜんこん供養くじやう曰いは復次また分別ぶんべつ善惡ぜんあく故ゆゑ有あ六道むだう善ぜん有あ上うへ

中下ちゆうげ故ゆゑ有三善道さんぜんだう天人てんじん阿脩羅あしゆら惡あく有あ上中下うへちゆうげ故ゆゑ地獄ぢやく畜生ちくせい餓が

鬼道きだう。

俱舍論くしやろん第八卷くしやろんはちくわん曰いは有情じやうじやう類るい卵生らんせい胎生たいせい濕生しつせい化生けせい是こゝ名な爲な四し

生せい。

法苑珠林ほふえんしゆりん第七卷だふえんしゆりんだいいちくわん曰いは云何いかに名な六趣むくしゆ依よ毗曇論ひだんろん云い趣しゆ者もの名な

到亦たう名な爲な道だう謂い彼善惡業かぜんあくごふ因道いんだう能運のう到たう其生趣そのせいしゆ處ところ故ゆゑ名な爲な

趣しゆ。

ばせうはうまつの世よのならひ

維摩詰ゐまがつ所説經しよとくせつきやう卷中くわんちゆう觀衆くわんしゆ曰いは如水たいてい聚沫くしよ如水たいてい上泡うへう如ごと芭蕉はせう堅かた。

きのふの花はけふの夢

白氏文集はくしやうもんじふ第十九卷はくしやうもんじふだいいじゆくわん曰いは官途くわんたう堪笑かたがは不勝悲ふじやう昨日けふ榮さか華はな今日けふ日衰ひやくちゆう。



あづま屋

和名抄第十居處部居宅類曰唐令云宮殿皆四阿和名阿豆萬夜

青女房とおほしき人の

應仁記第一亂前御時之事類書類曰應仁丁亥の歲天下大に動亂し夫より永く五畿七道悉く亂る其起を尋ぬるに高氏將軍の七代目の將軍義政公の天下の成敗を有道の管領に不任只御台所或は香樹院或は春日局など云理非をも不辨公事政道をも不知給青女房比丘尼達計ひとして酒宴嬉樂の紛に申沙汰せられ亦伊勢守貞親や鹿苑院の蔭涼軒など、評定せられければ云々。  
しやばでんくわうのさかひ

心地觀經第一序品曰無想諸天八萬歲福盡還歸諸惡道猶如夢幻與泡影亦如朝露及電光。

六條の御息所のをんりやう

源氏物語葵卷抄曰大殿には御物のけめきていたく煩ひ給へば誰もくおほしなげくに御ありきなどびんなき頃なれば二條院にも時々ぞわたり給ふさはいへどやんごとなき方は殊におもひ聞え給へる人のめ

入りぬすけなり心えずおもひ情は人の爲ならずぶこつ所の所へ参りたり又こそまるらめとて駒引よせのらんとす

韓詩外傳第七曰楚莊王賜其群臣酒日暮酒酣左右皆醉殿上燭滅有牽王后衣者后扞冠纓而絶之言於王曰今燭滅有牽妾衣者妾扞其纓而絶之願趣火視絶纓者王曰止立出令曰與寡人飲不絶纓者不爲樂也於是冠纓無完者不知王后所絶冠纓者誰於是王遂與群臣歡飲乃罷後吳興師攻楚有人常爲應行合戰者五陷陣卻敵遂取大軍之首而獻之王怪而問之曰寡人未嘗有異於子子何爲於寡人厚也對曰臣先殿上絶纓者也當時宜以肝膽塗地負日久矣未有所効今幸得用於臣之義尙可爲王破吳而強楚。  
楚史檣机同之。

三國志第廿七魏志王曰掩人者人亦掩之陵人者人亦陵之。

われ人の爲につらければ必身にも報なり

新古今集第十五戀歌五題不知曰なけかじなおもへば人に

づらしき事さへ云ひ給へる御惱なれば心ぐるしうおほしなげきて御修法や何やなど我御方にておほく行はせ給ふ物のけいきすだまなどいふものおほくいで來て様々の名のりする中に人に更にうつらず唯身づからの御身につとそひたるやうにて殊におどろくしう煩はし聞ゆる事もなければ又かた時はなるゝをりもなき物一つありいみじき驗者どもにも隨はずしふねき氣色おほろけのものにあらずと見えたり。  
朝顔の日影まつ間の有様なり

堀川百首卷上秋二十首 權花 高倉一宮 組曰東雲におきつゝをらん朝顔は日影まつ間の程しなれば。  
ものうき野邊のさわらび

和漢朗詠集第一 早春部 和早曰紫塵嬾藏人拳手碧玉寒蘆錐脱囊。

堀川百首卷上春廿首 藤原朝臣 顯季曰紫の塵うちはらひ春の野にあさる蔵のものうけにして。  
おもひしらずや世の中の情は人の爲ならず

(會我物語第四現をけして曰虎は返事もせずして内に

つらかりしこの世ながらのむくいなりけり。  
うはなりうちの御ふるまひ

寶物集第二宜羅殿女 御之事曰増てあやしの下子どもうはなりうちの後妻打とかやをして髪をかなぐり取組引組するは理にぞ侍るべき。

しんいのほむらは身をこがす  
正法念處經第一十善業 誦品曰瞋心如火燒一切戒。

同第六十觀天曰若起瞋恚自燒其身。  
水くらき澤邊の螢

和漢朗詠集第二 夏部曰葦葭水暗螢知夜楊柳風高雁送秋常州留與揚 許渾 集通此詩 全唐詩第八卷 元八本

全唐詩逸上冊引大江維時千載佳句出此詩。  
新千載集第三夏歌 嘉元百首 歌めされける 後宇多院御製曰夜光る玉とぞ見ゆる水くらきあしべの波にまじる螢は。

葉末の露ときえもせば  
月清集第一歌合百 首符戀曰よもぎふの末葉の露のきえかへり猶此よにとまたんものかは。

夢にだにかへらん物をわがちぎり昔がたりとなりぬれ



ば

新後拾遺集第十七雜歌下 少僧都運圖曰現ともゆめともわかで  
こしかたの昔がたりとなるぞはかなき。

第三十四 湯谷

花前に蝶まふ、紛々たる雪、柳上柳上に鶯とぶ、片々たる金、花は流水に従つて香の來る事とし、鐘は寒雲をへだて、こゑの至る事おそし、清水寺清水寺のかねの聲、祇園精舎をあらはし、諸行無常の、こゑやらん、地主權現の、花の色、娑羅双樹の、ことほりなり、生者必滅の、世のならひ、げに例あるよそほひ、佛ももとは、すてしよの、なかばは雲に、うへ見えぬ、わしのを山の、名をのこす、寺はかつらの、橋ばしら、立出て峯の雲、花やあらぬ、初櫻の、ぎをん林、しも河原、南を遙かに、眺むれば、大悲擁護大悲擁護の、うす霞、ゆやごんげんの、うつります、御名御名もおなじ今熊野、いなりの山の、うすもみ

もや御意の、かはるべき、たゞ此まゝに、おいとま  
と、ゆふづけの、とりがなく、吾妻路さして、行  
くみちの、やがてやすらふ、逢坂の、せきの戸ざ  
しも、心して、あけ行くあとの、山見えて、花を  
見すつる、雁金の、それはこしぢ、われは又、あ  
づまにかへる、名ごりかな、く。

湯谷

謡曲拾葉抄第十一巻曰八島内大臣宗盛卿遠江の國守  
たりし時池田の宿の長者遊屋が娘侍従といひし女を  
都にめされ御寵愛なめならず侍従は故郷に残り給  
ひし老母をしたひ常にはいとま申せしかども給はざ  
りければ比は彌生のはじめにてもや有けむいかにせ  
ん都の春はをしけれどなれし東の花やちるらんとい  
ふ歌をよみければいとまを給はり東に罷下りし也。

花前に蝶まふ紛々たる雪柳上に鶯とぶ片々たる金  
百聯抄解卷上第七曰花間蝶舞紛々雪柳上鶯飛片々金。  
せいするじの鐘の聲

ぢの、あをかりしはの、秋又、花の春は、清水の、  
たゞたのため、たのもしき、春も千々の花ざかり、山  
のなの、おとはあらしに、花のゆき、ふかきなさけ  
を、人やしる、わらは御酌に參り候べし、いか  
に、ゆや、ひとさしまひ候へ、ふかきなさけを人  
やしる、なうく、にはかに村雨のして、花をちら  
し候は、いかに、げに、只今の村雨に、花のちり候  
よ、あら心なの、むらさめやな、春雨の、ふるはな  
みだか、ふるは涙か、櫻花、ちるををしまぬ、人  
やある、よしありげなる、ことばのたね、取上げ  
見れば、いかにせん、都の春も、をしけれど、な  
れしあづまの、花やちるらん、げにだうりなり、あ  
はれなり、はやく、いとまとらするぞ、あづまに  
下り候へ、何、御いとまと候や、なかくのこ  
と、とくく下り給ふべし、あらうれしやたふと  
やな、これ觀音の御利生なり、これまでなりや、  
うれしやな、く、かくて都に、おともせば、又

帝王編年記第十二延暦十五年丙子曰今年伊勢人依貴布禰明神  
教造鞍馬寺同年三月坂上田村麻呂近衛大將 征夷將軍建立清水  
寺。

拾芥抄下本寺廿一曰清水寺山城 中納言坂上田村 丸延曆十七造之 千手  
伊呂波字類抄第八部諸寺曰清水寺山城國愛宕郡八坂郷 延曆十 七年戊寅中納言田村麻呂建立之  
ぎをんしやうじやをあらはし

賢愚因緣經第九須達起精舍 第四十三曰佛告阿難今此園地須達所  
買林樹華果祇陀所有二人同心共立精舎應當與號太子  
祇陀樹給孤獨園名字流布傳示後世。

ぢしゆごんけむ

林葉和歌集第六雜 群書類從 第 二百六十八下曰清水寺地主權現のおま  
へにて人々いはひの心をよみしに、音羽山清きなが  
れの瀧の糸は千代をへつ、も君ぞむすばむ。

しやらさうじゆ

涅槃經第一壽命曰一時佛在拘尸那城力士生地阿利羅  
跋提河邊娑羅雙樹間爾時世尊與大比丘八十億百千人  
俱前後圍繞二月十五日臨涅槃。  
しやうじやひつめつ



法句經卷上品無常 曰常者皆盡高者亦墮合會有離生者有死。

撰集百緣經第一佛說法度二王出家緣第九 曰高者亦隨墮常者亦有盡生者皆有死合會有離別。

なかばは雲に上見えぬ鷺のを山の

藻鹽草第十七鷺十 曰またはよもはねをならぶる鳥もあ

らじうへ見ぬ鷺の雲の通路。

だいひおうごの薄霞

平家物語第十熊野參詣之事第十一 曰夜もすがら御山のていをな

がめ給ふに心も詞も及ばれず大悲擁護の霞はゆや山にたな引れいけむぶさうの神明は音なし河に跡をた

る。ゆや権現のうつります御名も同じ今熊野

百練抄第七永曆元年十月十六日奉移熊野御體於新造社壇今

熊野是也上皇御願也。

いなりの山の薄紅葉あをかりし

袋冊子第四曉夫 曰時雨するいなりの山のもみぢ葉は

あをかりしよりおもひそめてき、是ハ和泉式部稻荷

小屋のいぶせきに故郷いかにこひしかるらん、中將の返事に、故郷もこひしくもなし旅の空都もつひのすみかならねばや、ありて中將梶原をめてしてさても唯今の歌の主はいかなるものぞやさしうも仕つたるものかなとの給へば景時かしこまつて申けるは君はいまだしろし召され候はずやあれこそ八島の大官殿の未當國の守にて渡らせ給ひし時めされまるらせて御さいあい候ひしに老母を是にとめおき常はいとまを申し、かども給はらざりければ頃はやよひのはじめにてもや候ひけん、いかにせん都の春もをしけれどなれし東の花やちるらんといふ名歌仕りいとま給ひてまかりくだり候ひし海道一の名人にて候とぞ申しける。

第三十五 八重垣

春立つや、かどは松江の、わかみどり、雲をなすめに、しら浪の、なぎさによする、荒乳山、光のどけき、日の岬、そのひの川の流くむ、わにがふちせ

ヘマキリケルニ時雨ノシケレバ道ニアヘリケル牛飼童ノアチ、ヌギテキセタリケルチカヅキテウレシキ事ナリト云テヤミニケル後ニ此童式部ガモトニ來タリケレバ何事ニカト尋ケルニヨメル歌也無便心ノ有ケルトナム但問巷ノ物語難信仰事也。

花の春は清水の唯頼め

新古今集第二十藤教 曰猶頼めしめぢが原のさしも草我世の中にあらんかぎりは、此歌は清水觀音御歌となんいひつたへたる。

春雨のふるは涙か

古今集第二春歌下 題不詳 大伴黑主 曰春雨のふるは涙か櫻花ちるををしまぬ人しなれば。

いかにせん都の春もをしければ

平家物語第十海道くだりの事 曰池田の宿にも著給ひぬ彼宿の長者ゆやが娘侍従がもとに其夜は三位宿せられけり侍従三位の中將殿を見奉りて日頃はつてにだにおほしめしより給はぬ人のけふはかゝる所へ入らせ給ふ事のふしぎさよとて一首の歌を奉る旅の空はにふの、みてらまで、ぬかづきすぐる、草まくら、ぬ

ふてふ鳥も、こゑにほふ、うめの花笠、ひよりがさ、櫻はものを、おもはする、あさなくの、みねのしら雲、浦はにしきの、ひかたのかひ、名にいろうくを、よびたて、いそなつむてふ、賤のめの、つぼをりならぬつまからげ、しどけなりふりよ、その十六の、島小舟、のりとるわざも、手馴れてなれて、さをもみなれの、やるせなき、浪のあらめやうちよする、よその見るめも、何よしあしの、サヨへ、やみをぬひく、とぶ螢、袖しが浦のもやうどり、ほんにく、しほらしや、そめいろくの、つたもみち、てまの關山、つひ打こえて、サヨへ、月は夜ごろに、こがくれの、つまにこがる、さをしかの、ほんにく、しほらしや、秋もくれ、わが河原の、わが思ひ、えんをむすぶの、みやしろへ、あゆみをはこび、かねてねがひの、ひとすぢを、つひ打明けて、いうて見よかいな、人目をは



ちの、かたさとや、戀わたるらん、さたの浦、雪の  
苦屋に、友よぶ千鳥、ちりやちり／＼ちりかゝる、  
ふじきを花の、おもしろや、たびのやどりを、ゆび  
をれば、はる／＼きぬる、みちしるべ、見かへるそ  
らの、八雲立つ、出雲八重垣つまごめに、八重がき  
つくる、その八重垣を、守るやかみのくにすぐに、  
いく十かへりの、春やまつらむ、春ぞまちぬる。  
八重垣

懷橘談卷上佐久 曰佐久佐ノ里ニ八重垣ノ明神在ス佐

久佐社一座トアルハ是ナルベシ。

春立つや門は松江の若翠

和漢三才圖會第七十八出雲 曰松江東至江戸二百六里中方至石見

海五里

光のどけき日のみさき

懷橘談卷下美保 曰沙門アキツスノ外マデ照ス日ノ三崎ク

モラヌ御代ノ光ソヘツ、。

和漢三才圖會第七十八出雲 曰日御崎社、在出雲郡西二

にたゝむやかへるなごりならむと讀侍る。

つほをりならぬつまからけ

源氏物語葵卷曰つほさうぞくなどいふすがたにてつ

ぼさうぞく、五、俊成卿女説云市女笠とうす衣著たる女をつぼさうぞくといふ  
と云々、河同、又孟津につぼ装束は衣つぼをる心なりと入道右府説なり云々、  
師、衣つぼをるとは打かけたる小袖の前のつまを折て前にはさむなり、河、  
清少納言枕草紙に見ゆるしきものつぼさうぞくしたる人のいそきはしること

謡曲拾葉抄第十五出雲 曰あづまからけの鹽衣、一條禪

閣御説云あづまからけはかゝけ也かゝけをからけ

とよみあやまるなり云々掲と書、新後拾遺しづの

女があづまからけのあさ衣ふたまた河原さぞ渡るら

ん。

袖しがうらのもやうどり

千五百番歌合第二春二、百番左 曰春きては霞の衣いくか

さね袖しのうらの浪やたつらん。

てまのせき山つひ打こえて

古今六帖第二出雲 曰八雲立つ出雲の國の手間の關いか

なるてまに君さはるらん。

縁をむすぶの御社へ

拾遺集第十九雜題しらす 曰君みればむすぶの神ぞうら

許社領六百石祭神二座爲上社下社。

そのひの河のながれくむ

日本紀第一上神代 曰是時素戔嗚尊自天而降到於出雲國

簸之川上。

鰐が淵瀬の御寺まで

和漢三才圖會第七十八出雲 曰鰐淵寺在枕木山相傳武藏

ぬふてふ鳥も聲にほふ梅の花笠

古今集第二十大歌所御歌 曰青柳をかた糸によりて鶯の

ぬふてふ笠は梅の花笠。

櫻は物をおもはするあさなくの嶺の白雲

集外歌仙左方待花 曰よしの山花待つころのあさな

く心にかゝる嶺の白雲。

浦は錦のひかたの貝

後拾遺集第十八雜四 錦の浦といふ。曰名に高き錦の浦にき

て見ればかづかぬあまはすくなかりけり。

懷橘談卷上浦錦 曰宗養が發句に、花鳥は錦の浦のうき

藻かな、天正十五年細川玄旨殿下の供奉して西國へ

下りし時此浦に舟をよせて、舟よする錦の浦の夕波

めしきつれなき人を何つくりけん。

清輔與義抄中之下古歌五十首 曰むすぶの神はうぶの神

なり産靈とかけり。

ひとめをはじのかた里や

和漢三才圖會第七十八出雲 曰土師天神在出雲郡土師

村、祭神一座菅家。

こひ渡らんさだの浦

萬葉集第十一密物陳 曰奥波邊波之來縁左太能浦之此左

太過而後將戀可聞。

八雲立いづもやへがき

古事記卷上曰速須佐之男命宮可造作之地求出雲國爾

到坐須賀此二字以 地而詔云吾來此地我御心須賀須賀斯

而其地作宮坐故其地者於今云須賀也茲大神初作須賀

宮之時自其地雲立騰爾作御歌其歌曰夜久毛多都伊豆

毛夜幣賀岐都麻基微爾夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐

袁。



追加

山登檢校松和一作

こゝろの奥

四季様々の、そのなかに、夏はうの花、白妙の、ゆきかとばかり、よをふかみ、まなびのまどに、むすぶ夢、さめてすゞしき、衣手に、かをりは高き、たきものも、くみ合せたる、六つの國、それはことぐさ、これは又、十二にわかるいとねの、其なかばなる、双調さうてうの、今此時に、あふぎもよしや、よしあしと、名はかはれども、只ひとすちに、こひく、戀しきとりを、まつち山、まつらん友に、あひ見んか、たまさかにあふとても、猶ぬれまさるたもとゝは、ふるき言葉に、有明の、月がないたか、ひとこゑは、雲のうちに、ゆかしくも、あとに千こゑやふくむらん、やゝひろく、みちはさかふて、くさぐさの、しげるがうへに、おく露の、こぼれて

屋にはしる玉あられ、すゑは雪ともならざらし、さらせるく、ぬのの、白妙に、たえずく、あゆみをはこぶなる、かすがの宮のたふとさは、かくともつきじ、やまとことのは。

初若菜

小松原、末のよはひに、ひかれてや、君がためとて、野の朝戸出に、年もわかかなのむそひとつ、つむてふ春ぞ、かぎりなき、朱雀すざくの御賀に、ならうたる、まんざいらくや、賀皇恩がくわうおん、けしきばかり、まひのそで、ためしすくなき、みあそびに、おのく心いれたまふ、まづそのえての人々に、びはははたるの、兵部卿、誰にこがるゝ、名のゆかり、光る君には、きんのこと、おとどは例の、やまとごと、上手をつくし、給へばぞ、いとというにこそきこゆなれ、その十二りつ、十三の、いとしをとこに、あひの手の、六段九段、人めの關、こゆる屏風の、

すゑは、ながれなす、水にこゝろうつせり。

春日詣

いにしへの、奈良の都の、八重がすみ、かすがの野邊の、さをしかの、つのもいつしか、をちこちの、ゆきゝの人の、ながめぬる、なんゑんどうの、ふちなみや、さかりは夏にかゝりたる、その松が枝の、ふりもよく、三笠の山や雲の坂、あめにこえ行く、うば玉の、やみの螢かきんすなご、さをさす舟の、佐保川に、かせもすゞしき、鈴のねの、ふるのやしろの、神さびて、けがれ心も、さる澤の、池にやどれる、月の影、むかしの人の、かたみぞと、見るやうねめが、きぬかけし、柳も一葉、ちる秋の、舟をたくみし、さゝがにの、そのふるごとを、おもひねの、枕にひびく、とどろきの、橋ふみならず、こまのあし、なくやすとむし、くつわ虫、りんきのかほも、三輪の里、いとくりかへすたまづさや、板

すゞめがた、すゞめいろどき、しのぶよを、君が手ごとに、かけられて、曲も雲井の、すいちやうに、こゝろのおもて、うらなくも、あかしやすまの、うらみわび、人づてならで、その中を、わたせし橋の長枕、はやかさゝぎに、いそがれて、わかれぐるまの、波がへし、かへる直衣の、袖たもと、わりなき中の、わりづめや、亂れみだるゝ、ま心を、しろしめさせ、給はれと、後のあしたの、もしほ草、かいてりくもし、千とせの松の、みどり子に、かへることよみの、女文字、とるなるひらく、吉日や、猶末廣の、ことぶきを、つきせぬ春と、祝しけりく。

糸の戀

いとよる、ものならなくに、わが心、ほそきは女の、つねぐに、いのりし神は、御するもじ、り、を中立に、むすびあうたるねやのうち、とけては



もつれ、もつれては、とけいの六つに、むつごと  
も、つひいひさして、きぬぐゝに、見おくるかさ  
の、もみぢより、ふかく染にし、袖のあめ、ふる  
ごとまでも、くりかへし、しんきしんくの、世の  
中がきを、いつしかあけてそはばやと、おもひ  
くの、つもるをだまき。

西行

われも昔は、ますらをの、まゆみつきゆみ、と  
しをへて、ひきたがへたる朝夕は、命なりけり、た  
び衣、こけのころもに、身をそめかへて、心のち  
りの、袖はらふ、やばなせかいに、いとしごの、い  
としかあいは、むかしのことよの、よし野山、こぞ  
のしをりの、みちかへて、まだ見ぬ花の、いろく  
を、たづねく、うた枕、筆のすさみの、すみぞ  
め櫻、うつろふ春の、花のかほ、やせるすがたに、  
笠きたなりを、水のかどみに、かげとめて、しば

し立よる、柳かげ。

手枕

きなれし、いとの色音を、松かせに、それとばか  
りの、こゑさへあるを、鹿がさそへば、をばながへ  
んじ、秋はなせやら、たが袖も、ぬるならひか、  
かわかぬくせか、あちにさだめた、むかしおもへ  
ば、しんぞしんき、しんきぢやエ、おもかげした  
ふ、たまくらに、むすびすてたる、つゆの夢、き  
えて残りて、そのするは、まだあかつきの、おき  
てもねても、かぎり名ごりの、をしまれし、月の  
入る山、にしとながめん。

新七草

いにしへの、よしある人の、秋の野に、かぞへし花  
の、いろ香にも、いづれおとらぬ、をとこへし、さ  
かりひさしき、龍膽りんたうに、つきの野ぎくの、千代かけ

て、契るえにしは、桔梗ききやうに、なびく紫苑しぜんの、や  
さ姿、のちは心も、かるかやと、われからはづ  
る、われもかう、よむ花かすも、四つと三つ、む  
つましどしの、うちつれて、見るこそ人の、花  
なれや。

なでしこ

こと花のおほかる野べの春秋をへだて、今は、中  
ぞらや、てるひに匂ふ、からやまと、花のにしき  
の、とこなつは、げにたぐひなき、よそほひ、く  
れなるの、こぞめの色に、おきわたす、あしたの  
露の、玉すだれ、かけてぞ祈る、神がきの、しるし  
なるらん、ひめゆりも、ひもときそめて、なびき  
つ、むつれむつる、手枕に、かをりのこして、  
名はたち花の、かげにやどるか、ほととぎす、あけ  
てわかる、ちぎりはほんに、するひさかたの、雲  
のそで、ひく手もしげき、あやめ草、ことによし

ある、言の葉の、語りもつきぬ、はとこ草、かれぬ  
さかえを、うつしてうゑて、さかりひさしき、宿  
の撫子。



吾孀箏譜序跋

序 四

吾東方、昇平之和布四隅、黎民鼓腹、以飽於治世之樂矣、當是時也、山田檢校斗養一者、以箏曲鳴于海内、夙學古筑紫箏曲、精志研膈、採擷取捨、以製新曲數闕、將傳同社矣、名謂吾孀箏曲焉、而其曲也、源本雅樂、傍及艷麗之操、不徐不疾、自有不言之妙也、而使聽者、其樂融々曳々、積日盪懷如氷泮然、而遂爲一家、可謂介然獨立者也、嗚呼師之績、洋々乎大哉、而其曲數、凡及三十有餘、其粒々有光彩、粲然猶玄圃積玉也、窺聽其曲者、相共請求其譜不休焉、於是乎、輯以上諸李棗、爲一小冊、將使人免騰寫之勞也、且深閨婦女子、以之著巾箱、則爲朝暮唱曲之便耶、而有其譜、則曲亦傳於世、而使譜與曲兩相持、而千載之後、不蠹不朽、無乃山田氏之眞面目乎、梓成而叙之、覽者察諸、

文化己巳年秋七月

重元房吉謹識

四 四

きを、しりへに記し侍るのみ、

指月散人

百 泰

四 四

文化己巳年季翻

應 需

臨海主人書

四

吾孀箏譜一卷者、向年先師山田檢校、爲門弟子所令板刻也、其後章句之内、先師所加鉛槧不少、今校正舊刻之誤謬、且吾雖憚先師之遺靈、追加拙作之唱曲於卷尾、而更復令改板訖、自後追而有製作者、附屬於後、以傳後進之同社、則可爲當流唱歌之正本者也。

文政七年甲申春二月

山登檢校松和一誌

跋

八島の中絲竹を尊び、絲竹の中絃なほ盛也、絃に數品ある中に、箏の徳たるや必ず人を和して、しかも亂れず、是をよくなせし人往古より傳へ聞くのみにして、今はた何をかいはん、爰に山田檢校師多年精神を凝らし、此業に秀で、まづ組をしらぶるに、正しき事はいふもさらなり、しかのみならず、自らも歌を作り、人をしても作りしめつ、夫にあらゆる曲節を盡せるもの、みそぢあまり六くさばかりに及べり、誠に家の箏歌と呼びて可ならむかし、是を弾きすさぶ席につらなる人、眺むる花をわすれ、めづる月に俯く、さればいみじく人を和し、しかも亂さるの證、まのあたりなり、斯くて、門葉は野におふる葛のごと、はびこりぬるが、かのくさくの歌をかき寫してよと乞ふに初めのほどは、その望に應ぜしも、日を次ぎ、月をかさねて、林の木の葉いや事しけくなり、にたれば、毎々にあたふることあたはず、よて梓に壽する事となむなりにける、予もとより文かくことつたなけれど、師にあさからぬ因みあるをもて、只一部のおもむ

文化己巳年七月開版

文政七甲申年二月再刻

天保十己亥年八月改版

藏本仕立所

江戸橋町三丁目

琴師 重元 平八



第七 松響閣等話



松響閣箏話序

虞商邈矣、韶濩之音不可得而聞也、夔曠逝矣、拊搏憂擊之法、不可得而問也、今之好古者論樂動稱三代、論則高矣、然而世代悠遠、文獻無徵、雖間研精窮思以費畢生之力、亦終不可得之、及其不得也、乃謂古樂不可復、今樂不足用、嗟乎、古之君子無故則琴瑟不去側、所以蕩滌邪心和暢德性、若夫所論、則凡今之爲君子者、將無以養其心性乎、余嘗以爲以時樂近古而不戾於雅者、志之何不可之有、晦菴朱公曰、古樂亦難遽復、今樂中誠去其噍殺促數之音、制撰樂章、邇教化訓誡及君臣賓主之情、令人歌之、亦足以養人心之和、亦是此之意也、夫漢魏晉隋唐之間、其樂固不及三代、然時尚近古、不戾於雅者、蓋十之三四、至朱明鞞清、世衰俗薄、則律漫聲劣、無復足聽、皇朝之樂、實傳自隋唐、未嘗有變更、故其雅澹樸古、次于三

代漢晉、但歌章不傳、故選和漢古詞、以被諸曲、雖有催馬樂朗詠之名、而其曲則隋唐之遺音、明清之所嘗無也、今之君子得而翫之、亦可以養心性、豈不其大幸乎、以鎮西之地、與西土隣故、古傳其雅樂者不尠矣、當初絃管鐘鼓盡備、與京師之樂並行、號爲筑紫樂、延喜式所謂太宰府鼓吹丁可徵也、中葉以來、武人割據、兵燹相繼、於是樂制泯絕、世無復知有筑紫樂者、獨賴其箏曲及詠章之僅存乎我肥前州、到今猶爲間人野僧所翫、比之糸樂、其聲稍數然、未至哀迫滯靡如明清末俗之樂、抑亦催馬樂朗詠之曲、用之燕間施之閨闈、有益無害、君子兼翫之、豈謂非養心性之一助乎、然世所行筑紫箏者、于吾肥所傳名同實異、今而不辨、或至以名溷實、琴仙藤子、素善筑紫古調、又塵于斯、乃記授受所淵源、編箏話一卷、子佐賀藩臣、兼工于國雅名千春、此今泉琴仙其致仕後之號云、

天保四年歲在癸巳上元前一日鳴琴堂主人序

臣平井篤謹書



松響閣箏話 (用字假名遣原本ノマ、)

肥前 今泉 千春撰述  
男 千秋 校

筑紫箏曲は治承公卿朝任マ承久のころ某卿筑紫に左遷せられ民間に傳はりし箏曲をもてあそび幽居の情を慰め自からもまた和漢の詞を授ひ詠彈せられし遺曲なりそれを筑後の國善導寺の僧聖光某卿の知音なりければ習えて其寺に傳ふわが肥の満慧數阿の二僧も聖光の傳をえたりとぞ其後天文の比賢順といふ僧善導寺にありてこれを學びつひにとし歴損壞せし譜本を訂正しその奏するところの曲に人皆感ぜぬはなく筑紫箏曲中興の師と仰けり永祿の比大友義鎮豐後府内に虎踞し武威九國にふるひ勢敵尤も盛んなりしが賢順を招きて深く愛敬し其内子をして箏曲を學ばしむ義鎮の耶蘇を信するに及んで賢順是をにくみ其館を出さりぬ義鎮大にわかりたづね探して殺さんとす賢順害を避けてわが肥の南里に來り終に多久にかくれ居り龍造寺家久に

朝鮮の役に從ひ歸朝して老後昇平の澤に浴し寛永十三年十月享年九十にして世を終り在世中家人の請に應じ箏曲を家久の室及慶巖寺の僧玄恕に傳ふ法水といふ僧も賢順の弟子なりしかど其行ひ正しからず彈箏に淫聲溺音ありとて左傳祕事を傳へず師弟の契りを絶てり玄恕上人中興賢順師の正傳を受繼ぐこれを正定寺の僧超譽に傳ふ超譽上人これを武富威亮松隈桃仙富元竹徳等に傳ふ松隈子淨土寺僧厭譽に傳ふ厭譽上人早田高邨に傳ふ武富子は村島政方につたふ村島子上野知利につたふ上野子伊東祐英と號に傳ふ楚雲子其子祐之號につたふ予は龍卿子の傳をえたり龍卿子常にいへらく村島子は天宰協律の奇才あるのみならず其初學より一曲を終るごとに千返の習熟を歴ざれば次の曲を學ぶことなし天霽月明らかなる夜はやど近き松原に箏を携へ行て千返の數をみたしむ其耽嗜切瑳の功年をつみて微妙の域にいり名を此道に擅にせりと云絃を撫するごとに此人を想はざるはなし頃歲其曾孫村島某の家に残れる譜本を得たり傳ふ所の曲には

富 貴

富貴といふも草の名めふがといふも草の名ふき自在徳ありて冥加あらせたまへや春のはなのきん曲和風樂に柳花苑りふくわえんの鶯はおなじ曲を轉る月のまへのしらべは夜寒を告るあき風雲井のかりがねは琴柱に落るころるく長生殿のうちにはしゆんじうとめり不老門の前には月のかげ遅し。

春 か ぜ

春かぜの吹きて散花のはなの雪は白妙の衣手のけるはカくれてくほとぎすの聲を限りに鳴わたる夕暮に月影のくさやかならねばいづれあやめとみもわかす咲みだれて夏かれてく秋かぜの吹きて紅葉ちりかゝるそでは紅ひの衣手の秋暮てく雲井よりふる雪の梅がえに積れるははなとこそく見るべかりけれなほまなくふりくるしら雪の冬暮てく。

梅 が え

梅がえにうぐひす巢をくへや鶯風ふかばいかにせむ花に宿るうぐひす春の夜の月の梅がえにかゝりてはなもおほろに匂ひきていづれ分べき我袂おもひねの秋にかよひく

第七 松響閣箏話

るかほりはうきなやたゝん梅がえの夢ぢに心つくせり春風の吹ききてさそふ花やうめがえみし面影の散て行く名残に契るよの春。

四季のみだれ

後のよの春かけて植し庭の糸櫻さく色をわが見んとおもふ人ぞあだなるみじか夜の夢さめておも影も夏むしの身より餘るおもひをいかで人にしらすん秋かぜの吹落てをぎの葉わくる比しもさをしかの聲とともに長夜こりすつきかけふゆくれば草も木も人もかるゝ山里に雪間をわけてこととふは遠き寺のいりあひ。

亂 曲

手習のうき船きとの内のさびしさうぢの里をよそに見て匂ふ宮ぞ悲しきおもしろの五月雨や花橘のほひきて郭公音づれてみじか夜なれどねられぬ秋の花にとりてはいづれ色香まさらむ桔梗かるかや女郎花籬の内のしらぎく花散里のつれづれ絶々の琴の音に橘の袖のかに山郭公おとづれし。

秋 夏 曲